光よあれ

私たちは主のもの 42人の証しシリーズ第3集















光よあれ
私たちは主のもの 42人の証しシリーズ第3集
吉祥寺キリスト集会編

この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（Ⅰコリント　1・21）

光よあれ

私たちは主のもの　42人の証しシリーズ第3集

吉祥寺キリスト集会　編

はじめに

ゴットホルド・ベック

西ドイツには、今日、非常に多くの外国人が働いています。沢山の国から大勢の人たちが仕事を見つけるために、そしてより豊かな生活ができるようになるために、西ドイツへとやってくるのです。

そういった人々の一人に、ヨーゼフという男がいます。彼はエジプト人の学者ですが、結婚して二人の子供の父親であり、現在四十五歳です。彼はいろいろな人生の探究を通して、イエス・キリストを信じるに至った人であり、その経験を通して次のように言っています。

イエス・キリストを救い主として受け入れるという私の決断は、一夜にして下されたものではありません。私のそれまでの人生の中で、何か劇的な出来事が起って一挙にそうなった、というものではありません。そこに至るまでには、多くの苦しみと試行錯誤があったのです。

私はかつてはイスラム教徒でした。イスラム教徒として私が直面した大きな問題は、イスラム教の律法にありました。その律法は酷しく高い水準のものであり、回教徒である以上それに従って生活しなければなりません。それに加えて、時間的にも内容的にも、厳密に定められた祈りを捧げなければなりませんでした。私は、アラーの神を信じ、アラーに仕えたいと思い、要求されるすべての律法を守り通す覚悟をしました。

しかし、その結果はどうかといいますと、律法を守ることに繰り返し繰り返し失敗する、とい

う、無惨な結果に終ってしまったのです。

私はイスラム教が命じているように生活することがまったくできなかったので、いつも良心の呵責に責められていました。私はこの問題を解決するために、いく晩もいく晩もカイロの回教寺院でアラーに叫び祈りました。もちろん、その結果は失敗でした。

そこで私は、別の方法で問題を解決しようと考えました。次に私は、攻撃的で不寛容な回教徒となりました。このようにすれば、良心の呵責から逃げられる、と思ったのです。そしてアラーの恵みに浴することができる、と思ったのですが、その結果得たものは、索漠とした虚しい思いでしかありませんでした。

このことを通して、私はある日突然、「人間が守ることのできない律法は、決して神との平和をもたらすことができず、ただ、良心の呵責を引き起すだけである」ということが、はっきりと分かったのです。

この時から私は、ドイツの宗教改革者ルターと同じように、「私が駄目な人間であるにもかかわらず、私を恵みで包んでくださる真の神様をさがし求めよう」と固く決心したのです。

私の探索は、まずホメーロス（紀元前九世紀頃の有名な詩人）を読むことから始まりました。雄大な詩に登場する古代ギリシャの神々や人々は、私に多大の文学的感銘を与えました。しかし、それはしょせん、人間の豊かな想像力が生んだ「お話」に過ぎず、どう考えても、真の神、唯一の真理とは到底思うことができませんでした。

次に私は、ユダヤ教とエホバの証人という二つの宗教に取り組みました。これら二つの宗教に

私が見出したものは、まさしくイスラム教と同じような、律法によるがんじがらめの規則と命令だったのです。

最後に私は、やっと聖書にたどりつき、イエス・キリストに取り組みはじめました。聖書をまっすぐに先入観なしに読むことを通して私の前に立ち現われてこられた主イエスの姿。主イエスは、人間の努力や、手柄を全然要求なさらず、また律法を守ることも要求なさらず、ただ、信頼と、幼児のような信仰だけを要求なさっているのです。ここに、真理がある、そう思った私は、勇躍してキリスト者たちとの交わりを求め始めました。

しかし、そこでも私は、再びがっくりと失望することになります。「自分はクリスチャンだ」と口でも言い、毎週欠かさず教会に通っている多くのいわゆるクリスチャンの人たちに私は逢いましたが、何と彼らは、イエス・キリストについて、救いについて、ほとんど何も知ってはいなかったのです。そして私のかかえている問題についても、彼らは少しの理解も示してはくれませんでした。かえってその人たちよりも、私の方が聖書をよく読んでいたのです。今日、大勢の真理を求め、真の神をさがし続けている人々が、どれだけ多く、クリスチャンを不当にも自称する「名前だけのクリスチャン」によって、つまずいていることでしょうか。

しかし、真の神は、この段階を通しても私を導かれ、恵みを用意しておられたのです。

そんなことで失望し、悩んでいた私に、ある仕事の同僚が、救いの道についての読み物をすすめてくれ、また定期的に開かれている聖書の学び会へさそってくれました。その会に出てみて、私は長年尋ね求めていた世界に、やっとたどりついたことを知ったのです。

その聖書の学び会で、私は初めて本当のキリスト者との交わりを経験しました。そこに集っている人たちは、自分の欠点や罪を神の前に認め、イエス・キリストによるまことの救いを知っている人たちでした。彼らにとってイエスは、「道であり、真理であり、いのち」そのものでした。私は自分の傲慢さ、思い上った気持が、「真の神から離れている」結果である、ということを知り、そして、ただ神の恵みのみわざによってのみ、神との平和を見出せることを知りました。

聖書によれば、イエス・キリストは、世の罪を取り除く神の子羊ですが、これは同じように年に少くとも一度、神のための贖いの犠牲として子羊を殺さなければならなかった元回教徒の私にとって、非常に分かりやすい事柄でもありました。

今私は、イエス・キリストが私の身代りとなって私のために死んでくださったことを確信しています。

私はこのようにして、神との平和を見出しました。それゆえ、私は限りなく感謝しています。特に、主なる神ご自身の創造物に対する大いなる愛は、非常に大きな感銘を与えられました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じるものが、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

主イエスを信じ受け入れた時、私は救われたことを示すために洗礼を授けてもらいました。私は、長い間探し求めてきたもの、すなわち私の神、私の救い主、私の主を見出したことを深く確

信し、感謝しています。

以上は、かつて、長い間、真の神を求め続けながら虚しい試行錯誤を繰り返していた、一人の男の証しです。

このヨーゼフが苦労して見出したように、間違いなく主イエスは、巌のように固くゆるがない確信と、深い平安、そして絶えざる喜びを与えてくださいます。

このエジプト人であるヨーゼフは、聖書の福音が文字通り「喜びの訪れ」であることを身をもって知ることができました。彼は次のように言っています。「主イエスは、人間の努力や手柄を全然要求なさらず、また律法を守ることも要求なさらず、ただ信頼と、幼児のような信仰だけを要求なさる」と。このヨーゼフは、長い間まことの救いを求め続けました。そしてドイツで多くのクリスチャンにも会いましたが、彼らの大部分は、名前だけのいわゆる「クリスチャン」でした。というのは彼らは、一生けんめいで求め続け、心を開いていたたった一人の男ですら主のみもとへ導くことができなかったからです。

主イエスを個人的に知らない者は、罪の赦し、神との平和、永遠のいのちの確信を持っていない人々であり、彼らは単なる名前だけのクリスチャンに過ぎません。その人は教会の会員かも知れませんし、洗礼を受けて教会に通っているかも知れません。そしてまた、聖書を読み、良い生活をしようと努力しているかも知れません。しかしながら、主イエスを自分の救い主として個人的に受け入れないのならば、こういった人たちもまた、救いにあずかることはできません。

私は三十一年前に、初めて日本にやってきました。日本の状態は、まだ残念ながら多くの点で、私の祖国ドイツの現状と似ていると言わなければなりません。ここ日本にも、「私はクリスチャンです」と言う大勢の人たちがいますが、実際には主イエスを個人的にはまったく知らないという場合が多いのです。そして何年もの間、そういう人たちは救いの確信を持たないまま、教会に通っています。これは何という悲劇でしょうか。数え切れないほど大勢の人たちが、こういった「救われていないクリスチャン」の状態に留まり、そして自分だけではなく、救いを求めている人たちにつまづきを与え続けてきたのです。

今日の「組織された宗教団体としてのキリスト教」は、多くの場合、推奨されるに価しません。なぜなら、それはもはや人間の手によって生み出された「宗教団体」になりさがっていることが多いからです。このような団体は、会員を増やし献金を多く集めることに懸命になっています。（いつの時代も、「宗教」はよく儲かるものなのです。）しかし、そのような「宗教」は、生ける真の神の救いのご計画とは、何の関係もありません。

「今日、世界が必要としているものは、イエス・キリストです。主イエスだけが人間を真に解放し自由を与えることがおできになるのです」と、ドイツの聖歌にうたわれています。

この世界、そしてあなたも、いわゆる「キリスト教」ではなく、主イエスを必要としています。

この「光よあれ」第3集でもまた、人生のまっただ中で、あなたと同じような苦しみと悩みを持ちながら闘わなければならなかった人たちが登場します。けれども誤解していただきたくない

ことは、この人たちが、読者であるあなたに、「何をなすべきであるか」というような忠告をしようとして、これらを記したのではない、ということです。彼らは、私たちの渇きをいやしてくださり、私たちを決して失望させることのないお方、すなわち世の救い主、主イエスを見出したことを証しし、その喜びを伝えたかっただけなのです。

昨日も今日も永遠に変わらないこの主イエスが、あなたにも、こう呼びかけておられます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい（いわゆるキリスト教団体に参加しなさい、ではないことに注意）。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

（マタイ　11・28）

目次

はじめに……7

光よあれ　私たちは主のもの　42人の証し　第3集

1　すべては光の中へ……尾崎　英昭　17
2　天国を望み見て(夫の証し)……江藤　善清　34
3　主に導かれて(妻の証し)……江藤　恵子　47
4　とこしえの磐……蘇畑　卓郎　65
5　初めに神が天と地を創造した……家辺恵美子　93
6　荒野に水わく(夫の証し)……白木　慎一　125
7　十字架のことば(妻の証し)……白木　翠　138
8　主のご真実に支えられて……納富　信子　151
9　主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな(夫の証し)……武井　達郎　175
10　主は私のいのち(妻の証し)……武井　生子　193

目　次

32人の証し（カラー刷り）……97～112
・神の知恵…高橋麟／聖書のみことば…高橋米子
・主に生かされて…伊野豊／主イエスよ来てください…伊野朱美
・生きておられる主…後藤隆／虚しさと寂しさからの解放…後藤文永
・若き日に創造主を覚えて…川村規之助／神様に運ばれて…川村美喜枝
・イエス様に従って…小川暢義／神様ありがとうございました…小川貴美子
・かえりみて主の道に…石井寿雄　・真の神に出会った喜び…木口英子
・真の安らぎを求めて…池尻美佐子　・心の平安を得て…今川三枝子
・神に支配される人生へ…片本博　・主に受け入れられた私…山本いづみ
・神の恵みに感謝…野口クリ　・もう趣味はいりません…矢野雅子
・主の恵みは十分です…黒田百合　・なくならない希望…池田潤太
・わたしが主であるほかにはいない…櫻井道子　・神の愛に守られて…田中美保子
・いやし主神の愛とめぐみ…高田英彦　・生も死も主の御手の中に…小山佳子
・主は我が喜び…高橋久美子　・主は私を広い所に置かれた…松本明美
・天に宝を…村上誠　・生きる土台に…財津康子
・人生の目的…上野亘　・見つけ出された迷える小羊…阪本良子
・神様の平安のうちに…宮田登美　・いと静けき港につき…笠井庸三
みこころが地でも行なわれますように　ゴットホルド・ベック　215
あとがき……230
基礎的なみことば……237
「実を結ぶ命」のおすすめ…239　「光よあれ」第1集のおすすめ…241
「光よあれ」第2集のおすすめ…243　次号予告…245
近刊「ローマ人への手紙の学び」…246
全国のキリスト集会のご案内…247



すべては光の中へ

尾崎英昭

一九四二年愛媛県松山市に生れる。福岡市立警固小、警固中、県立福岡中央高、県立広島皆実高を経て早稲田大学第一商学部卒。現在㈱千代田経営会計事務所に勤務。趣味はテニス、囲碁、野球。家族は妻静子さん、長男千馬君。家庭集会　浦和市道場三―五―一―八〇六　電話〇四八八―六六―三二八九（毎二、四土曜日八時）

◀1977年6月26日、妻静子さんのバプテスマ（洗礼）の日に。

主に感謝を

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

昭和五十六年十一月の軽井沢バイブルキャンプでの、ハレルヤホームに掲げられていたみことばです。このみことばを背に、池田伝一さんの証しを聞きながら、私は「イエスさま、やっとあなたのもとに来ることができました」そう心の中で叫んだ時、思わず涙が溢れそうになってきたのです。そして今までどうにも解決がつかなかった焦燥、怒り、不満、不平、私の中に渦まいているありとあらゆる思いがこの時一気に解消されたようでした。何とも形容し難い心地よい疲労感を覚え、肩の荷がどっとおりたような気がしました。

イエスさま、長い間私はあなたに敵対し、自分勝手な道を思いのままに歩んでいた者ですが、そのような者でさえも、あなたは愛とあわれみとをもって導き続けてくださっていたことを、心から感謝します。

多くの集会のみなさんを通しての暖かい祈りの内に、私を覚えていてくださり、滅びへの道から救い出してくださいましたことを心から感謝します。

罪にまみれた私のために十字架の苦しみを受けてくださり、その愛をあますところなく示してくださいましたことを心から感謝します。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。

（ヘブル　13・5）

この聖書のみことばの通り、私たちの家庭の中心にイエスさまがいつもいてくださり、喜びと平安を与えてくださっていることを心から感謝します。敬愛する集会のみなさんとともにイエスさまを賛美できる幸せを、心から感謝します。

妻の受洗

かつて私は無神論者であり、神を信じる人々を嘲ける者でした。神に頼って生きている人々を軽蔑しておりました。この世で最も確かなことは、自分の目で見たこと、また過去において体験したことであり、それらの経験に裏打された自分自身の判断力を信頼することであったのです。従って誰も見たこともない神を信頼するなど、私にとってはまさに狂気の沙汰であったのです。

ただクリスチャンに対しては、清潔なイメージを昔から持っていたことは確かです。しかし、それは他人ごとであり、私にとっては神の存在など、どうでもよいことだったのです。今から約8年ほど前になりますが、妻が突然洗礼を受けたいと私に打ちあけました。教会に通っていることは知っておりましたが、まさか洗礼まで受けるなどとは夢想だにしていませんでした。洗礼の日には私にも一緒に来てほしいと希望していましたが、私にはまったく無縁の所に思えたので、すげなく断わりました。洗礼式の日の朝、現在は転勤のため大阪におられる坂本良子さんから、妻の洗礼式に立ち会うようにと電話をいただきました。気乗りがしないものですからお断りしますと、坂本さんはかなり強い口調で、「奥さんの人生の一大事に、あなたは一体、今何をしているのですか」と強く吉祥寺集会に来るように勧められたのです。子供の幼稚園が一緒ということ

もあって、今後のおつき合いのことも考え、しぶしぶ集会に出かけました。

しかしその集会で、神の前に声を出して祈っている人々を見た時、何とも奇妙な違和感を感じこの人たちは何か勝手に自己陶酔しているのではないかと非常に驚きました。今まで自分をとり囲んでいる環境と、あまりにもかけ離れた世界がそこにあったのです。妻は大変な世界に入りこんでしまったと、私はただ唖然として洗礼式を見ておりました。聖書を勉強することはよいことには違いないと思っていたのですが、それはあくまでも知識や教養を高める書物としての意義を認めていただけでした。まさか自分の一番身近かな妻が聖書を信じるなど、夢にも思わなかったのです。だんだん妻が別人に見えてきはじめ、信仰に対する薄気味悪さを感じ、何やら得体の知れないものが手の届かない深い所で動きはじめているような不気味さをその時感じたのです。帰り道、私は妻に尋ねました。

「キリストの復活を信じているのか」

「聖書のみことばはすべて信じています」と妻はさも当然のように答えたのです。

神への敵対

死んでしまった人間が三日後によみがえるなど、あまりにも馬鹿げて見える話を、すべて信じこんでいる妻に対して、私は、「とうとうすっかり洗脳されてしまったな。困ったもんだ」と不安な気持を持ちました。宗教は麻薬と同じで、一度とりこにされたら、もはや取り返しがつかなくなるほど分別がなくなるものだと、その時思いました。駅や街頭で布教用の印刷物を配ったり、

家庭訪問しては新聞を売ったりしている宗教団体を見かけることがありますが、自分の妻が幼い子供を連れて、そのようなことをするようになっては困ると思い、吉祥寺キリスト集会というものの組織は一体どうなっているのか、また集会を維持するための資金はどこから流れてくるのかなどを質問してみました。これだけ大勢の人々が集まれば誰かが強力なリーダーシップをとっているに違いない、そうでなければ運営もスムーズにゆかないはずだと思えたのです。中南米のある新興宗教で、教祖と信者が毒薬を飲み、数百人の人が一度に死亡した事件が脳裡をよぎりました。教祖がガンに犯され、信者を道連れにした集団心中ではないか、との報道も流れました。私は、宗教団体とは、教祖あるいはリーダーが、神さまの名のもとに信者を利用しているだけの集団ではないかという疑念を、強く持っていました。しかし、これらの私の疑惑に対し、妻は、次のように答えたのです。

「この集会は神さまだけが中心であり、すべては神さまがなしてくださいます」。

そして、宗教と信仰とはまったく別のものであり、宗教は人間が作ったもので、本当の信仰は、神との交わりのなかに保たれるというような説明をしてくれました。しかし私には神さまの存在自体が信用できないのですから、これらの説明を受けても、その違いなどさっぱり理解できないわけです。私にとって神さまとは、一種の自己暗示から生じてくるものであり、それはそれで信ずることによって気が安まればまことに結構な話だと、まったく他人事として考えておりました。色々な悩みや苦しみや困難の中にあって、何かにすがりたい気持の人々にとっては、いかようにも自分の都合にあわせてその場その場で神を作ればよいのだから、ちようど願ったりかなったり

の都合の良い相手が神さまだと思っていたのです。私は自分がやる気になれば何んでもできると思っていましたので、神に信頼するという発想はまったくなかったわけです。この世で頼れるのは自分自身だけだとの思いが強かったため、他人の意見などは私にはまったく無意味なものであり、むしろ相手の心を傷つけても自分自身だけ都合がよければそれでよいという、傍若無人なタイプの人間であったのです。人間の尊厳など一切無視していたわけです。

私は、人間はこの宇宙にまったく偶然に発生した微生物の一種であり、その生死もただ歴史の輪廻に従っているだけで、いずれはかつてのマンモスのようにこの地球上から滅びさる運命にある、と考えておりました。たとえば赤痢菌は、試験管の中で培養すると猛烈な勢いで繁殖するそうですが、やがては自分の排泄物で滅びてゆくという話を、以前聞いたことがあります。地球と人間の関係も、この赤痢菌と試験管の関係に類似しているように思えていたのです。

「私はどうせ滅びゆく人間の一人なのだ。神がいたところで、私と何の関わりがあろうか」。このような性格の私と、神さまに従う決心をした妻とでは、まるで水と油の関係になってしまっていたのです。

不快指数の増大

妻の日常生活に明らかな変化が起ってきました。何よりもまず神さまを第一とする態度をとり始めたのです。そのうち、子供をつれて日曜日の礼拝だけでなく、火曜水曜の学び会、木曜の祈り会にも出かけるようになりました。週に四日間も集会に集うようになったわけです。私が仕事

から帰っても集会に出かけており、一人で夕食をすますことがしばしばあるにつれ、私は次第に妻に対し不快感を催すようになり、口論が増してくるようになりました。信仰以外に関心のない妻の考えを変えることは無理としても、一人息子のために宗教や信仰というものは絶対に教育上よくないことだと考えておりました。苦しい時の神頼みで、忍耐や覇気が子供に無くなったら、ひとたび困難に出くわした時一体どうして生きてゆくのだ、という気持が強く働いていました。

この世は自分自身だけが頼りなのだから、小さな子供の時から他人にすがるような教育をすると、大人になっても頼りない人間になってしまうと憤懣やる方ない気持でいっぱいだったのです。私が忌みきらうこのような社会に妻と子供が通うようになり、しかも外国の神さまを礼拝するのですから、私の不快指数は増すばかりで、ついには妻の顔を見るだけで腹が立つようになってきたのです。顔を見ると腹が立つので、できるだけ顔を会わせる時間が少なくなるよう、夜遅くまでやけ酒を飲み、毎日毎日午前様になって帰宅するようになりました。このような状態が五年近く続きましたが、まさか恋愛結婚の結果がこのような荒んだ家庭となってしまおうとは夢想だにしませんでした。この時は実に暗たんたる思いでした。家庭をこのような状態に追い込んでおきながら、「神は愛なり」とは、聖書はとんでもない代物だ、と思いました。

そのうち妻から、一緒に吉祥寺集会へ行かないかと誘われました。私がこれほどまでに不快な思いをし、反対もしているのに、さらに私自身を集会に誘うなどとんでもない女だと思い、即座に、「私は行かない。宗教は私には全く必要のないものだ」と言いました。

「宗教と信仰とは違うのです」

と妻は説明してくれたのですが、もはや私は一切聞く耳を持っていなかったのです。私の身に直接ふりかかってきたものですから、理由がどうであれ、ただキリスト教が無性に憎くなるばかりです。妻との口論が増えるにつけ一人息子は心配そうな顔をして私たちを見つめています。

そのうち妻は私のために聖書を買ってきてくれたのですが、私は一切無視し続けました。夫婦仲はだんだん険悪な雰囲気になる一方でした。このような状態になったすべての責任は、妻にありまた吉祥寺集会にあると思うようになりました。当時杉並のアパートに住んでおりましたが、「集会場に近すぎるためにこんなことになってしまうのではないか？　転居すれば気分転換にもなるだろうし、集会にも行けなくなるのではないか？」と思い、強引に現在の浦和に引越しました。日曜日にはそれでも妻子とも吉祥寺集会へ礼拝にゆきます。火水木曜日の会には、さすがに時間的に通いきれなくなりました。これでいくらかでも自分の家庭がとり戻せたと思ったのですが、現実は以前にもまして、ひどい状態となってしまったのです。学び会、祈り会にも行けなくなった妻は、前にもまして聖書に熱心になるではありませんか。朝目を覚ますと妻はすでに聖書を読んでいます。午前様で帰宅してもそれでも聖書を読んでいます。私は朝から晩まで、いつも不快な気分でいなければならないわけです。特に朝の不快感はその日一日を支配してしまいます。このような家には帰りたくないという思いがつのる一方です。このままの状態ではお互いに傷つくばかりで、もはや別れなければ解決の道がないように思えてきました。

夢の啓示

このような時、私はある晩不思議な夢をみたのです。私の目の前で突然、ものすごい渦を巻いている大きな竜巻が発生したのです。その竜巻を見た瞬間、私は思わず神様がやってきた、と思い、必死になって逃げました。その竜巻は私を追いかけて来て、私の目前で止ったのです。その時竜巻は大音響とともに、私に呼びかけたのです。

「お前はいつまで妻を苦しめているのか。私の言っている事がまだお前には解らないのか」

私はその声を聞いた瞬間、神の怒りが私の上にとどまったような気がしたのです。

目覚めた瞬間、私は全身に鳥肌が立ち、何ともいいようのない不気味な気持ちに襲われました。

この夢から数日経って、妻から、

「家を出ます」

と話があったのです。

「何故だ！」

「この家には私の居場所も寝る場所もありません。今私は、乞食の心境が良く分かります」

と妻は答えました。

私との五年近くに及ぶ確執の末に、妻はもはや私との生活はこれ以上無理だと判断したようです。家を出てこれからどうするのだと聞きますと、

「私のことは心配いりません。私はイエスさまに従って生きてゆきます」

と返事が返ってきたのです。ボストンバッグ一つ持って、悄然として家を出ようとしている妻を見た時、私はこの五年間の殺伐とした家庭のことや、いままで神の名のもとに妻と敵対していた

自分を、思わず省りみざるを得なかったのです。イエスさまに従いたい妻をとるのか、家庭の崩壊をとるのか、私の目の前にいずれかの選択が突き出されたのです。

今まで何一つ世間なみのことをしてあげることもなく、ただ苦しめ悲しませることしかなかったことを思うと、本当にかわいそうなことをしてしまったと思いました。別れることしか解決の道がないと思っていた私に、その時、あの夢の声が響いてきたのです。

「お前はいつまで妻を苦しめているのか。私の言っている事がまだお前には解らないのか」

瞬間私はまるで電気に打たれたような気持ちでした。まったく別の次元の世界へつれて行かれたようでした。いままであれほどまでに神に敵対していた私に、何が何だか分からない、まったく別の魂がどっとなだれ込んできたような感じでした。気がついた時、私は妻の前に、今までのことを謝っていたのです。それと同時に、私もこのように妻が慕っているイエスさまを知ろうという気持が起ったのです。

絶望的な別れの瀬戸際に、神は救いの手を差しのべてくださっていたのでした。その日はちょうど土曜日であり軽井沢バイブルキャンプがある日でした。子供が学校から帰ってくるのを待って、予約なしのまま家族そろってバイブルキャンプを尋ねることになりました。夕方に到着しハレルヤホームに入った時、私の目に飛び込んできた文字が冒頭に記したみことばだったのです。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

夜になり池田伝一さんのお話しがありましたが、真に素直にありのままの心の状態をお話しになりました。さまざまな人生の試練を受けてもなお、人は神の前に、このような素直な態度がとれるのか……と痛感せずにはいられませんでした。また、夜十時のお茶の交わりの時には、多くの人々が非常に暖かく迎えてくださったことは本当に感謝でした。堅く閉ざされていた心がその暖かさにひとつひとつほころびてゆくのが自分でも手にとるようによく分かりました。

聖書を読む

この時から私は、聖書を読み始めました。最初創世記から読み進めましたが、あまりにもぼう大な感じで、途中から新約聖書「マタイの福音書」にきりかえて読み始めました。マタイの五～七章を読んだ時、イエスさまの教えに圧倒されてしまったのです。この箇所は、人間による言葉ではないと思えたのです。まさに聖書のいうとおり、権威ある者のように教えられたイエスさまに目をみはる思いでした。聖書を読み進めるうちに、イエスさまが次のように私に呼びかけておられるのに気づきました。

私について来なさい。　（マタイ　4・19）

わたしの心だ。きよくなれ。　（マタイ　8・3）

耳のある者は聞きなさい。　（マタイ　11・15）

しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。

（マタイ　14・27）

このイエスさまの呼びかけに、何と長い間、私は神から遠く離れ、またずっと敵対した態度をとっていたことでしょうか。罪とは一体何なのか、それが少しづつ理解できるようになってきました。かつてベックさんが、「あなたは神から遠く離れています。あなたはもっとも大きな罪を犯しているのですよ」と私に語られたことが、やっと理解できるようになったのです。

私はそれまで、まるでルカの福音書8章に出てくる、悪霊によって荒野に追いやられていたレギオンのような存在だったことが、聖書を通して示されました。このレギオンは「長い間着物も着けず、家には住まないで、墓場に住んでいた」（ルカ8・27）と聖書に書かれている人物です。私は自分がこのレギオンのように、まるで裸であることに気がつかず、家庭を省りみず、自分勝手な気ままな生活をして、遊興、酩酊といった滅びにいたる死の道をまっすぐに歩んでおり、そこには真暗な墓場しか用意されていない自分自身に気がついていなかったのです。私は、

いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのです。お願いです。どうか私を苦しめないでください。

（ルカ　8・28）

と叫んだレギオンそのものでありました。聖書を読んで初めて、自分が一体何者なのか、今自分はどこにいるのかがやっと分かるようになってきはじめたのです。それと同時に、自分の罪の根深さをいやというほど思い知らされたのでした。日常生活の中で、次から次へと飽きることなく、

罪の性質が私をおおってくるのです。息のつまる思いになり、しばらく聖書から遠ざかろうと思いました。

あなたの罪は赦された

この頃、また、不思議な夢に出あったのです。

うす暗い地下の会議室のような所で、妙な呪文を唱えている、うす気味の悪い集団の末席に、この私も座っているのです。それがどのような連中なのか、まわりを見まわしても暗くてよく判別できません。ふと天井を見上げると、うす暗いろうそくの光に照らされて、何と、上座の中心人物のうしろから、まっ黒い手の影がまっすぐに私の方に伸びてきているのです。恐怖にすくんだその時、部屋のドアが開いて、私の妻が手にランプを持って入ってきました。妻は明るいランプをかざしながら、私の頭上に迫っていたまっ黒い手の影を、順々に上座の人物のうしろまで、すっかり消していってくれたのです。

目が覚めた時、無神論者であった私が竜巻きの夢を見て神さまだと思ったこと、また今回の夢を見たことなど二度までもこのような不思議な夢を見たのは、神さまが心の鈍い私に対してこのような方法で啓示を与えてくださったのではないかと思えてきました。

子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。（マタイ　9・2）

私はこの夢によって、「私の罪は赦されているのだ」と、確信を持ったのです。

長い間神から遠く離れ、また敵対さえもしていた私に対し、イエスさまは私のために神にとりなしをしてくださっていたことを知ったのです。

十字架の上でイエスさまはこう言われました。

父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。

（ルカ　23・34）

イエスさまを釘で打っている音が、私の胸いっぱいに広がってきました。

イエスさま、罪そのものである私のような者のために、あなたは十字架上で苦しまれたのですか。

イエスさまによる罪の贖いを知った時、私はただ感謝で涙するばかりでありました。その時、

イエスの足もとに、悪霊の去った男が着物を着て、正気に返って、すわっていた。

（ルカ　8・35）

その自分を、見出したのです。

主に従う

私のために洗礼を待ち続けていてくれた当時小学生四年の息子とともに、私は、昭和五十七年二月七日洗礼を受けました。思えば別離の絶体絶命のピンチに、妻がイエスさまを心から慕い続け呼び求めた時、イエスさまは私たちの家庭にご自身を現わしてくださったのでした。

神に対し、私がどんなに傍若無人であったか、今思い返しますとまったくひや汗ものですが、そのような私に対しても、神は愛と忍耐をもってずっと私に手を差しのべておられたのです。また吉祥寺集会のみなさんを通して神は私にその愛を充分すぎるほどに示してくださいました。私のために主に祈り続けてくださっていた集会の皆さんに心から感謝いたします。

聖書を読み進めるにつれ、私がいかに罪の奴隷であるか、そして悔い改めのない限り私の前には滅びの道しか用意されていないことを知らされたのです。私はそれまでは人よりは自分の方が目がよく見えるとさえ思っておりました。

イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです」

（ヨハネ　9・41）

自己中心的な基準で物を見また判断する時、私はそこに罪の奴隷となっている自分を見い出すことができます。今私は、聖書は神の啓示によって書かれた信頼するに足る書物だと確信しています。なぜなら私は日常生活の中で主のご臨在を知ることができ、多くの主を信じるみなさんを通して、主のご栄光を見ることがしばしばあるからです。私たちのすべての基に聖書がある時、そこには愛、喜び、平安があることを体験的に知ることができたのです。

かつては神とは「苦しい時の神頼み」として、どうでもよい存在としか考えていなかったのですが、これはとんでもない私の認識不足だったのです。

イエスさまは大切な第一の戒めとして、私たちに次のように言われています。

「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ」

（マタイ　22・37）

私たちのすべてを神の前に注ぎ出しなさい、とこのみことばは語っています。私たちをとりまく環境を見る時、そこにはありとあらゆる誘惑が待ちかまえています。

あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

（Ⅰペテロ　5・8）

とみことばにありますが、このような状況の中で、主を喜ばせることがいかに大変なことか、身をもって今体験しているところです。そして何にでも興味を持ちたがる子供たちにとっても、何よりもまず主を愛することは、そして無益なものを捨て去ることは、まことの生き方を学びとる有益な試練となります。

聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。

（Ⅱテモテ　3・16）

いま私は、すべての中心に聖書が位置すべきだと思っています。私のこれからの人生においても、神の永遠不動のみことばにより頼みながら生きてゆきたいと思っています。人の言葉や態度

や判断は明日にも変ります。一寸先はまさに闇の中です。人が創り出すものはすべて、砂上の楼閣のような不安定なものです。

聖書は語っています。

「人に従うより、神に従うべきです」（使徒　5・29）

すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうかこの神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。（ローマ　11・36）

天国を望み見て

（夫の証し）

江藤善清

一九三六年福岡県に生れる。植木小、植木中、鞍手高、東京大学教養学科卒業。東芝入社。二年後フルブライト留学生として米国カリフォルニア大学大学院に学ぶ。一九六五年東芝退社、スペイン政府招聘留学生として、マドリッド大学留学。

帰国後、欧米の新商品・新技術導入を軸にして、商品・事業の開発コンサルタント業務を開始、現在に至る。家族は妻恵子さん、長男尚広さん、長女朋加さん、次男義道さん。

家庭集会　武蔵野市吉祥寺東町一―十三―一　電話〇四二二―二二―八四四六（月一回第三土曜夜）

なお奥さまの恵子さんの証しは次にあります。

▼今村元一さん、扶貴子さんの結婚披露宴を司会中。1982年5月15日。



あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

（マタイ　6・27）

「ゴックン」。

朝、口を洗って、最後にほんのわずかばかり口の中に残っている水分をノドの奥で飲み込みました。変だ。何か変だ。おかしいなァ、と思いながら二度三度、続けて同じようにノドの奥で空気とツバキを飲み込みました。「グーッ」「グーッ」舌の奥の部分が、ひきつるようにノドの奥の方に引き込まれ、つっかえる感じがします。しかも、かなり強くつっかえます。何度繰り返しても同じように異様につっかえる感じがします。今までの永い人生で一回も体験したことがないノドの奥がふさがるような異様な感じです。

「変だなァ……どうしたのだろう」と思いながらタオルで顔を拭いて、拭き終えた瞬間、衝撃的な二つの文字が頭の中をつっ走りました。「ガンかも知れない」。

二年前のある冬の日のことが稲妻のように鮮明に脳裡によみがえってきました。その日私は、花束を持って沈んだ気持ちで、横浜にある大きな市立病院に向っていました。仕事で関係のあるM社のF取締役を見舞うためでした。このF氏はスケールの大きな男性的な性格のキレる男で、会社が頼りにしている人物でした。社長からの期待も、部下からの信望も一番厚い存在でした。この会社の開発の仕事に、コンサルタントとして参加していた私とも、一番ウマが合いました。年齢的にも、ほぼ同じ位でした。

このF氏が舌ガンにかかっていることが判明し、急遽、横浜市立病院で手術を受けることになったという知らせを聞いて、私の心は疼きました。あれほど皆から頼りにされている未だ四十代の男盛り、仕事にも油が乗りきっていた男がガンになるとは……。小学生と中学生の二人の未だ小さなお子さんを持って、本人は、奥さんは、どんな気持だろう……。医者の話によれば、「大分進行している」とのことらしいので、あるいは……。せめても天国に行って欲しい……。複雑な思いで病院のエレベーターに乗り、四階の病室を探しあて、沈鬱な気持ちで、恐る恐るドアをあけました。

F氏は、舌の三分の二を切除するという七時間にわたる大手術を受けて、二週間ほど経っていました。身体の他の部分は健全なのでベッドの上で起き上っていました。その姿は、少し前まで会社で張り切って難かしい仕事と取組んでそれを生き甲斐にしていた男の姿ではありませんでした。身体全体が二回りも小さくなっていて、うら淋しい雰囲気を漂わせていました。本人は意識的に精一杯明るく振舞おうとしている、その気持が痛いほど伝わってきて、一層私の心は疼きました。F氏はその後、退院・入院を二回ほどくり返して舌ガンとの壮絶な戦いを続けた後、六ヵ月後に亡くなっていきました。私は大切な友を失いました。

そのF氏がかつて最初の入院の一年ぐらい前、モノを飲み込むと舌の奥がつっかえるような気がする、と言っていたのを思い出したのです。

「モノを飲み込むと、舌の奥がつっかえるような気がする」……F氏の肉声が何回も耳の奥でこだまして聞こえてきて、私の今朝の生れて初めての体験と結び合わさって、私の頭の中には、

瞬間的に一つの図式が出来上りました。「自分は舌ガンかも知れない」。

私は生れて初めて死と直面しました。死は、それまでの自分にとっては、いわば遠いものでした。自分のこととして、本当にリアルに考えたことはありませんでした。漠然と、自分もいつかは死ぬであろう、とは考えていました。しかし、その「いつか」は、常に非常に漠としたものでしかありませんでした。

だが、今、本当に数ヵ月の内に自分が死ぬかも知れない、と真剣に思わざるを得なくなりました。東京・大塚にある癌研病院に行く準備をしながら、色々と考えました。そして、今さらながらクリスチャンであることの有難さを、しみじみとかみしめました。

私たち人間は、生れた瞬間から一日一日、死に向って一歩一歩近づいています。遅かれ早かれ、私たちは例外なく皆死んでいかなければなりません。力士やプロボクサーのようにどんなに体を鍛錬しても、昔の王様が絶大な権力と金力で不老長寿の妙薬を探し求めても、死に対しては全く無力であります。死ほど、確実にやってくるものは他にありません。あと百年もすれば、今、この地上に生きている四十数億の人間のほとんどが死んでいるはずであります。そして、百年という期間は、一見長いようで、過ぎてしまうとアッという間であります。

死と直面すると、人がこの世で持っているもの…どんなに豊かであることも、どんなに権力や名声に富んでいることも、どんな事業を成したということも、どんな業績をあげたということも、すべて意味がなくなります。人生のどんな問題も、この世の価値観も、死の前では無限に価値が薄くなってしまいます。

死と直面し対決すると、人間は、結局一人ぼっちであります。どんなに愛する妻も夫も、親も子も、助けることはできません。「自分の死」に対しては、自分一人で立ち向わなければなりません。他の者は全く介入できない領域であります。

この絶対に避けることのできない死、自分一人ぼっちで立向わなければならない死、何物にも助けてもらえない死に対して、私たち人間があまり真剣に準備しないのは本当に不思議です。

考えてみれば、私たちの人生は、多分起るかも知れないと予測することに対しての準備、準備の連続であります。幼稚園に入るのは小学生になるための準備、小学校に入るのは中学生になるための、中学校に入るのは高校生になるための、高校に入るのは大学生になるための、そして、大学に入るのは社会人になるための準備であります。また社会人になれば、結婚するための準備、家を持つための準備、子供を育てるための準備、子育てが終れば今度は自分たちの老後のための準備、その間に、もっとこまかくみてみると、地震・火事などの災害に対しての準備、○○の会合のための準備、△△の受験のための準備、××の旅行や催し物のための準備、お客を迎えるための準備……私たちの一生は、準備の連続であります。

ところが、これらの事柄は確実に起るかどうか判りません。急に事情が変って会合や旅行が止りやめになったり、気が変って受験を止めたり、お客が急に来ないことになったりするのはよくあることであります。もし自動車事故にでも会ってポックリいけば、その後の一生の間に必要だろうと思って準備していたことは全部無意味となってしまいます。

私たちは、多分起るかも知れないと思うことに対しては、一生懸命準備をするのに、絶対確実

に自分に起る死について真剣に準備しないのは、全く不可解であります。しかし、その秘密は、神のことばである聖書を見れば判然とします。私たち人間は、死後の世界に対して潜在意識的に恐れを感じ、無意識的にそれを考えることを避けているのではないでしょうか。

聖書の中の「ヘブル人への手紙」の中には、次のような驚くべきことが書いてあります。

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。（ヘブル　9・27）

私たちが死ぬことが確実であるのと同様に確実に、私たちは死んだ後にさばきを受ける、というのであります。私たちは死んだ後、たった一人で神の前に立ち、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受ける、つまり、さばきを受けるというのであります。そして、イエス・キリストの言葉を信じ、キリストが十字架について死んだのは、自分のこの世での多くの罪を神に対して償うためであった、ということを信ずれば、恐ろしいさばきに会うことがなく、逆に、「永遠のいのち」をいただいて、私たちの小さな頭では到底理解できないほど素晴らしい天国に行くことができる、そこには、もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない、ただ、賛美と喜びのみが永遠に続く、神とその右に座するイエスさまのお膝元である、というのであります。

だから神を信じ、神の一人子であるイエス・キリストのみことばを信じ、救われて天国に入りなさいと、宇宙を創造された神は、私たち一人一人に聖書を通して優しく愛をもって語りかけてくださっています。

あなたはあなたの神に会う備えをせよ。　（アモス　4・12）

私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。　（Ⅱコリント　5・10）

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。　（ヨハネ　5・24）

見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。　（黙示録　21・3、4）

「人は死んだらどうなるか？」これは人類始って以来の最大設問でありましょう。そして、どんな科学も宗教も、人々に対して納得のいく答えを出していません。ひとり、聖書のみが極めて明確な答えを提示しています。そして聖書は、紀元前三五〇〇年以上昔から聖書を通してなされた無数の預言と、それらの事柄がすでに九十数パーセント歴史上実現していることをもって聖書自身の正しさを主張し、死後の世界のことは見ていなくても聖書のいうことを信じなさいと私たち

に迫ってきます。

私たちは信じるか信じないか、二者択一の決断をしなければなりません。聖書と神とイエス・キリストを信じて、「天国」行きの列車に乗るか、反対に、「地獄」行の列車に乗るか、この世に生きている短かい間に決断しなければなりません。「地獄」とは、神のあらゆる恵みから完全に永遠に隔絶された状態であり、太陽、水、空気、自然、自分の身体の健康などといった神の恵みがすべて剝奪された恐るべき状態に、人は意識と知覚を持ったまま永遠にいなければならないという、私たちの想像を越えて恐ろしいところであります。どちらの列車も超特急で死んだ瞬間にそれぞれの目的地に着き、いったん目的地に着いたら絶対に永遠に引き返せない……。

これは私たちにとって、人生最大のカケであります。このカケは他のどんなカケとも異なる特異なカケであります。結果が初めからハッキリしており、良い結果と悪い結果の差がこれほど大きなカケは他にありません。また、誰でも、自分の意志で「良い結果」の方に、価なしでカケることができる極めて特殊なカケであります。ただ良い結果にカケるには、たった一つだけ条件があります。自分の罪（神を無視し、自己中心的であること）を認め、神を求めたいという心が必要であります。

私も学生時代から、わずかながら神を求める心を持っていました。この世の人生だけでは何となくいつもむなしい。自分が当面自分の人生の最大目標と思って努力してきたことを苦労の末手に入れることができると、しばらくは嬉しいものですが、数ヵ月もすると、それも当り前となって有難味が薄れ、また何となく心に秋風が吹き始めます。

また、末っ子で、甘やかされて育てられていましたからわがままで、社会に出てわがままを通そうとするけれど思い通りにはいきません。いずれも自分のわがままに起因する、他の人々との色々な軋轢を通して、自分の性格の嫌な面をつくづく認識させられてもいましたので、何か自分を濾過してくれるようなものを絶えず無意識の内に求めていました。

ちょうどその頃、東京阿佐谷の教会で、アメリカ人の宣教師ミス・ウィリアムスに出会いました。彼女は、その心においても容姿においても、こんな清楚な美しさの人がこの世にいたのか、と驚くほどの素晴らしいクリスチャンでした。そうだ、自分もミス・ウィリアムスが持っているあの清楚な美しさを少しでも持ちたい、自分もあのように平安で心の深いところに喜びを秘めた、どんな境遇にあってもいつも喜び感謝している、あの美しいクリスチャンのようになりたい、と強く惹かれました。今思うと、彼女を通して神の素晴らしさを垣間見、神を求め始めた頃でありました。

その後スペインに住むこととなり、一年間の大学留学の後マドリッドで仕事を始めることになりましたが、総合商社の駐在員のように大きなバックがあるわけではなく徒手空拳の身ですから仕事上の不安感が絶えずあり、いつも精神的にイライラしていて、スペイン人と喧嘩をしたり荒れはてた精神生活に堕していきました。三年半のスペイン生活の後、仕事の都合で帰国することになり、家内と二歳半になる長男を南仏マルセーユから船に乗せて帰し、私は単身、南回りの飛行機で帰途につき、各国を訪ねて仕事をしながら帰ることになりました。一人になってから非常に強く孤独感に襲われ、心は暗い淵に沈んでいく思いでありました。

インドのボンベイに着いて、かねて紹介してもらっていた宣教師レイ（イギリス人）と、ロン（アメリカ人）のオフィスを訪ね、両宣教師と話しているうちに、突然涙と鼻水が、とめどもなく溢れ出てきて、顔中くしゃくしゃになってしまいました。その時、どうしてだか、自分でも判りませんでしたが、淋しく貧しくなっていた私の心を神はあわれんでご自身を啓示してくださり、私がそれまで神を無視し自分本位の思いで歩んできたそのような生き方に本当の心の喜びも平安もないことを示してくださり、ついに神の前にくずおれた自分の姿だったことが後になって段々と判ってきました。長い精神のさすらいの末、ついに神とイエス・キリストに出会うことができました。暗い、淋しい深い淵から引き上げられる思いがしました。その時の喜びは言葉では十分に表現できません。あえていえば、むくつけき不自由な身のいも虫が、目を見張るほど美しい蝶に変身し、自由に空中を飛翔しはじめたような感じでありました。

癌研病院の待合室で順番を待っている間、私はあと数時間で最悪の宣告をされるかも知れない立場にあったにもかかわらず、気持は平安で、心の隅ではある種の期待感さえ感じていました。心のある部分から、妙に浮き浮きする気持が湧き上ってくるのを感じていました。クリスチャンの端くれとして、いつの間にか、死んだ後は天国に行ける、という確信を持つようになっていました。確かにガンで死ぬのは肉体的に耐え難い苦痛でありましょう。また愛する家族と別れるのは精神的に耐え難いほどつらいことであります。しかし、そのいずれも一時的なものであります。家内も子供たちもクリスチャンですから、自分がもし死んでも、天国に一足先に行っているだけで、やがて家族もやってきて、そこで永遠に一緒になれる……涙も悲しみもない、ただ神の栄光

の輝く中で永遠にいることができる……私たちの本当の故郷に帰ることになる……。

私たちの国籍は天にあります。（ピリピ　3・20）

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。……確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちにのまれてしまうためにです。（Ⅱコリント　5・1、4）

死は、実は神からの恵みであります。この世は、クリスチャンにとっても、ノン・クリスチャンにとっても、しょせん楽園とはほど遠いものであります。いやむしろ、この世の人生は誰にとっても苦汁に満ちているのではないでしょうか。同じ人生をもう一度送りたいと願う人は、おそらくこの世にはいないのではないでしょうか。

仕事がら多くの会社の社長にお会いします。特に中堅クラスの企業のオーナー社長は、ビジネス界において最も恵まれたほんの一握りの人々であります。しかし、これらの現代において最も恵まれた立場にあると思われる中堅オーナー社長に「もう一度同じ人生を送りたいと思われますか」と尋ねれば、百人中恐らく百人から否定的な答えが返ってくるでしょう。家族の病気、仕事上の悩み、家の中のトラブル、対人関係の難かしさ、先行きに対する不安感、などなど、最もう

らやましがられる立場にある人々にとってさえ、この世は苦悩で一杯であります。

この世が意味があるのは唯一つ「天国に入るための準備期間」としてであります。私たちの人生は「永遠のいのち」を得るために神から与えられた厳粛かつ唯一の機会であります。いつ死ぬか、誰にも判りません。冒頭の聖句にありますように、私たちはいくら心配しても、自分のいのちを少しでも延ばすことができません。「死の直前に準備しよう」としても、何時が死の直前か私たちには判りません。いつでも、「あなたは後一ヵ月で死ぬ」と言われても、動じなくて後悔しなくてもよい人生を送っている人が、実は最も幸せな悔いのない人生を送っているのではないでしょうか。

私たちの現在を規定するものは、究極のところ、私たちの未来観であります。どんなに今、この世的に豊かであっても、未来に希望と期待がなければ、その人生は本質的に暗黒でありましょう。社会福祉が高度に進んでいて老後の生活に全く不安がない北欧で老人の自殺率が高いのはこのことを裏書きしています。逆に、現在どんなに苦しくても、その後に大きな希望があれば、人はどんな苦しみにも耐えてむしろ喜んでさえいることができます。信仰の故に殉教していった幾多のクリスチャンの歴史がこのことを立証しています。聖書が私たちに提供している未来観以上のものは他にありません。死は、クリスチャンにとって、実は天国の入口、永遠に続く栄光の世界の始まりであります。

私も初めて死と直面して、クリスチャンであることの有難さを改めて教えられました。癌研病院の待合室で一人ひそかに、改めて主イエス・キリストに、感謝の祈りをささげたものでありま

▼会社で会議中の善清さん。



した。

診断の結果はガンではありませんでした。しかし、この体験を通して、神、イエス・キリストのご臨在と恵みの深さを、今さらながらにかみしめたものでありました。

▼米国ニュービジネス視察ツアーのコーディネーターとして。右から3人め。



主に導かれて

（妻の証し）

江藤恵子

一九四一年、東京都に生れる。立教女学院小学校、中学校、高等学校を経て津田スクールオヴビジネス卒業。三菱商事㈱秘書課、オランダ航空勤務を経て結婚。家族は夫善清さん、長男尚広さん、長女朋加さん、次男義道さん。

家庭集会　武蔵野市吉祥寺東町一―十三―一　電話〇四二二―二二―八四四六（毎月第三土曜）

▼右から母上田利恵さん、長男尚広さん、善清さん、二男義道さん、長女朋加さん、恵子さん。



昭和四十三年四月。私と子供の乗っている船は、インドのボンベイの港に、ゆっくり近づいていました。

「一ヵ月振りで会う主人はどんな様子かな？　迎えに来てくれているはずだけど、どこにいるのかしら？」

船のデッキから岸壁にいる主人を探していた私は、びっくりしました。人々から一寸離れた所に確かに主人が立っていたのですが、顔かたちは同じでも、まったく別人のような主人をそこに見出したからです。何か他の人を見るような不思議な思いで、じっとその姿を見つめました。

まるで主人の中心に泉があって、そこから目に見えない水が、こんこんと湧き出ているようでした。その回りには、何ともいえない静けさがあり、主人自身からは、喜びと平安があふれていました。

「一体どうしたのだろう？」

「何があったのかしら」

マルセーユで別れた時の主人は、あんなに仕事と勉強でいらいらしていたのに。私には訳が分かりませんでした。

デッキで、私の隣りに立っていらした、ヨハネスブルグからの宣教師ジャッキーは、「あなたは、素晴らしいご主人を持っています！」と興奮して私に話されました。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。　（Ⅱコリント　5・17）

一ヵ月前、それまでの約二年間のスペインでの生活を終えて、私たちは帰国の途中でした。主人は仕事のため各国を回りながら飛行機で、私と子供は荷物と一緒に船で日本に向っていました。主人とボンベイで待ち合わせて、それから一緒に船で横浜に向う予定でした。

それまでのスペインでの生活で、私は、くたくたに疲れきっていました。

初めての海外生活ということで喜び勇んで日本から参りましたのに、言葉の通じないもどかしさ、買物一つでもいつも気を張り、国民性の違いから意識して自分を強く主張しなければいけない疲れ、スペイン人の中でまるで日本を背負って立っているかのような気遣い、日本からのお客さまの接待、狭い日本人社会の中での交際、六ヵ月の乳児の慣れない食物での離乳食。

これらの目に見えない圧力で、私は、知らず知らずの内に、いらいらと苛立っていました。

そんな私を受け止めてくれるべき主人も、勉強と仕事の二足のわらじで神経を使い果たし、ひとの事どころではなく、私たちは初めてぶつかり合うことが多くなっていきました。

日本では貧しくても幸せな結婚生活を送っておりました私にとって、このようなことは予想もしていないことでした。仕事に恵まれて、経済的にもとても楽になったスペインでの生活は、バラ色の生活となるはずでした。

でも現実は逆でした。日本で薄給で貧しかった時お互いが持っていた労わりが消えて、わがままに自己主張する二人へと変えられていきました。

お金というものが人間の幸せに大きな要素を占めていると思っていた私の考えは、見事に崩れ

去りました。ちょっと裕福になっただけで、醜い姿をさらけ出すようになった二人。

人生って空しい、と生れて初めて思いました。

クリスマスの夜、テラスから、きれいに飾りつけられたキラキラと電気が点いたり消えたりしている他の家々の、暖かい幸せそうな窓を見て、涙が一人でに溢れました。

自分一人だけで、そばに真の理解者も無く、寒風の吹く荒野に裸で立たされているようで、心の中にぽっかりと空いた空洞は、何によっても埋めるすべがありませんでした。

そんなある日の午後、突然二人の方が訪ねてこられました。

「この本を買ってくださいませんか？　そしてちょっと話してもいいでしょうか？」

見ると、聖書に関係した本でした。小学校から高校までミッションスクールで、キリスト教にはもう、うんざりしていましたので「どういって断わろうか」という思いが、まず浮びました。

「私は英語が少し分かるだけで、スペイン語は話せませんので失礼します」

これはよい口実だと思ったのですが、

「ああよかった。私たちはイギリス人です。私たちもスペイン語が苦手で、どうしようか、と思っていました。英語で話せたら最高です」

と嬉しそうに言われ、どうにもひっこみがつかなくなってしまいました。いやいやながら部屋に入っていただき、話を聞く羽目になりました。いつも帰りが遅い主人が、この日だけは不思議に早く帰宅して、理由もよく分からないまま、私たちの話の仲間入りをしました。

初めから、どう相手をやり込めようかと、あら探しばかりをする態度で聞きましたので、二人の伝道の話の内容は、私たちにとって意味の無い、ばかばかしいものに思われました。

でも二人の態度には何か惹かれるものがありました。

この方たちは、何か私たちに無いものを持っている、その背後に何かを持っている、ということを直感的に感じました。

「またうかがってもいいでしょうか？」

「はい、お待ちしています」

気持が定まらないまま、言葉が勝手に出ていました。

次の時、五人お仲間が増えて、七人の伝道グループの方々が訪ねてくださいました。

まだ大学を出たばかりの年齢のようなのにまるでやさしいお兄さんかお姉さんのように暖かくこちらを包んでくださる、誰がリーダーということもなさそうなのに、自然の何気ない一致、お互いの信頼、若者と見えない謙遜な物腰…そんな無言の態度が、ひしひしと、荒れた、空しい私たちの心を打ってきました。心とは裏腹に、週一回木曜日に、聖書の学びをしていただくことに話が決っていきました。

私にとって、この時もまだ聖書には何の興味もありませんでしたが、この方たちに会うことができるということが喜びであり、いつの間にか心の安らぎとなっていました。

だんだんとお付合いしていく内に、この方々が本当に質素な生活をしている、ということが分かってきました。寒い冬でも昔ながらのごわごわの紺色のオーバーを着て、それでも私の毛皮の

コートを「暖かそうね」と、嬉しそうに喜んでくださる。若いのに自分の国を離れ、家族とも離れ、本当に簡素な所に寝泊りし、それなのにいつ会ってもおだやかで、静かな喜こびに溢れていて。家族と共に暮しながら淋しくて、空しい自分の姿が、対照的に浮かび上ってきました。

どこに違いがあるのだろうか？
あの方たちには何があるのだろうか？

それがはっきり分からないまま、私たちが日本に帰る日が近づいてきました。
お別れするのが淋しくて、涙とともにさよならを言いました。

主人は飛行機で、私と長男は船で出発し、インドのボンベイでの再会となりました。

ボンベイから主人も乗船して、共に横浜に向いました。
初めに港で会った時の驚きがあまりに大きかったので、その変化がまたしゃぼん玉のようにすぐに消え去ってしまうのではないかと、船に乗ってからの主人を、私は心の隅でずうっと観察しました。でも一日たっても、二日たっても、主人の様子は変りませんでした。いつもやさしく、いつも嬉しそうで、宣教師のジャッキーとの交わりを通して、その喜びはますます深くなっていくようでした。船では毎晩映画やダンスやビンゴの楽しい会が催されるというのに、そんなもの

は見向きもせず、暇さえあればジャッキーとお互いに顔を輝かせて話し合い、まるで私とは違う世界に住んでいる人のようでした。

あれほどお酒を飲んでいましたのに、夕食にワインが出ても、自分のグラスを伏せて一滴も飲まず、背広を買うにもいつも五分で決めてしまうほど買物ぎらいの主人が、各港での私の買物にいつもついて来てくれ、ただにこにことうしろで見ていました。

私が心で望む以上のことを先に先にと配慮して、与え続けてくれました。

スペインでは、たとえ主人であっても、私の心を百％理解してもらうことは無理なのだ、それは私の要求のし過ぎだ、と諦めていましたけれど、船の上の主人は、完全に私の心を満たしてくれました。私を理解してくれ、私のすべてを受け入れてくれました。

それが神さまの愛だ、ということはあとになって知りました。

その時、私は主人を通して神さまに触れていた、ということもずっと後になって分かりました。

私だけでなく船の親しい他の乗客の方々も一寸おどろいておっしゃいました。「日本人のご主人は横暴だと聞いていたけれど、これからは自分の考えを変えなければならない」と。

不思議にもそれほど、主人は変えられていました。

あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。　（マタイ　10・8）

このみことばの通り、主人は何も要求せず、ただ与えてくれました。いろいろ話す内に、どう

やら主人は、神さまを信じる信仰を持ったらしい、ということが分かってきました。

それがこんなに素晴しいものなら、私も信じたい、と思いました。

でも、今までのミッションスクール時代の知識が邪魔をして、私は駄目だ、そんな風に生れついていないから…と心の一方の側で自分を押し止めました。学校時代のクリスチャンの友人のようにはなりたくない。なれるはずがない。あんなに真面目で善良な人たちのようになんか。

クリスチャンになることは、何か型にはめられた人生を歩むことだと思っていました。クリスチャンってかわいそうな人種だと思っていたのです。その人たちとは違うところに自分を置いておきたい、という思いもありました。

そんな二つの思いの間を行ったり来たりしながら、日本に帰ってきました。

「とにかく教会に行こう」との主人の意見で、日曜日に、一番近そうな教会を電話帳で探し、外出仕度を全部整えて、外の公衆電話から「これから伺いたい」と電話しました。でも断られました。何か主旨が違うようです、とのことでした。仕方なく諦めて、すごすごと家に帰りました。

しばらくして、また二人の外人のかたの訪問を受け、「あなたがたを集会にお連れしたい」と言われました。今も日本で宣教していらっしゃるクライさんと、友人のキングさんでした。深い事情は分からないまま、吉祥寺キリスト集会に案内されました。

集会で暖かく迎えられ、軽井沢のバイブルキャンプにも参加しました。そこで神を信じたいという思いはますます強くなりましたけれど、信じる前に、神を良く調べ、完全に知りたいと思い

ました。神を良く知りもしないで信じる方々を、危険この上ないなあ、と思っていました。自分が納得いったら信じてあげましょう、という態度でしたので、なかなか神に出会うことができませんでした。

そんなある日、疑わないで信じるってどういうことか漠然と考えていますと、突然、山のように大きな、そそり立つものが私の前に現われ、どうしてもそれを乗り越えることができず、初めて下から上を見上げて「神さま……」と呼びました。生れて初めてへりくだって、下から神を呼び求めることができたとき、神さまはご自身を現わしてくださいました。

でも私にはまだ「罪」が分かりませんでした。

集会の婦人会の後で、ベックさんの奥さまが「私の罪を思ったとき……」と、他の方に話しておられるのを聞いて「この方はご自分に罪があると思っていらっしゃるのかしら？　私には何も罪がないのに」と思ったことをよく覚えています。でも、何となく恥かしいことのように思ったので、誰にも言わずに黙っていました。そうかといって集会に行くのをやめる訳でもなく、自分の行きたい時に行き、さぼりたい時にさぼる、という自分勝手な、とても楽な集会生活を送っていました。

ベックさんがよく言われる「楽しい散歩道」の信仰生活でした。

自分の持っているものに一つ新しいハンドバッグが増えた、というような感じで、持っていて得なものは、失わずに持っていましょう、と思い、自分が損することは絶対したくありませんでした。当然のことに、喜びも何もありませんでした。

自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。（マタイ　10・39）

このみことばの反対の道を三年ほど歩んでいました。その間に私の中にある罪のことは、自然に知らされました。

そんな秋だったと思いますが、札幌の集会から、三橋ご夫妻が特別伝道集会のため吉祥寺にいらしてくださり、お話を伺いました。

生きている神さまがどんなにはっきりお二人の毎日の生活に働いていらっしゃることか！食べる物が何も無くなられ、「自分たちの命も神さまのものです。どうぞご自由になさってください」と心から祈ることがおできになった時、誰も来るはずのない玄関に、お肉や野菜が沢山置いてあったという証しや、赤ちゃんのミルクも買えなくなられた時、やはり祈りの後、壁板の間に二千円がはさんであったというお話など、職を持たずに伝道していらっしゃるお二人の生活は、すべて神さまが直接面倒を見ていらっしゃる、ということを知って、ただただ呆然として聞いていました。神さまとこんな生きた交流があるということが私にはショックでした。

同じクリスチャンといってもなんて違う世界でしょう、と思いました。

三橋さんはまた、南北戦争の話をしてくださいました。ある南軍の兵士が、死にたくないと考え上着は南軍の上着を、ズボンは北軍のズボンをはいて、両方から味方と思われたいと願ったの

に、反対に両方から敵と思われ撃たれて死んでしまった、というお話でした。

この兵士は私の姿だと思いました。

この世と神さまの間をうろちょろして、何とか両方失うまいと頑張っていた私。

どんなに神さまを悲しませていたことでしょう。「神さま、ごめんなさい」と初めてあやまることができました。

私もどうせ信仰の道を生きるなら、このお二人のように生きたいと心に思いました。でもどうしたらそのように生きることができるのか、何をしたらよいのか皆目分かりませんでした。

でも神さまは私の心のこの小さな思いもちゃんととらえてくださり、すぐに命令を与えてくださいました。水曜日の朝、突然、「私は今日、夜の集会に行かなければならない」という声が心の中に与えられて、びっくりしました。

まだ二歳の子供がいましたし、家庭の主婦が夜の七時半から家を空けるなど、今まで考えたこともありませんでしたので、何のことかと思いました。

でもお昼になっても「夜の集会に行かなければならない」という声は消えず、夕方になるとますます大きく響き出しましたので、どうにも抗し切れずに「今夜の学びの集会に行こう」と決心しました。その時私の両親と共に暮していましたので、まず母に断って許しを得なければと思いました。

母は日本人の中ではとても熱心な仏教徒で、毎月お坊様に来ていただいていました。

真理を心から求め、でも何年も得られずに悩んでいました。いつも中心に行きつかず、その回

りをぐるぐる回っているだけだと話していました。

私が聖書を本当の意味で知った時、聖書の中の神が唯一の神であり、真理はイエスさまにあると分かりましたので、苦しんでいる母に教えてあげたくてたまらず、勢い込んで話しますと、とても叱られました。自分の信じている神だけが本物だなどと思い上りにもほどがある、生意気だと。それからは、信仰の話になりますとけんかになり、家の中ではもうお互いの信仰の話はしないことを約束させられました。

「あなたはキリスト、私は仏教。信仰は自由なのだから人のことはほっておいてちょうだい」一触即発ではありましたけれど、私の集会行きは黙認していましたので、わりと気軽に「今日夜の集会に行っていいでしょう?」と聞いてみました。

ところが大変でした。「一体夜主婦が出かける家庭がどこにある、そんな非常識なことがありますか」と大変な剣幕で怒られてしまいました。ちょっと怖気づきましたけれど「今日私は行かなければならない」という声は、心の中に一杯に広がっていましたので、その声に従って家を出ました。母は玄関まで追ってきて、何とか止めようとしました。

帰ってから父と母に呼びつけられ叱られました。でもそれも当然ですし、その日のことが、とにかく終ったので内心ほっとしていました。

でも翌日の木曜日、「今日も私は行かなければならない」という声が、再び聞えてきました。きのうだけでもあんな様子なのに、今日も行くと言ったらどれほど怒るだろうと思いましたが、黙って出かけることもできず再び事情を話しました。案の定大変おこられ、その母を振り切るよ

うにしてやっとのことで家を出ました。

「ああイエスさま、やっと家を出ることができました。守ってくださって有難うございます」

外の風が気持よく私の頬に当り、周りは何重にも天使が囲っていてくださるようで、とても不思議な気持で集会まで歩いて行きました。

帰宅しますと「そんなに私の言うことが聞けないのならもう一緒に暮していくことはできない」と言われ、「もうしようがないな」と思いました。主人に話しますと、私にすべて同意してくれ、私たちは家を出ることに決りました。

わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。

なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。

さらに、家族の者がその人の敵となります。

わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。

自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。

（マタイ　10・34～38）

イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音の

ために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。

（マルコ　10・29～30）

移る家を探している間、夜の集会には今までの家から通っていました。木曜の祈り会では、主が私に祈るように求められました。今まで人前で祈ったこともなく「いやです。いやです。祈ることなんてできません。こんなに大勢の中で絶対いやです」と最後まで抵抗しましたけれど、見えない手に強く押し出されて祈り始めていました。

「天のお父さま、今日も私の代りに闘ってくださりありがとうございます。私には何の力もありませんけれど、あなたさまにお委ねした時、あなたさまがいつもすべてのことをなしてくださいますから感謝いたします。

そしていつも完全な勝利へと導いてくださいますから感謝いたします。

かたくなな母ですけれども、どうぞ、あわれんでください。

あなたもあなたの家族も救われます、とのみことばを感謝いたします」

祈り終って、体験したことのない力に包まれて家まで帰りました。

翌日の金曜日の朝、洗濯をしております私のところに母がきて聖書についてぽつりと質問しました。今まで聖書のことを話せばけんかになりましたので、おそれて最少限のことを答え、びくびくしていました。でも午前中に二回同じことがあって、三回目に私にも「あっ、主がしていらっ

しゃる」ということが、やっと分かりました。母に「ベックさんのところに行ってお話を伺う？」と聞きますと「行く」と申しましたので、とるものもとりあえずベックさんのお宅に伺いました。

「六ヵ月たっても信じられなかったらこの聖書を捨ててください」という言葉とともに、ベックさんから聖書をいただき、六ヵ月を待たずに母はイエスさまを救い主として自分の心の中にお迎えし、四ヵ月めに洗礼を受けました。

主は何と素晴しいことをしてくださるお方でしょうか。

とっくに投げ捨てられ踏み潰されても当然の、ちゃらんぽらんな歩みをしておりました私のような者にもちゃんと恵みを与えてくださいました。

主のみわざを、不思議な思いで覚えさせていただきました。

この時から、主が私にとって第一の大切なお方になりました。このお方を悲しませないで歩んでいきたい、仕えていきたいと心から願いました。

でも私はみことばの知識が無く、あまりにも主の秩序を知らなさ過ぎました。

そこで主は、一つの小さな事柄を通して私に主の秩序の絶対的なことを教えてくださいました。

約十年ほど前のある日、私が主人に従わないことで、主人を怒らせてしまったことがありました。ふだんあまり怒らない主人でしたので、すぐに機嫌が直るだろうと気軽に考えていましたけれども、この時ばかりはそうはいかず、三日経っても、五日経っても機嫌が良くならず、私もだんだん本気にならざるをえませんでした。初めは申し訳なかったと思っていた私でしたけれど主

人があまりいつまでもこだわっているので、だんだんにその主人に対して腹を立てるようになり、自分の不従順を棚に上げて、心の中は主人を責める思いと、裁く思いと、自分を正当化する思いで一杯になりました。主人が機嫌を直したらその時こそ今の心の中を、すべて主人にぶつけようと思っていました。その思いが頂点に達した時、使徒の働きのみことばが与えられました。

ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなった。

（使徒　8・32）

口を開かなかった……このみことばが心に突き刺さりました。私はいま、主人に思い知らせてやろう、と思っているのに、十字架にかかられる時、イエスさまは何もおっしゃらなかった。何の口答えもなさらなかった。何の弁解もなさらなかった。ただ、黙々として、従われた！

ふと気がついてみると、私は実際に十字架にかかっていらっしゃるイエスさまの足元に連れて行かれていたのです。そこはほんとに石ころだらけの所でした。その石ころだらけのところに座って、イエスさまを見上げている私に、十字架の上からイエスさまはおっしゃいました。

「あなたはわたしに従いますか？」

「はい、従います」そうお答えしたとたん、それまで私の心の中につまっていた、主人に対する裁き、非難、弁解、そのすべてが一瞬の内にまるで泡のように消え去り、それに代って、主人に申し訳なかった、すべて私が悪かった、良い妻ではなかった、信仰信仰と信仰を第一に揚げな

がら、主に喜ばれる歩みをしていなかった、どんなに負担をかけ、いやな思いを与えていたことだろう……謝りたい、という思いが満ちあふれ、心から謝ることができました。

このことを通して、私は初めて主の十字架を体験しました。

十字架さえあれば、もう何もこわくない、と思いました。十字架さえあれば、アフリカの奥地だってどこだって、一人で伝道に行くこともできる、と分かりました。

十字架は私たちクリスチャンにとって、打出の小槌だと思いました。振れば（通れば）全能のお方がすべてをなしてくださいますから。

それとともに私の心の中には何も無いということも、徹底的に教えてくださいました。きれいな花は咲いていなくても格好の悪い草や木ぐらいは生えているだろうと思っていました私の心の中は、石だけがごろごろしている荒れ果てたところだと見せてくださいました。

そこにイエスさまがいらっしゃらなければ、良いものは何も出てこないと教えられました。

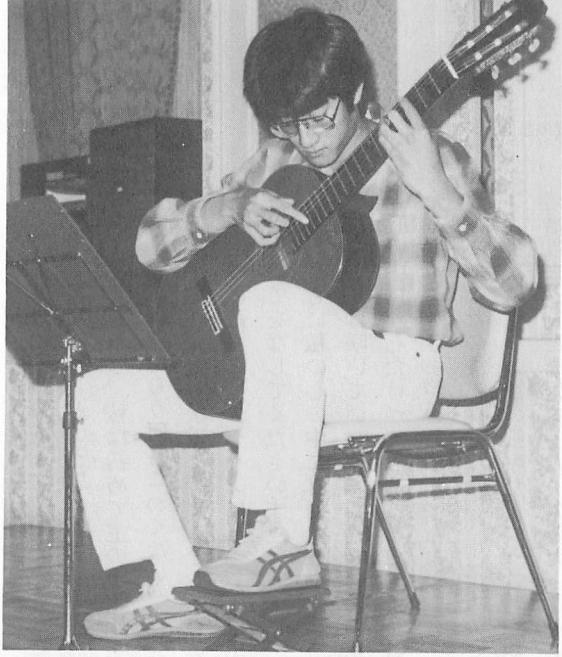
そしてあなたの夫に従いなさい、というみことばは、何も条件が付かず、私たちが何よりも服さなければいけない神の秩序だということが初めて分かりました。

結婚以来、夫と妻はまったく対等だと、そしてその方が家庭が幸せだと頭から信じておりました私には、どうしても通らなければならない道でした。

それからも失敗だらけの歩みですけれど、主はいつも完全でいらっしゃいますから感謝です。

真実で全能なお方に頼って生きることのできるクリスチャンは何て幸いだろうか、といつも思います。私たちを愛していてくださるイエスさまの手から一つ一つを受け取って人生を歩むことが

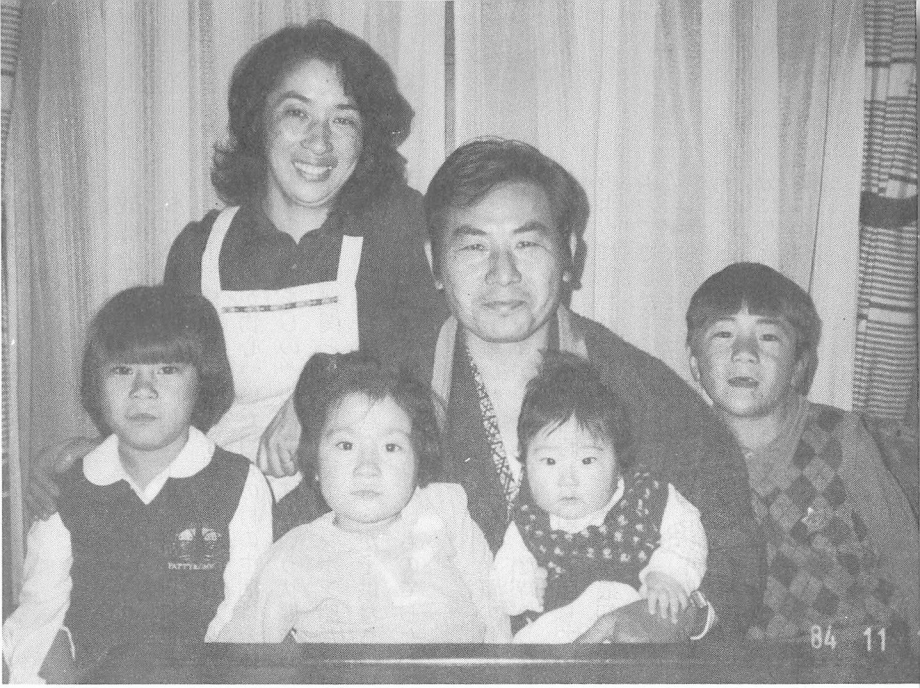
できますので懼れや不安がまったく無くなりました。
これからも愛する主人や三人の子供たち、そして母や姉と一緒に、最後まで心を一つにして、主に従っていけたらと願っています。



▲浪人中の尚広さん。「禁じられた遊び」を弾く。トニカルギター教室発表会で。

▼1970年秋、長女朋加さんの祝福式で。





▲妻美和子さんと四人の子供たちにかこまれて。

とこしえの磐

蘇畑卓郎

一九四五年奄美大島に生れる。今里小、古見中、大島高を経て、早稲田大学政経学部卒業。現在富士短大教授。家族は妻美和子さん、長男浩憲さん、長女真奈さん、次女光子さん、三女礼子さん。家庭集会　東京都杉並区下高井戸五―二五―一二　電話〇三―三〇三―〇二七七　毎週第三木曜日。

故郷と少年時代

私は終戦の直前、昭和二十年一月八日に奄美大島の中部にある小さな漁村に生まれました。父は村の小学校の教師で、子供が八人あり、私はその七番目で三男にあたります。今ふり返ってみますと、私が物心ついた当時の村の生活は全体に非常に貧しく、つつましく、だれもがその日その日の生活をしのぐのに精一杯という状態でした。芋類や雑穀などの当時の主食糧も十分とはいえず、交通機関といえば一隻のポンポン船だけ。村にはまだ電燈もなく、夕方になると、ランプのホヤを磨いて灯の用意をするのが子供たちの日課のひとつでした。このように、すべての物は乏しく、生活は不便きわまりないものでしたが、しかし、人々の活気だけは村に満ちていたように思います。

その頃の忘れ難い想い出の中に、米軍の救援物資の中にあった、一片のチョコレートがあります。初めてのチョコレートを口にした時の、なんともいいようのない味と香りは、私にとってはひとつの驚きでした。当時わが国に君臨していたあのマッカーサーの国アメリカ、富と力の権化のように思われていたアメリカを私が最初に実感したのは、なによりもこのチョコレートの味によってでした。

しかしながら、このように貧しい不便な故郷の生活も、それ以外の豊かな生活を知らない私達子供にとっては至極当然なもので、結構楽しい少年時代を過しました。思うに、父母の愛さえ十分に与えられれば、子供というものはどのような時と所においても特に不足を覚えることもなく、楽しく育つものではないでしょうか。冬に燃料用の雑木を採りに山へ行くついでに、仲間達と、

車輪梅などの木の実を探してこれに群がり、春には小鳥籠を作ってあの薄緑色の美しい小鳥「めじろ」を捕えるのに胸を高鳴らせたものでした。めじろは、椿の木などに群をなして飛来し、一日で十数羽も捕えることがありました。その中から特に優れた牡を一、二羽選んで飼い、残りは放してやるのです。また夏は、太陽の光にキラキラ輝く真青な海の中で、魚貝類を追って一日中サンゴ礁のまわりを潜って過すのが常でした。

このように少年時代をふり返ると、多くの物的欠乏にもかかわらず、故郷の自然との触れ合いはいつも楽しい、光に満ちたものとして想い出されます。それは確かに聖書が語るように、自然が神の作品であり、今もなお神の栄光をあらわす器として光り輝いているからなのでしょう。しかしいったんこの少年時代の生活を精神の側面からたどるならば、そこにはなにひとつとして満足すべきものは見い出されません。満足どころか、それはすでに罪と恥と恐れとに満ちた時代だったように思います。無反省、無自覚な少年時代であったればこそ、かえってすべての行為が露わな自己主張を内にふくんでおりました。そこから生ずる高ぶりと愚かさ、偽りとごまかし、そしてそれらの罪に伴う恥と恐れの感情などは今もはっきり憶えています。

内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。（マルコ　7・21～23）

主イエスが語られたように、私もまた自分の内側から出るこれらの罪によって自分自身を汚し

つつ、しかも自分自身をわきまえ知ることもなく、少年時代を過していたのです。

最初の教会訪問

私の郷里は、およそ真の信仰などというものとはもっとも縁のないところのように思われます。昔ながらの土俗信仰や先祖崇拝の慣習は根強く残っていますが、しかしそれらは単なる儀式に過ぎず、村人達は信仰を軽んじ、さらには無宗教を誇りとする風潮すらみられます。というのは、時々人目を引く熱心な信仰者達といえば、白い着物をきて、気がふれたように太鼓をたたき、訳の分からないことを唱えている人々なものですから、村人達がそういう人々のことを「神様拝みの連中」といって軽蔑していたのも無理はなかったのです。

そういう環境に育ったので、私も宗教とか信仰といえばいずれも訳のわからない迷信に過ぎないものと頭から決めてかかっておりました。まさか神のあるなしが自分の人生にとって抜き差しならぬ問題だ、などとは知るよしもありません。ですから、高校生のころ、英会話を教えてもらおうと二、三の友人達と一緒に数回通ったことのある町のカトリック教会で、外国人神父に、「この宇宙を創造した神がおられる」などといわれても、その意味するところが理解できず、「誰がこの宇宙を造ろうと、それが私に何の関係があろうか」などと心の中でうそぶいておりました。

しかしながら、罪の自覚ははっきりあったのでしょう。教会内に足を踏み入れると、理由は分からないながら、聖なるものへの畏怖を感じ、近づけば自分の心の暗闇が暴かれ罪を裁かれそうな恐れを感じたものでした。そういう印象を受けていましたから、教会という所は私にとっては

どこかこわい所、近づき難い所、聖なる所でした。今になってみると、私の受けたこの印象は正しいものだったと思います。なぜなら、神は聖にいまし、この方に近づく者はなによりもまず自分の罪人なることをわきまえ知らされるからです。

神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものです。アーメン。

（Ⅰテモテ　6・15～16）

長兄の挫折と上京

昭和三十八年一月下旬、私は地元の高等学校を終えてはるばる大学受験のために上京しました。生れて初めて見る本物の雪、手足の指先のかじかむような寒さ、自分が大海の一滴のように心許なく感じられるほどの途方もない東京の広さと雑踏。南の島育ちの私にとっては不慣れなことばかりでしたが、しかし、「遂に東京に来たぞ、これからが正念場だぞ」というような張り切った、またかなり気負った気持でした。

だいたい予期していた通り、一年間の浪人生活を送った後に大学に入りました。大学に入るのは、特に何かの有用な専門知識を身につけたいからとか、研究者や学者などになろうとかいう明確な目標があるわけではなく、ただ漠然と何かを手探りしている状態ですから、専攻が文学だろうと経済だろうと、それらのことはたいした問題にはなりません。ただ私はまったくの田舎育ち

でしたから、大学を良い企業に就職するための通過点、有利な人生を手に入れる一手段というふうにみなすことはできませんでした。なぜなら、私の田舎には企業なるものは皆無で、就職する企業によって人生の価値や人間の優劣が定まるかのような都会人の価値観が――感謝すべきことに――一向にピンとこなかったからです。ですから、就職のために成績の「優」の数を揃えようとか、いわゆる有名ゼミナールに入ろうなどという連中を横目で見ながら、大学にはもっと大切なものが何かあるはずだ、と思いつつ過しておりました。専攻の社会科学の抽象論にどうしてもなじめず、授業にはろくに出席しないで、毎日大学の道場に通っておりました。身心の鍛錬によって自己を確立したい、人生の揺がぬ土台を自己鍛錬によって築きたい、と熱望していたからです。

結果的にみれば、この「身心の鍛錬による自己確立」ということが、私が大学の四年間にほとんどのエネルギーを注いだ目標でした。どうしてこういう目標に行きついたかという理由には、当時はっきり自覚されてはいませんでしたが、二、三のものがあったように思います。第一の理由は、私が生来感じやすく動じやすい、きわめて脆い性格の人間であるため、この弱さを克服したいというものでした。しかしさらに大きな理由は、長兄の挫折に直面して、人生の未知の危機に対して身構えざるを得なかったからであると思います。

長兄は終戦時の混乱に遭遇して進学の途を閉ざされていましたが、昭和二十八年の本土復帰後（それまでの間は奄美群島はアメリカの信託統治下にありました）に上京して、苦しい勉学の生活を送っておりました。ところが、長い苦学がこたえたのでしょう、長兄は身心の健康を失い、まったく身動きのできない状態に陥ってしまったのです。東京で平穏な学生生活を送っていると

ばかり思っていた長兄のこの状態を、当時名古屋で大学に通っていた次兄の手紙で知った時の家族の驚愕は、一瞬雷にでも打たれたような感じでした。父母に衝撃を与えまいとして、まず故郷の姉あての親展として届いたこの手紙を、たまたまそこに居合せて開いた父――父は子供達あての手紙でも一向頓着せずに開く人でした。ですから、何かを父に隠し通すことは容易ではありませんでした。曲ったことは頑として容認しなかったこの頑固な父は二月前にこの世を去りました。――は読み終えた後、じーっと黙したまま座っておりました。

教育に生涯を捧げ、子供達に学問を修めさせるためにはどんな苦労をもいとわなかった父と、その父を支えて多くの重荷を負い続けた母――この母も六年前に世を去りました。――の期待をになって、いわば家族の先陣を切って上京した長兄――私にはそのように思えました――のこの挫折は私に大きな衝撃を与えるとともに、人生の行く手に待ちうける、不気味な重圧を予感させました。大阪での一、二年の療養の後、姉に伴われて帰省する兄を、家族で波止場まで迎えに行った寒い冬の日のことを私は忘れることができません。精神安定剤を投与されていたからでしょうか、体全体がむくんだように肥え、どこか虚ろな鈍い感じのする兄を見た時、私には兄をいたわる思いは少しもありませんでした。今ふり返ると、無知で生意気盛りの年頃とはいえ、自分のその時の態度のあまりの冷淡さに、申し訳けないというよりも、我ながら情ない思いがいたします。尾羽打ち枯らし、悄然として立っている兄に、「本当に大変でしたね、苦しかったでしょう、兄さん」といって迎えるどころか、逆に「なんて意気地のない兄だ、家族をこんなに心配させて」という思いを抱いておりました。兄のように挫折してはならない――私はこのように決意しつつ、

冷やかに長兄を迎えていたのです。

大学紛争、そして酒枝義旗先生との出会い

私にとって学生時代とは何もかもがわからない、これは確かだといえるものが何もないような暗中模索の時代でした。ちょうど自分自身に目ざめ、それまで既定のこととして無条件に受入れていた、さまざまな社会生活の規準や規範の根拠に、疑いをさしはさみ始める年代だったからでしょう。思うに青年時代とは、それまで両親や社会から与えられ、当然のこととして自分がその中で生きてきた内面的な世界に対して懐疑を抱き始める年代、そしてその既成の世界に反発しながら、自分自身の手で自分が心底納得できるような世界を再構築しようとする年代、いいかえれば自分自身の人生観を自覚的に固め始める時期のように思います。ところが私の場合、人生観のもっとも重要な土台となるべきもの——人生においてもっとも大切なものは何か——ということがさっぱりわからず、これを築き上げようにもなんの手掛りもないという状態でした。ちょうど、何の材料をどこからもってきて、どのように組み合せれば家が建つのかが皆目わからない大工のようなものです。肝腎の土台すら据えられないのですから、それ以上のことは何もできるはずがありません。

そうこうしている間に、昭和四十一年に大学紛争が生じ大学は未曽有の大混乱に陥りました。この大学紛争は私に多くの貴重な体験を得させたものでしたが、もっとも大きな意義は「一体、正しいとはいかなることか」という価値規範の究極の根拠を自分が真剣に問わざるをえなくなっ

たことでした。大学の在るべき姿をめぐって大混乱が生じ、血なまぐさい乱闘さえくり返されているのに、「真理の府」などと自称している大学が学生を説得して従わせるだけの権威をもつことができずに右往左往しているのです。大学の偉い先生方も学生達と同次元の勝負をしているに過ぎず、常日頃の研究対象であるはずの「真理」の力らしいものはどこにも感じられません。運動部所属の一学生としてこの乱闘にまき込れながら、私は「どこかおかしいぞ」と思い始めました。大学が目ざすという真理なるものは、万人が無条件に服すべき権威と力をもっているはずである。学問とは単なる技術的知識の発見と習得だけではないはずである。ところが、先生方も学生達も、それぞれの立場からの主張をしているに過ぎず、いわば五十歩百歩の違いでしかないように思えるのでした。

このように大学紛争は収拾がつかず、百数十日にもおよぶ泥沼化の様相を呈してきましたが、最後に学生達の前面に出てこられたのが、酒枝義旗という名高いクリスチャンの老教授でした。酒枝先生には経済原論の講義によってすでに一年間教えを受けておりましたから、先生がどのようにふるまわれるかを注目しておりました。というのは、この先生の講義は一風変っていて、よくはわからないけれど、人生の根底にひそむ問題にふれてくるような、何かガチンと手応えのあるものを感じ惹き込まれるようにして聴き入っていたからです。先生の語られたことは当時はよく理解できませんでしたが、今にして思えば「人間存在、または人間共同生活の危機性」という根本問題についてだったようです。簡単にいえば、人間が個人的にであれ社会的にであれ生きるということは、常に隣り合せている「死の可能性」に打ち勝ちつつ生きる、ということである。

生はいつ死の力によって打ち負かされ、これに呑み込まれるかわからない。人間が生きているということは、このように常に生と死の緊張関係を内にはらんでいるのであるが、この緊張関係は安穏な日常生活においては意識されず、なんらかの危機的局面にぶつかる時に突如として明らかになってくる。それでは人間が個人的に、または社会的に生きるとは具体的にどういうことであり、そこに潜む死の可能性とは具体的にいかなることであるか。いかにして日々この死の可能性を克服すべきであるか……。こういう事柄を酒枝先生は社会科学の根本問題として語っておられたようです。講義は先生の豊かな人生経験と深いキリスト教信仰に裏打ちされていて、人生という大海で行くべき目当ても定まらずにさ迷っている私のような学生には非常に興味深いものでした。「人はパンのみにて生くるにあらず、神の口より出ずる言の一つ一つによりて生くるなり」とか、「睦じうして一かたまりの乾けるパンあるは争いありて屠りたる獣の豊かなるにまさる」という聖書の言葉はこの講義で初めて聞いたのではないかと思います。

この一風変った、どことなく頼りなさそうにも思える老先生が、あの渦巻く紛争の中に実に毅然たる態度をもって立たれたのでした。それは大学の存立そのものさえ揺がしかねない紛争の濁流に、双手をひろげて立ちはだかっておられるように見えました。ある時は数千人の学生達の前で、共闘派のリーダーの学生の不真実を責められ、壇場で殴り合いでもしかねないほどの勢いでした。先生は学生運動家達の信念に対しては敬意を表しながらも、戦術・戦略のためには相互の間にかわされた約束を平気で踏みにじろうとするその不真実な態度に激しく怒られたのでした。

私はこの酒枝先生の講義を聴き、また紛争解決における先生の真実な毅然たる態度を遠くから

うかがいつつ、この先生は私などの知らない人生の深い消息を知っておられるに違いないと感じました。そして三年生から始まる先生のゼミナールに入れてもらおうと決心しました。先生は、成績の「優」の数で学生を選別するなどということは、学生諸君にはなはだ失礼であるからと、いつものように教師らしからぬことをおっしゃって、希望者をひとりひとり面接してくださり、きわだって成績の悪かった私をも許可してくださいました。その面接試験の時、私はそれまでに根強く抱いていた疑問、すなわち義と不義、善と悪などの価値規範の根拠は何か、その根拠には客観性がありうるのかどうか、というようなことをドストエフスキーの小説などの読後感をあげて先生に質問しました。私のその質問に対する先生の答えの内容はその時は理解できず、従って覚えてもいませんが、先生が「君は根本的な思い違いをしている。しかし、そのような問題意識をもっていることはよいことである」とおっしゃったことは今もはっきり覚えています。その時、私にはわからない問題だけれども、酒枝先生は確かにわかっておられるらしいと、ある種の安心感をおぼえたものでした。

その年のゼミナールでの研究課題は私には願ってもない「価値判断における客観性の問題」というもので、テキストは有名なドイツの社会科学者マックス・ウェーバーの「社会科学および社会政策における認識の客観性」という、これもまた有名な論文でした。しかしながら、それ以後二年間の——私にしてはかなり熱心な——学習にもかかわらず、この問題に対する納得のゆく解答は見つけ出せませんでした。結局、最後の結論として行きついたところは、ドストエフスキーの言っているように、「神がいなければすべてのことは許されている」ことになる、すなわち、

神がもし存在しないならば人間を裁くことのできる絶対的な道徳規範はどこにもなく、義も不義も、善も悪も存在しないことになるのではないか、ということでした。そうなると私個人にとって私以上の権威は存在せず、私は私自身を自分の神として生きざるをえないことになるのではないか。もしそうであれば、人間の数と同じだけ多くの神々が存在することになるから、この世は神々の闘争による混乱の巷とならざるをえないではないか……この結論はマックス・ウェーバーも、またわが国の文豪漱石なども、神の存在を認めずして生きる現代人の宿命として不可避のものと考えていたようです。後に聖書に親しむようになり、有名な「創世記」三章のエデンの園における人祖アダムとエバの堕落の不思議な物語――彼らが善悪の知識の木の実を食したことにより、人類に罪が入ってきたという――を拝読した時には、この物語は実に深遠な意味をふくんでいるように私には思えました。また同じ「創世記」十一章の「バベルの塔」の物語も決して大昔の単なる話とは思えず、現代人が今なお背負っている悲劇的宿命を簡潔に描いているように思えました。自分達の知識に傲り高ぶった人類が神を拒絶し、自力で天にも届く塔を建てようとするうちに、互いの言葉が混乱させられ、意志が通じなくなり、ついに地の表に散らされていったというのです。「バベル」という言葉は「混乱」という意味であります。

このように、ドストエフスキーやマックス・ウェーバーなどにたびたび引用されている聖書の言葉にふれながら、聖書がただならぬ書物であること、自分のみならず現代人の抱えている根本的な問題に深くかかわっているものであることをうすうす気づき始めました。そして「次に読むとすれば、それは聖書だ」と思っていたところ、その機会は予想もしなかった形で、しかも意外

に早く私に与えられました。

聖書との出会い

これまで述べてきたように、私は大学生活の四年間をほとんど道場に通って身心の鍛錬に費し本気になって学問と取り組んできませんでした。もちろん、四年間の道場生活は今ふり返ってもかけがえのない貴重な体験を私に与えてくれました。今も尊敬してやまない故富木謙治先生や大庭英雄先生という優れた人格に接し、真の師に出会うことができたことは感謝に余りあることです。私はこの四年間の学生生活を後悔することは決してありません。しかしながら、いよいよ卒業を控えて就職問題に当面するようになると、自分が学問に真剣に取り組んでこなかったことが残念で、何も分からないまま社会に出て行くことにどうしても未練が生じてきました。そこで故郷の父に願って、大学院へ進んでみることにしました。半年ほどそのための準備をして進学したばかりの昭和四十三年五月の初めごろ、酒枝ゼミナールの先輩で当時大学院に在籍しておられた大庭治夫さん（現在図書館情報大学教授）から、聖書研究会への出席を誘われたのです。大庭さんのいわれるところによると「わざわざドイツから来られた方が集会を開かれるのだが、人数が少いといけないので、君も出席してくれないか」ということでした。私はその時「それはお気の毒だ。ただ椅子に座っているだけでよいなら、私もお役に立つだろう」と思って、その誘いを受け入れました。

ところが、金曜日の昼食時間に大学の近くの信愛学舎という場所で開かれていたその集会に

行ってみて驚きました。なんとそれはドイツ語聖書研究会で、一人のドイツ人宣教師が数人の学生達を相手に聖書を講解していたからです。哲学科の教授が通訳していました。大庭さんはいきなり聖書研究会などといったら私が断るに違いないと思って、そのことを伏せておられたらしいのです。（確かにその通りだったと思います。このことも主なる神の憐みのご配慮だったと今にして思います）私はその点、内心憤然としていましたが、しかしその小さな聖書研究会は私がそれまでに経験したことのない清さと暖かさと真剣さに満ちた雰囲気の集会でした。その時のドイツ人宣教師がゴットホルド・ベック師で、その後私が信仰の師として仰いでいる方です。

ベック師は鋭い眼差しと静かな深い確信をもって「テサロニケ人への手紙第一」の数節を講解されました。初めての出席にもかかわらず、ベック師の解かれる聖書の言葉は私の心に深く鋭く切り込んでいく刃のように感じられました。聖書とは何という恐るべき書物だろうか、というのがその時の強い印象でした。

その聖書研究会で、当時ベック師がくり返して語られたことは次のようなことでした。「この世の思想家や哲学者達は人間自身の内側になにか善きもの、揺がないものを見つけ、それを人生の土台にしようとしているが、それは不可能である。人間自身の内にそのようなものがあると考えることは誤りである。善きもの、揺がないものは人間の内にはなく、ただ神にのみある。それ故に神を仰いで神からそれを得なければならない」。また次の言葉も強い印象を伴って記憶しています。「真理は理論や仮説ではない。真理とは神ご自身、キリストという生きた人格そのものである」。

神が存在するかどうかという大問題には全然ふれられずに、ベック師はいきなり「神に求めよ」といわれたのです。この世の智者、学者達が何千年にもわたって議論してきた神がおられるかどうかという大問題はベック師には全然議論の対象にならないのです。それは議論によって決着のつく問題ではないし、人間が理性によって神を把握するということは本来あり得べからざることである、というのがベック師の考えでした。ただ神はご自分を求める者には必ず答えられ、ご自身を啓示なさるのだ、真理を知りたい、救われたいと本当に望むなら、誰であっても必ず真理を知り、救われる、とくり返し強調されました。確かに人間の知恵、理解力によって神を把握しようなどということは、もともと神のなんたるかすらわきまえない人間の無知によるのだ、ということを後で了解するようになりました。人間に把握できる対象は人間以下のものでしかありえないのです。酒枝先生のたとえによれば、理性という限られた広さの風呂敷でもって無限なる神を包み込もうとすることが、人間の愚かさなのです。パウロの言う通り、私達人間が神を知るのではなくして、逆に私達が神によって知られるのです。神との出会いとは、私が神を把え、私が神を知ることではなくして、神によって私が把えていただき、私のすべてを神が知っておられることを知って神に信頼することであります。

神への叫び

そのドイツ語聖書研究会に出席しだしてから一ヵ月ほどたった六月中旬のことでした。その年の三月に定年退職で大学を去られた酒枝先生が、吉祥寺にあるベック師の集会で特別伝道集会を

催されることになり、その集会にぜひ出席するようにと私はベック師に案内されました。土曜日と日曜日の二晩ということでした。聖書に強い興味を抱いて、ろくに読むこともできないルター訳のドイツ語聖書を早々に購入しておりながらも、クリスチャンになるなどとは夢にも考えていなかったので、せっかくの休みを二晩もつぶして教会に行くことはもったいないと思い、義理で日曜日の一晩だけ出席することにしました。それも一人で教会に行くのはどうも気遅れがするのでドイツ語聖書研究会に出席していた沖縄出身の親しい友人、喜友名朝英さんに一緒に行ってくれるようにお願いして、二人で出かけました。喜友名さんは小学生の時にすでにバプテスマを受けていたクリスチャンで、大勢に流されずに自分の意見を率直に述べるような、どこかしっかりしたところのある人でした。（当時は救世軍の教会に出席しておられたように記憶していますが大学院を終えて後帰省され、現在は故郷の沖縄で牧師として献身の生涯に入っておられます。）初めて入った吉祥寺キリスト集会はごく小さな集会で、二、三十人も入れば一杯という感じの所でしたが私は緊張して人の影に隠れ、できるだけ酒枝先生に見られないように坐っておりました。前列で、感謝にたえないというばかりに聖歌を歌っておられるゼミナールの先輩の鉢野正樹さん（現在北陸大学教授）などを見ながら、こんな幼稚な歌をよくも感激して歌われるものだなあと、なかばあきれつつ不思議な気持で眺めておりました。

その晩の酒枝先生のお話には、ご自分が二十四歳の時、キリストを信じて神の許にひれ伏された時のいわゆる証しも含まれていたように記憶しています。もちろん、お話の細部が理解できるはずはありません。ただお話の内容はきわめて単純なもので、大学でいつも難し過ぎて理解ので

きない話を聞かされてきた私にとっては予想外のことでした。その集会が終わると、私は先生に挨拶もしないで急いで喜友名さんと一緒に駅に向いました。もう二度と集会などには行かないぞ、となぜか心に決めておりました。その晩は十二時近くに池袋の下宿に帰りましたが、布団にもぐり込みながら、酒枝先生が集会で話された「あんた達にはよろこびがあるか。自分がこのように生かされているというそのことを感謝できるか」という言葉をふっと想い出して、奇妙なことをいわれるものだなあ、と思ったことを今も記憶しております。よろこびとか、感謝とかいうことは当時の私の心境からはもっとも遠くかけ離れたことだったのでしょう、「この人生にそのようなものがあるわけがないではないか」と、自問自答しておりました。すべてのものに対して身構え、神経はいつもぴりぴりと緊張し、心はかさかさに渇いていた私にとって、そのようなものは別世界のことのように感じられたのです。また、そのようなものが欲しいとはまだ思ってもおりませんでした。荒野で一人、寒風に吹きさらされているような心境だったのです。

翌日の月曜日の午後、私はいつものように講義を受けた後で、神奈川県の伊勢原市へアルバイトに出かけるために大学からバスに乗って新宿駅に向っておりました。梅雨の季節でどことなく心も体も重く感ずるような日でしたが、新宿駅の近くまできて、私はふと「ここはどこだろう」と思いました。続いて「僕はどこに行くのだろう」「一体、何者だろう」という問いが心に浮んできました。そして次の瞬間、私はハッとして恐れおののきつつ眼の前の手擢をしっかり握りしめ、顔をうつ伏せて震えておりました。私は必死になって「僕は伊勢原へ行くのだ」と自分に言い聴かせ、納得させようと試みましたが、それらの説明も自分の心中の激しい不安を鎮めること

はできませんでした。その時私がはっきり知ったことは「僕は自分の行くべき所を知らない者だ」ということでした。「私は一体どこから来て、どこへ行こうとするのか。私は自分の居所を知ることのできない迷い児ではないか」。自分はこの大宇宙で迷っている迷い児に他ならないという驚くべき事実に気づいて、私は顔面が蒼白になるほどの不安に圧し潰されそうになっておりました。やっとの思いで気を取り直し、何事もないように談笑している乗客達を見ながら、「この人達は平気で笑っている」と、その人々を不思議に思うほどでした。このまったく思いがけない一瞬の出来事によって、私は不安と絶望の別世界の中へ一人だけ投げ込まれたように感じました。他の人々にどれほど説明しようと、人々は納得してはくれないであろうし、また誰も私がどこへ行くのかを私に教えることはできないのだ、ということもすぐに分かりました。アルバイトを中止して下宿に引き返えそうかとも考えましたが、そうしたからといって問題が少しでも解決するわけではありません。それで意を決して伊勢原行きの急行電車に乗りましたが、必死に内面の不安と戦っておりました。この電車の中で、耐え切れぬ不安から、私は生れて初めて「神様、助けてください」という声にならない叫びを上げました。そして、そう祈った時、私は自分がそれまでにめざしてきた生き方、すなわち「自分の力だけに頼って生き抜こう」という徹底した自力本位の人生観が一挙に崩れ去ったことをはっきり知りました。私はそれ以後、自分が神様を呼び求めたという事実を否定することができませんでした。アルバイトを終え、少し落ち着きをとりもどして、数時間前のあの言いようもない体験をなかば他人事のように、不思議なこともあるものだなと思いながら電車で無事に下宿に帰り着きました。しかしそれ以来、この問題はいつ私を不

安のどん底に投げ込むかも知れない不気味な力として心の中にうごめいておりました。

人間の盲目と悲惨を見、沈黙せる全宇宙を見つめるとき、また人間が光なくうちすてられ、いわば宇宙のこの一角に迷い込んで、誰によってそこに置かれたのか、何をしにここに来たのか、死ねばどうなるのか、を知ることなく、何を認識する能力も持たずにいるのを見つめるとき、私は恐怖におそわれる。あたかも眠っている間に、どこかの無人の島につれてこられ、目ざめたときそこがどこかも分らず、そこから脱れる術もない一人の人間のように。

（パスカル）

絶望の世界

もう二度と集会などへは行かないぞ、と決心したばかりだったのに、早速次の日曜日——だったと思いますが——には吉祥寺キリスト集会へ出かけざるをえなくなりました。その理由は、私が神に助けを叫び求めたという事実を隠してはおけない、という気がしたからです。神様に叫び求めざるをえなかったということは、私の自力本位の立場の破綻を意味し、この破綻は正直に認めなければならないと、なぜか強く感じておりました。それで、こうなったからには私は神様に公然とひれ伏すべきだ、神様への降服をはっきり表明するためにバプテスマを受けようと一大決心をして、その旨ベック師に申し出ました。私のこの突然の申し出は他の人々からみればきわめて唐突なことだったと思います。ベック師も驚いて「あなたは救いの確信がありますか」と私に問われました。もちろん私は「救い」がどういうものか知ってはおりませんし、その「確信」な

どということは初耳で、いささか驚きながら、「ありません」と答えました。ベック師は「救いがわからないでバプテスマを受けても何の意味もありません」と断られました。私は一大決心を断られて確かにがっかりはしましたが、しかしまだとことんのところまで砕かれていたのではありませんでした。まだまだ神と人との前に肩を怒らせ、体面をとりつくろう余裕をもっておりました。ところが、この余裕――神への侮りの思いが徹底的に打ち砕かれる時がきたのです。たしか七月初旬のある真夜中のことでした。私は寝床の中で「神なくしても生きていけるのではないか、現実に大多数の人々は平気で神なしに生きているのだから」などと自問自答しつつ、自分の人生をしっかり自分の手で握っていたい、神に明け渡すことなどできないことだと思っておりました。「神なくして生きている人々の中にも、尊敬に値する人格者が多くいるではないか。私も人並みに世の楽しみを味いながら、立派に生きていけないだろうか……」と、あくまでも神から逃れようともがいておりました。聖書の中でイエス・キリストが語っておられるように、私が神からの栄誉よりも人間からの栄誉を強く求めていたからであり、また罪の絆を断ちがたく思っていたからなのです。その時、神が示してくださったのでしょう。私の心の秘密は明らかにされ、私の良心を責めていた罪過の記憶が顔前につきつけられるように感じて、私は寝床から飛び起きました。私はひざまづいて神様に赦しを乞いつつ、同時に神なき人生の孤独と虚無の恐しさに震えおののき、この夜の闇はいつまでも明けないのではないか、という奇妙な思いにおびえておりました。また、長兄に対するかつての自分のあの冷淡な態度が脳裡に浮び、このような人生の深淵があることも知らずに、兄の挫折を冷笑した自分の高慢と愚かさに恥じ入ると同時に、心から

兄にあやまりたいと思いました。この夜ほどに、朝のくるのを今か今かと待ったことはありませんでした。

極度の不安と緊張に全身汗をびっしょりかきながら、私はこの晩はじめて「絶望」という言葉の本当の意味を知ったように思いました。神なくして、人生は完全に無意味なのだ——神を拒絶することは、無意味さと虚無の中に永遠に捨て去られることなのだ——そして、このことこそ絶望に他ならない。

この晩以来、食欲はまったく失われ、安眠は妨げられ、ひどい寝汗のために枕にはバスタオルを重ねなければならなくなりました。

救いの曙光

夏休みに入ると、故郷の父からできるだけ帰省するようにとのことだったので、一、三冊の専門書とベック師に貸していただいた聖書をもって故郷の奄美大島に帰りました。食欲はほとんどなく、気力も消え失せて、私はただ暇をみては聖書を開いて読んでおりました。両親に心配をかけてはいけないと、つとめて内心の動揺を隠して平静を装いながら……。聖書は新約の方の最初の頁から順次読み進んで行きましたが、イエス・キリストの道徳訓は一応理解できても、頻繁に出てくる奇蹟の記事はさっぱり理解できませんでした。イエスの処女降誕や復活についてはもちろんのこと、ガリラヤ湖上をイエスが歩かれたなどという記事は自然科学の大法則を踏み越える出来事ですから、これを受け入れることができるはずはありません。私は聖書と向い合いながら

まるで分厚い鋼鉄の壁に頭をぶつけているような気がしました。私の知っているあのクリスチャンの方々が、これらの記事をすべてそのまま事実として信じているなどとは到底考えられませんでした。四福音書を終り、さらに読み進めて行きますと、いろいろな手紙が出てきます。

それはかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終ることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・3～5）

確かに患難が忍耐を生み、忍耐が品性を練り高めるであろうことは私にも理解できる。しかしその品性が希望を生み出すとは一体どうしてであろうか。筆者のパウロは、その希望の源が聖霊による神との交わりにあることを述べているのであるが、その肝腎な点が私には理解できない。こういう具合に、肝腎な箇所になるとヴェールで蔽われてでもいるように、私にははっきり把握できないのです。しかし、励まし慰められる聖句もいくつか見つけました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（Ⅰコリント　10・13）

たとえいかに絶望的にみえる悩みであれ、私だけがそれに捕えられているのではない、同じ問題に出くわし、しかも解決を見出して、その苦悩から脱出した人々も多くいるのだ、とのパウロの言葉は確かに大きな励ましでした。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである」。訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。

肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。ですから、弱った手と衰えたひざとを、まっすぐにしなさい。また、あなたがたの足のためには、まっすぐな道を作りなさい。足なえの人も関節をはずすことのないため、いやむしろ、いやされるためです。（ヘブル　12・5～7、10～13）

この「ヘブル人への手紙」第十二章は「慰めの章」と呼ばれているそうですが、当時私はしばしばこの箇所を開いては力づけられておりました。「この私をも神が訓練しておられるのだろうか、ご自分の聖さにあずからせようとして……」今にして思えば、神はこれらの耐え難いような

不安や悩みによって、私の石のように固い心、高ぶった心を打ち砕き、私を罪の絆から解き放とうとしておられたのでした。私はもう中途半端な態度で、神とこの世を両天秤にかけながら、神に救いを求めるということはできなくなりました。以後酒を飲むまいと決心したのも、この帰省中のことでした。一方では酒に酔い、他方では聖書に向って神に呼ばわるということはふさわしいことではないと気づかされたからです。

長い故郷での休みを終えて、八月の終りごろか九月の初めに上京することになりました。当時の私の心境は聖歌五五七番にあるようなものでした。「風はつのり、夜はせまる、されど光みえず、御手を伸べて助けたまえ、恵み深きイエスよ」。何も知らずに私の出発を見送っているこの父母を悲しませることになるのではないか、という重い心を抱きつつ、私の足はしなえそうでした。鹿児島までは船で、それからは汽車に乗り、途中大阪にいる姉の所で一泊しました。その晩のことです。布団の中に入って電気を消すと部屋はまっ暗になりましたが、私はその何も見えない暗闇がまるでその時の自分の心の中のように思えました。必死になって光を探しているのにどこにも光を見い出すことができません。暗闇の中で恐れつつもがいているのが自分の姿なのです。そのころ、私はベック師に以前教えられた通りに、何でも神様に向って祈ることにしていました。その時も眠れないままに布団の中で「神様、どこにも光が見えません。私に光を与えてください。どうか平安を与えてください」と何度も何度も声にならない祈りをしておりました。その時、私はハッとしてひとつのことに思い当りました。それは「僕は朝から晩まで一日中ただ自分にだけ目を向け、神様に自分のことばかりを訴えている。私の心は自分でいっぱいになっている。どう

して神様の僕に対する御心は何か、と尋ね求めないのだろうか」という疑問でした。そして自分が生まれてからこのかた一度として真実に神の御心を求めたことがなかった、という事実に気づいて驚きました。私が何を神に求めるかではなく、逆に神が私に何を欲しておられるかということこそ大切なのだ、私ではなく神こそがすべての中心であるべきなのだ――このことに気づいた時、私はここに苦悩からの脱出の途、暗闇からの出口があるように感じ、一条の光を見い出したように感じて、「これだ、これだ」と自分の心に念を押しながら、眠りにおちいりました。それまでまったく理解することのできなかった聖書の真理が、一枚一枚薄衣をはがすように明らかになり始めたのは、この晩の経験以降のことです。

真理、救い、生命の発見

翌日、東京の下宿に帰ってからは、毎日部屋にこもって聖書に読み耽りました。有難いことに時間はたっぷりあり、聖書はどれほど読んでもあきたり疲れたりすることはありませんでした。聖書の言葉が文字通り「真理の光」として心の中に差し込んできて、渇き切り、病んでいた魂を潤し、いやしてゆくのが自分にもよくわかったからです。光は闇を追い払うだけでなく、冷え切ったものを暖め、同時に平安と希望と歓びとを与えます。聖書の言葉はちょうど光のようでした。私の人生をすっぽり蔽っていた深い冷い霧は徐々に晴れてゆき、私は自分の周囲だけでなく自分自身をも正しく見、判断する力を少しずつ与えられるのを感じました。神との出会いが人の心の眼を開き、それまで見ることのできなかったものを見ることができるようになるということは事

実です。それまでの自分の考え方、物の見方はすべてあべこべであったように思えました。人間の見方と神の見方とは正反対なのです。

イエス・キリストの十字架の意味が私に示されてきたのは、そのころのことです。「神のひとり子の十字架の死による救い」といい、「救いの確信」という……それは一体、どういうことであろうか。私の脳裡にはこの点がいつもひっかかっていました。それまで私は聖書の語る「罪」を「悪しき行為」のことであると考えていました。ですから、行為そのものに関しては、たとえどんなに立派なクリスチャンといえども完璧ではありえないから、しょせん普通の未信者達との差は程度の問題に違いないと考えられますし、事実その通りなのです。それでは、信ずる者は罪を赦され救われるのに、信じない人の罪は赦されずに滅びに定められるということは一体いかなる根拠に基づくのであろうか。これが最後の疑問点でした。

ところが、イエス・キリストの十字架について心を向けていくうちに、「罪」とは単に「悪しき行為」だけではなく、もっと深刻なものであることに気づいてきました。罪とは神抜きの人生を送るということそのものに他ならないこと、神を無視し、従って神に敵対している人生はたとえそれがどんなに最善の努力と精進によって貫かれたとしても、たとえそれがどんなに犠牲的な愛の生涯であったとしても、神はそれを罪と断定され絶対にこれを拒絶されるということ。神なき人間のいかなる営みも、すべて罪として永遠の滅びに定められなければならない。――イエス・キリストの十字架の死は、神の主権への反逆者としての罪人に対する神の恐るべき拒絶の宣告に他ならないのです。この事実を知った時には、罪に対する神の厳格さに畏れを覚えざるをえませ

んでした。罪に対しては、神は永遠の、絶対の拒絶を宣告されます。想像を越える十字架の厳粛さでした。しかし、この恐るべき神の怒りは、十字架の真理の半面に過ぎません。もう一方の真理は、イエス・キリストの死を受け入れ――すなわち、これまでの自己支配の人生を放棄し――死後三日目に復活されたイエス・キリストを受け入れるならば、神に赦され、受け入れられキリストの生命、永遠の生命にあずかることができるということです。私が真心から古き自己支配と自己追求の人生を捨て去り、方向転換をしてキリストに従い、キリストと共に歩むなら、私もキリストの生命、永遠の生命を自分のものとすることができる――これこそ神の御子の十字架上の死と復活による救いの意味に他ならない。神への反逆をやめ、神の主権を認めてこれに服すること、神に立ち返ること――これこそ「信仰によって義と認められる」ということに他ならない。ベック師のメッセージや、鉢野正樹さんや白木慎一さんなどの信仰の先輩達との密な交わりを通し、聖書の真理はこのように次々と示されてきました。

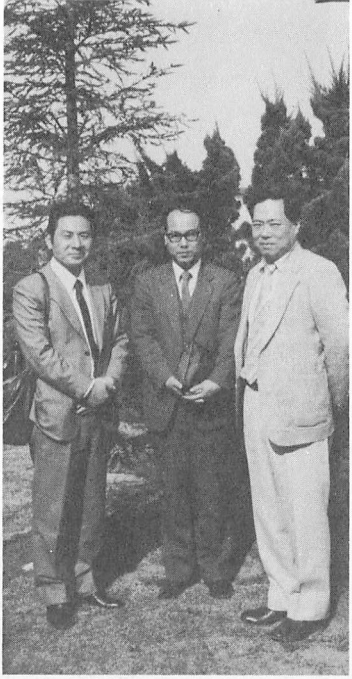
これこそ「救い」であり、「真理」にほかならないという確信を深めながら、しかもなお一週間ばかりの躊躇の後、私もついに自分の心に救い主、人生の主としてイエス・キリストを信じ受け入れることができました。この救いの道以外にはどこにも私に残されている道はないことを知ったからです。昭和四十三年九月下旬のある聖日のことです。そして翌月十月十三日の聖日に数人の方々と一緒にバプテスマを受けました。

あれからちょうど十六年が過ぎました。その間、主は聖書の約束の通りにご真実をもって私と家族とを導き守ってくださいました。クリスチャンとなったことを一度として後悔したことはあ

りません。それどころか、私は私の人生においてもっとも大切なものを発見した、そしてそれを得た、私の人生はこのことの故に大成功であると大いに満足しています。ただこの恵み与えられた信仰の馳せ場を終りまで走り通すことのみが、私の最大の願いです。

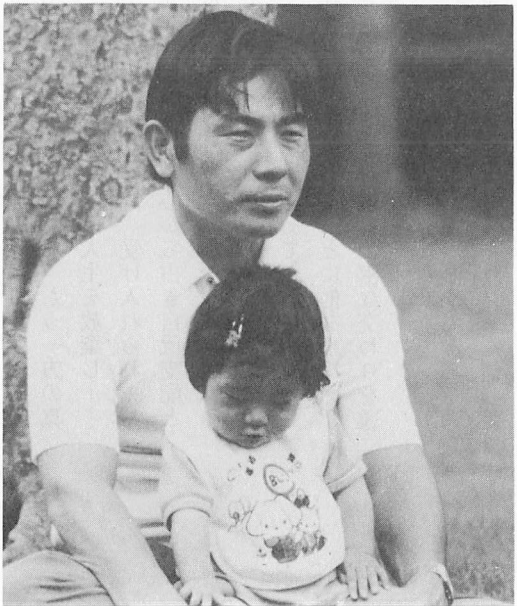
見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、
尊い礎石を置く。
彼に信頼する者は、
決して失望させられることがない。

（Ⅰペテロ　2・6）



▲筑波学園都市、筑波キリスト集会にて。尾崎英昭さん（中）、大庭治夫さん（右）と。

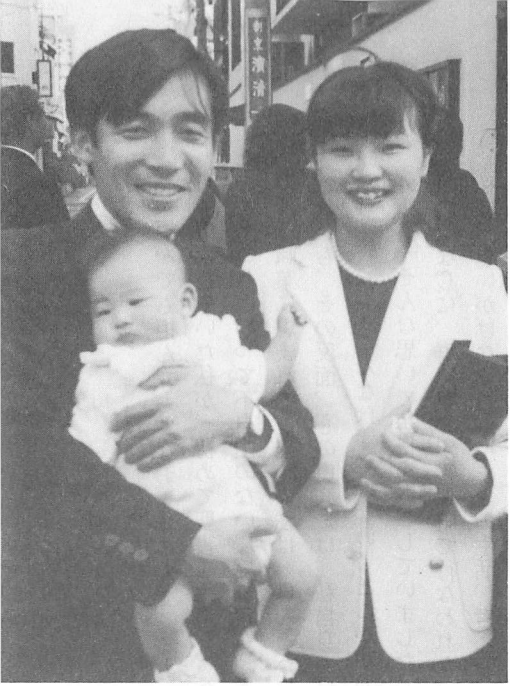
▼1985年春のバイブルキャンプ。軽井沢の芝生の上で。



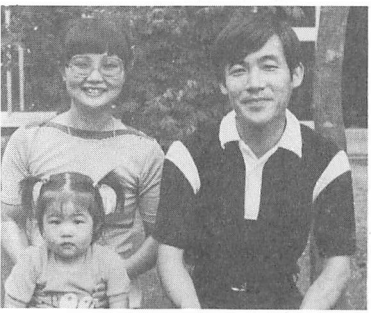
初めに神が天と地を創造した

家辺（やべ）恵美子

一九五三年群馬県の新田郡に生れる。笠懸小、笠懸中、桐生女子高校を経て、早稲田大学第一文学部卒。母校の桐生女子高校国語科講師（全日制、通信制）のかたわら、旺文社ＬＬ英語教室講師。大学時代の先輩であったご主人と結婚。家族は夫賢太郎さん、長女彩恵子さん。趣味は短歌、洋裁。

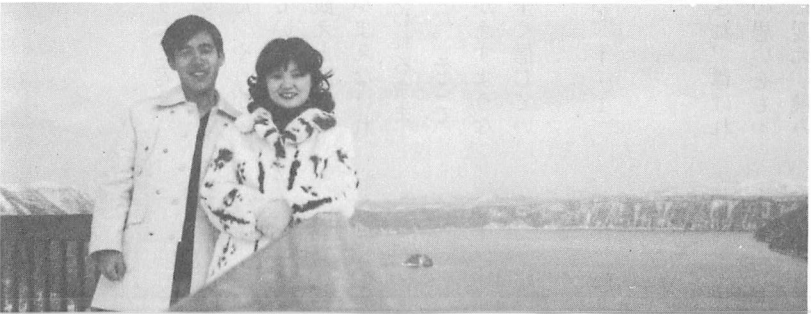


▲1981年中野の街角で夫賢太郎さん、長女彩恵子ちゃんと。



▲1983年夏の軽井沢バイブルキャンプにて。

▼新婚旅行。1980年摩周湖にて。



救い

「拒んでも拒んでも、なお入りこんでくるもの」。真理とは、そういうもののはずだと考え、暗中模索していた私が、初めて聖書を手にし、福音に触れたのは今から六年ほど前のことになります。これといって不自由のない環境で育ち、希望する学校に入学し、卒業し、また、やりがいのある職業に恵まれて、当時の私は、ほんとうに順風に帆をはるような生活を送っていました。けれども、その反面、心の奥底には、私自身ではどうすることもできないような、飢えと渇きがありました。「こんなはずではない。どこかがおかしい。何かが欲しい。何かをつかまえなければ……」そんな思いで毎日を過ごしていました。ちょうどそのような時に、友人に誘われるまま、何の気なしに、群馬県の伊香保町で行なわれた、「バイブルキャンプ」に参加しました。そこで、私は、思いがけなくも、今までの生活、考え方、物の見方をすべて、根底からくつがえすようなものに出会ったのです。私はその時初めて聖書というものを手にしたのです。まだ全く信じていないのにもかかわらず、第一ページの第一句、

初めに、神が天と地を創造した。　（創世記　1・1）

を読んだとき、体中がふるえるほどの感動を味わいました。

思えば聖書という書物は、ほんとうに不思議な書物です。これほど親しまれ、愛され、尊ばれている書物は、ほかにはないのではないでしょうか。また一方では、これほど不信の思いをもって読まれ、蔑まれている書物もないかもしれません。ところが、その不信感を信頼に変え、蔑み

を尊敬に変える力を聖書は備えているのです。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（Ⅰコリント　1・18）

その時の私は、このみことばの前者のほうで、ありったけの知識と理性のかぎりをつくして反論し、否定し、疑い、まさに拒んで拒んで拒みぬきました。しかし聖書はどこまでも執拗に私にまとわりつき、次第に私は、その中に、反論しきれないもの、否定できないもの、疑い、捨てさってしまうことのできないものがあることに気づき始めました。さからえばさからうほど、逆に私のほうがまちがっていると認めざるを得なくなってきたのです。

数千年前から伝わっている書物は他にもありますが、小説は小説、歴史書は歴史書として伝わり、それぞれ妥当な位置を占めて今日に至っています。しかし、聖書は、信じがたいことばかり書かれていながら、あくまでも真実、事実の書として、人々の手から手へと受け継がれて今日に至り、その一冊が私の手にあるのです。しかも、この書のために、かけがえのない命を、自ら進んで落とした人が、何人もいるのです。一口に命を落とすと言いますが、人間だれでも自分の不利益になることは、指先を針でつかれることでもきらうものです。

「これは信じてもいいのではないか。いや、一時の感情の高ぶりで決定すべきではない。信じたい。信じられない」福音に接してからの数日間は、苦しくて苦しくてしかたがありませんでした。そんなある日、私は台所に一つのトマトがあるのに気づきました。持ってみると、みっしり

と実った重さが快いばかりです。そして、それは美しい、深い色をしていました。「なぜ、黒い土からこんなにきれいな色のトマトの実ができるのだろう。林檎の木に苺がなることもなく、兎に豚が生まれることもない。なぜだろう……。神がいるからだ。どんなに人間が偉くても花びら一枚、米粒一粒創り出すことはできない」。私は、心からそう思い、その時、神の前にひざまづく決心をしました。

ついで神は、「地は、その種類にしたがって、生き物、家畜や、はうもの、その種類にしたがって野の獣を生ぜよ」と仰せられた。するとそのようになった。（創世記　1・24）

そして、「私の中には、自分ではどうすることもできない罪があること、その罪の裁きを、キリスト・イエスが、私個人の身がわりとなって受けてくださったこと」聖書に書いてあるままにそれを信じました。「救い主イエスは、血を流して死んだ。だから、私がいま、血を流して苦しんでいるその痛みをそのまま感じることができる。ここに、人間の実存を超え、孤独をうち破ることのできる、ただ一人の人、というよりは絶対者、神がいる。私の痛みも悲しみも迷いも喜びも、醜さも汚れも、全て、私の人格全てを、完全に理解し、そのまま受け入れる神がいる」、そう信じることができるのは、何という平安、何という喜びでしょうか。神を受け入れたこの時、私はほんとうに体が軽くなったような気がしました。しかし、まだこの時の私は、ただ救われたというだけのクリスチャンで、ほんとうの平安や喜びを体験するのは、もう少し後になってからのことでした。

神の知恵

高橋　麟

画商自営
熊本県出身／出水上鯖淵小／熊本女子師範附属小／済々黌中／会津工業／青山学院商学部卒／65歳／妻　米子／母　梅子



「この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです」（Ⅰコリント１・21）この聖句を「光よあれ」の巻頭に発見して、今までの聖書に対する考え方が根底からくつがえされました。さらに、「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています」（ローマ６・６）「このようにあなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい」（ローマ６・11）この聖句を読み、ベックさんのメッセージを聴いて父母の受洗後69年目にあれこれ迷った挙句に、神様に拾い上げられました。ずいぶん回り道をしました。神様はじっと待ってくださいました。生れる前からすべてご存知で、今この時引き揚げてくださいました。今までのことは赦してくださいました。これからは畏怖の念をもって神様にご奉仕することが私の最大の仕事であります。

聖書のみことば

高橋　米子

秋田県出身／院内尋常高等小学校／宮崎高等家政女学校卒／61歳

私は自分がクリスチャンになったつもりでおりましたが、心の開かれない者でした。昨年、夫と共に吉祥寺キリスト集会に導かれました。集会のみなさんが、聖書に精通しておられ、生き生きしておられる原因は、聖書のみことばに人生の土台をおき、みことばによって生かされている事だ、と気付かされました。聖書は、生ける真の神のみことばであり、神ご自身を啓示されたものであることを確信しました。私は砕かれました。今までの信仰態度を心から主イエス様にお詫びいたしました。「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（Ⅰヨハネ１・９）今年の三月、夫と共に、主イエス様の十字架と復活のバプテスマ（浸礼）の恵みにあずかりました。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」（Ⅱコリント５・17）

長い間、心の戸の外に立ってたたいてくださった主の御名を、心から賛美申しあげます。



主に生かされて

伊野　豊
自動車修理工場経営
夜須小／夜須中卒／高知マツダ㈱
ハイヤー運転手を経て現在に至る
32歳／妻　朱美／両親

私は「人間が死んだらどうなるのだろう？魂はあるのだろうか？あるとすればどこへ行くのだろう？」と思っていました。家が仏教のため小さい頃は両親に「人間が死んで50年したら神様にならあよ（なります）」と教えられていました。私の妻はいろいろな本を読んでいましたが、ある日、突然神様の一方的な愛と導きにより、土佐山田集会に行き、ベックさんに会いお話を聞いて妻は導かれ、神様を信じる者となりました。そして私は妻が導かれた後妻の勧めでベックさんに会い交わりを持ちました。私は無神論者でしたが土佐山田集会に行っているうちに、みなさま方と交わり、神様の愛を知りました。初めは少し抵抗がありましたが集会に出ているうちに、心が平安になりました。こんなにも罪深い私ですが、神様はお見捨てにならず日々導いてくださいます。今私達は魂の行き着く場所を約束され、平安な日々を送っています。どうかイエス様を知らない人達が一日も早く心を開かれてイエス様を心の中に受けいれ、主に生かされた日々を送られることができますように。

主イエスよ来てください

伊野　朱美
ピアノ・テクニトーン個人教師
高知県出身／日章小／香南中／丸ノ内女子高／東邦短期大ピアノ科卒／ヤマハエレクトーン講師、ナショナルテクニトーン講師を経て現在に至る／33歳

もし戦争がおきたら……この人類が築きあげてきた文化が一瞬にして失なわれることがたまらなく不安でした。音楽が私の生活のすべてを占めていましたので、この大切なものがなくなる事を考えると耐えられませんでした。里が天理教なので、結婚前に家の人の勧めで入っていましたが続かず、友人に誘われモルモン教にも行きましたが、やはり駄目でした。キリストは私にとっては、日本でいう神々の一人であり、仏様とも同じ感覚でした。でも聖書を読むにつれ神様は唯一でありイエス様だけがこの不安から救い出してくださることを知り、嬉しくてしようがありませんでした。イエス様は、音楽一番、私が二番、主人は三番だったのを主人が一番にしてくださいました。今夫と共に洗礼を受けて一年。この世で主人と私を結びつけてくださった主は天国に行った時私達を兄弟姉妹としてくださいます。心より感謝します。あんなに不安だった日々が、今は信仰生活に入り、何の恐れも不安もなく日々主と交わり、喜びに満たされています。この世にもう一度来てくださる約束をなさった主イエス様、来てください。あなたを心より待ち望みます。アーメン。

生きておられる主

後藤　隆

㈱小野測器ＦＡ機器技術部
東京都出身／武二小／武二中／都立国立高／電通大物理工学科卒／35歳／妻　文永／子供　一男二女
住所　田無市本町2-14-12-605
〒188　電0424-67-0200
家庭集会　隔週月曜日午前10時半



「イエス様、私はあなたを信じることができません。もし、あなたがほんとうによみがえられて今も生きておられる神ならば、どうぞ私があなたを信じることができるようにしてください」この祈りは、私がイエス様を信じ、主を受け入れるまえに毎晩寝床の中で祈った祈りです。

韓国から迎えた妻の寂しさを少しでも和らげようと、つきあいで行った集会で聖書を開き、福音に接する機会が与えられました。しかし、多くの点で納得できず、疑問を抱き、聖書に書かれていることを事実として認めることができませんでした。当然、イエス様を信じることができなかったのですが、ある方から「いまの心の状態をそのまま願いにして祈ってみなさい」との助言によって上記の祈りを続けていました。すると主は多くの事柄を通してご自身のご臨在と力を示してくださいました。その結果、私は聖書に書かれていることをすべて信じることができるようになり、希望と喜びで満たされ、主イエス・キリストの再臨を待ち望んでいます。

虚しさと寂しさからの解放

後藤　文永

韓国浦項市出身／1977年12月来日

韓国での生活に比べ、日本での生活は寂しく単純で虚しいものでした。結婚したことへの後悔や満たされない自分のみじめさなどで毎日が苦しく、この状態から早く逃げ出したい思いでいっぱいでした。ただ神お一人だけがこれらすべてを解決してくださいました。

私は高校の時、イエス様を信じ、受洗しましたが、いわゆる日曜クリスチャンでした。来日して、いろいろな教会に集ってみましたが、満たされず、長続きしませんでした。そんな時、今の集会を紹介されて集い、初めて自分で聖書を読み、自分の罪を知り、心から悔い改めました。今は喜びと平安を与えてくださった神の深い愛と恵みを覚えて御名を賛美し心から感謝しています。私のすべてを主に捧げ主に従って歩みたいと願っています。人間は誰でも主イエス様の十字架を信じることによって、死の恐怖感や人生の虚しさから解放され、神の子として永遠の命をいただくことができます。また、常に神の平安と恵みが共にあり、祝福された人生に変わります。この本に触れるすべての人がまことの神の恵みと祝福された人生をご自分のものとすることができますよう、心からお祈りいたします。



若き日に創造主を覚えて

川村規之助

高知県出身／高知市立商／台北高商卒／台湾の旧制中学で英語教師20年／81歳／妻　美喜子／子供二男三女／孫11名／曽孫４名

私が市立商の学生だった頃、キリスト教矯風会の学生ホームに入っていました。当時私は人生問題に悩んでいましたが、キリスト教には特に興味もなく、神の存在も理解できませんでした。

ある日私は、桜の名所「奥の土居」の丘に登ってホイットマンの詩集を読んでいました。満開の美しい桜。手にひやりと触れてきた木葉蛙の感触。花粉を運ぶ密蜂。そしてこのすばらしい自然を乗せて太陽をめぐる地球というもの……この宇宙がこんなにすばらしいのは、どうしても宇宙の創造者がいなければならない！その時、私ははっきりと創造主の存在を知り、心の目ではっきりと神様を見たのです。「真理を見つけた！真理を見つけた！」と叫び踊りながら桜堤を走り下り、寮や学校の友人をつかまえては証しをせずにいられませんでした。その年のクリスマスに、受洗しました。高商を卒業して台北に就職し、配偶者も与えられ、清らかな家庭を持つことができ、子供を育て、現在に至っていることを思うとき若き日の主の啓示と、多くの恵み、導きに、いくら感謝を捧げても感謝しきれない思いでいっぱいです。

神様に運ばれて

川村美喜枝

高知県出身／私立土佐高女卒／76歳

主人は今年81歳、老年になって折にふれ自分の中から力が失われてゆくのを覚える時、私たちが神様によって日々運ばれているということが身に泌みてよく分り、大きな喜びと平安に満たされております。私たちのささやかな歴史の始まりから終りまで神様が責任を持って持ち運んでくださるというみことばは、何という慰めでありましょうか。外地より引揚げて40年、いろいろなことがございましたが、ある日ふとしたことから昔教会でお顔を存じ上げている竹本誠一さんと再会し、光よあれをいただいて帰りました。その中に書かれている証し人の皆様の身に起ったことは、私はそのまま無視することができませんでした。私はすぐ主人を誘って山田集会へと出向き、そして暖い集いの中に加えていただきました。神様に負われる人生の、この時期に、山田集会の交わりの中にいれていただけたこともほんとうに神様のご摂理によるものと感謝しております。一年一年は夢のように過ぎ去り、やがて天に召される日がおとずれます。死の彼方に神様が用意してくださった永遠の命を信じ、恵みの光の中を、一日一日、感謝して生きております。

イエス様に従って

小川　暢義

東京都出身／寺島小／安田商業学校／太陽神戸銀行／同板橋支店長の後退職／70歳／妻　貴美子／一男三女



このたび、私はイエス様を自分の主として受け入れ、従う決心をいたしました。70年もの長い年月を仏教にすがってきたので、仏教と別れるということは、私にとって重大なことでした。死んだ父母と別れてしまいどんなバチが当ることかと思い煩っていたからです。イエス様の御心と仏教への思いで、毎日悩みました。ある日、聖書を開きました。

「生きている者は自分が死ぬことを知っているが、死んだ者は何も知らない。彼らには何の報いもなく、彼らの呼び名も忘れられる」（伝道者9・5）

「ちりはもとあった地に帰り、霊はこれを下さった神に帰る」（伝道者12・7）

と、聖書はうたっております。

私はこれを読んで、本当にそうだとはっきり分かりました。そこで、私は朝夕拝んできた仏壇をしっかり閉めて、先日これを処分しました。そして妻貴美子と共に、イエス様によってまことの救いをいただいたことを公に証しする意味で洗礼を受けました。

今は永遠の命をいただき、主の恵みによって、平安のうちに日々を歩ませていただいております。

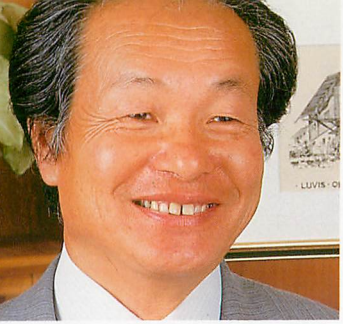
神様
ありがとうございました

小川　貴美子

東京都出身／篠崎小／国府台女子学院／66歳

昨年9月に私は心不全を起しました。体は氷のように冷え、手足は白くなり、脈拍はかすかになって、このまま死ぬかと思いました。その時私は思わず「神様助けてください」とお祈りしました。主人を起してマッサージをしてもらいましたが、あまりの冷たさに主人はびっくりしたそうです。いつのまにか眠り、目が覚めた時は夜が明けておりましたが、体は暖かくなっていました。奇蹟をいただいたのです。「神様ありがとうございました」と涙ながらに祈りました。それはすでに救われている息子一家が、私の病がよくなるように毎日主に祈り続けていました願いがとどいて、神が救ってくださったのです。

聖書は、唯一の神がイエス様を通してどれ程までに私たちを愛してくださっているかを語っています。永年私たちは先祖を大切にしてきました。その仏教と別れるのはつらい事でしたが、ついに私は主人の決心に従いました。このたび二人そろって救いをいただき、その証しとして洗礼を受け、喜びと平安に満たされた毎日を送っております。



かえりみて 主の道に

石井　寿雄

三洋巧芸㈱代表取締役
東京都出身／渋谷区本町小／都立世田谷工高２年中退（戦時疎開）／福島県立岩瀬農高／53歳／妻麗子／子供　二男

躁うつ、ノイローゼ、そんな活字がやたら目につくような状態の中で聖書を手にする導きを得ました。「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのために命を失うものは、それを見いだすのです」（マタイ16・25）。最後に頼れるのは自分だけだ、世の多くの男性がそうであるように、私も自分にそう言い聞かせて生きてきました。しかし人は本当に自分だけに頼って生きていけるのでしょうか。結局それはうわべだけの強がりに過ぎません。だから私のようにストレスの海の中で溺れそうになったりします。まして不測の事態に直面し、死の影をかい間みた時などはどうにもならず、「無神論者の神頼み」というおかしなことになるのです。神にすべてを明け渡すことは私にとって大変勇気のいることでしたが、心を決めて一歩踏み出した時、そこに新しい道がありました。本当の生きる目的が見えて来たのです。聖書の示すこの道を歩き始めた時、昨日までの思い煩いは過去のものとなりました。「私はあなたの恵みに拠り頼みました。私の心はあなたの救いを喜びます。私は主に歌をうたいます。主が私を豊かにあしらわれたゆえ」（詩篇13・5､6）。



真の神に 出会った喜び

木口　英子（ふさ）

京都出身／日彰小／府立第二高女／府立女専卒／74歳／子供　一女

娘の洗礼式に初めて吉祥寺集会に導かれ、夏には軽井沢のキャンプに集う恵みを与えられました。主人を10年前に亡くして以来、この世の欲を一切捨てて歩んでいるつもりでおりましたが、礼拝や学び会に集ううちに思い煩いがたくさんあることに気づき、聖書の言葉を通して、神から離れ、自分勝手に歩んできたことを示されました。そして自分がどんな無力な存在だったかがよくわかり、主に従うより他にないことを知らされ主に従う決心をいたしました。この世のあかをすっかり落とし､幼子のように無心で信じることができ、その救いの素晴しさを感謝しました。神は私のすべてをご存知で、このような人生の終わりに近い者を、それまでの長い間の人の言い伝えによる偶像礼拝から解放してくださり、真の神に出合わせてくださいました。これは何にもかえられぬ恵みです。「何も思い煩わないで､あらゆるばあいに､感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」（ピリピ４・６､７）。



真の安らぎを求めて

池尻美佐子

福岡県出身／後藤寺小／後藤寺中／県立西田川高／中村学園調理科卒／福岡銀行／44歳／夫　平三郎／子供　二男二女

私がイエス様を信じる以前は、夫と三人の子供と共に格別な苦労もなく過していたのですが、そのような平穏無事な生活の中にあっても、子供の頃から根強く私の心の中に巣くっていた孤独感は依然強く私を支配しており、私は心の安らぎを知らない者でした。それは何ごとにも自分中心で、自分をよりよく見せたいという私の思いが原因であるのもよく分っていました。自分の内に清い思いや、良いものが何も無いことを悲しみつつ、自己錬磨で解決しようと自分なりに努力しましたが事態は改善されず、かえって自信過剰と劣等感の板ばさみとなり、自我の縄目はきつくなるばかりでした。集会に行き始めても、聖書と自分の悩みは長い間結び着かず、信仰を持つような人はみじめな人だと決めつけて、私はみじめではないし、みじめな人間にはなりたくない、と考えていました。しかし遂に私こそみじめな人間です、この汚れた者を清めてくださいと主の前にひれ伏し、イエス様が十字架で死なれたのは、まさに私のこの我がままと罪を清めるためであったと主のみわざに感謝することができ、孤独感から解放され、神からの真の安らぎを味わう事ができました。



心の平安を得て

今川　三枝子

東京都出身／杉並第６小／阿佐ケ谷中／富士見丘高卒／大丸興業／43歳／夫　務／子供　２人

「人とは何ものなのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは何ものなのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは」（詩篇８・４）。11年前私はイエス様の救いを受けました。当時平凡な家庭の主婦として、子育てに専念していました。表面的には良妻賢母を装っての毎日の生活でしたが、心の中は怠惰で空虚でした。子供を育てる親としての確かな基準がなく、いつも自分の感情で育てているのに気づきました。このころ浅間山荘事件という悲しい出来事が起りました。人が人を愛することのできない状態。残酷な状態。死。事件を起した若い人。親も我が子が幼い時にこのようなことになるとは夢にも思わなかったことでしょう。私にとって大きな衝撃でした。そんな時聖書を読む機会が与えられました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ14・６）。聖書のみことばは私をとらえました。キリストの十字架の贖い、罪の赦し、救い、永遠のいのち、平安……確かなものは、聖書の中にありました。「主に信頼するものは、決して失望させられることがない」（Ⅰペテロ２・６）

住所　東久留米市滝山3-4-18 〒203　電0424-73-2494　家庭集会　毎１・３土夜７時半



神に支配される人生へ

片本　博

幸福相互銀行加賀屋支店長
大阪市出身／白木中／富田林高／関西学院大学経済学部卒／50歳／妻　育代／子供　一男一女

私は、末っ子として生れました。そのため、苦労知らずで依頼心が強く、人の気持を大切にすることを知らずに育ちました。ひもじい思いをしたこともなく、といって贅沢した覚えもありませんが、ただただ平凡な生き方をしておりました。ですから私には信念がなく、一本筋金の入った考え方が固まっていない状態で、私が歩む人生がどのようなものかが分からなかったのです。でも私は、誰かが私を操っておられること、私の人生をすべて知っていてくださる方がきっとどこかにおられると思って生きてきました。

その方を、私はいま、知りました。高慢な人を嫌い、謙虚な人を愛される方、罪を悔い改める人を愛してくださる方、すべての心の重荷を負ってくださる方、そして全宇宙を支配される方……このような偉大なる方によって、私は支配されていることを心から感謝しております。「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです」（ヘブル13・8）人は好き嫌いで差別しますが、イエス様は先輩後輩関係なく区別されません。すべてを委ねてイエス様から湧き出る喜びの泉の水を飲んで、意義ある人生を送らせていただいております。



主に受け入れられた私

山本いづみ

国士館短大非常勤講師
東京都出身／聖心インターナショナルスクール小・中・高／ミルスカレッジ／カリフォルニア大学サンディエゴ心理学部卒　B.A.／東京聖書神学舎1年コース終了／27歳／母　孝子

一人っ子の私は両親のありあまる愛の中で何不自由なく幸せに育ちました。13歳の夏軽井沢で、あるアメリカ人の宣教師の家族と1ヵ月ほど共に生活して、その明るく透明で喜びに満ちた生活に魅せられました。家族の中心にあるのは目に見えない「主」そのものでした。しかもその方は、耳も鼻も刃物で切られ目も開かない4歳と5歳の、両親からいじめられ捨てられた日本人の男の子たちを、ご自分の5人の子供たちといっしょに育てられているのです。これは本当の信仰であり、イエス様は生きておられ、人間ひとりひとりはたとえどんな状態にあっても愛してくださっていることの大きな証しでした。そして私のわがまま、自己中心の罪の姿がはっきりと見えてきました。イエス様が十字架の上で死ななければならなかったのは、このみにくい私の罪の身代りであったことを知り、私はイエス様を救い主として受け入れました。あの二人の男の子たちが宣教師の家庭に受け入れられたように、私も神の家族の一員とされたのです。若い時にイエス様を知ることはすばらしいことです。それだけ長い間イエス様と共に歩くことができるのですから。



神の恵みに感謝

野口　クリ

新潟県出身／上組村第二小卒／83歳／子供　二男／孫　五人

私は昭和26年に神様のお招きをいただき、教会に導かれました。それまでは自分の思うままに、神様に背を向けてさまよい歩いておりました。夫は昭和19年に病死しました。私には二人の息子が与えられておりましたが（第１集広氏の証し参照）、正しく育てる自信もなく途方にくれ、毎日どこかに生きる支えはないかと求めておりました。そんな折に友人に導かれ近くの教会に出席いたしました。私は仏教徒の家に生れ育った者ですが、何の抵抗もなく主の導きに従いました。神様は私のようなものにもみことばを通して歩む道を指し示してくださり、イエス様の十字架上で流された血潮は、罪ある私のための身代りに流されましたことを覚えて、心から感謝しております。ずっと祈っていた通り、息子たちも主の愛の御腕に抱かれて、光の道を歩む者とさせていただきました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）のみことば通り、今私ども家族７人は全員主のお恵みにより、み救いをいただきました。言葉につくせぬ神様のご愛を思いつつ、感謝と喜びの中に日々を過させていただいております。



もう趣味はいりません

矢野　雅子

香川県出身／坂出中央小／坂出中／坂出高／明善短期大学家政科卒／39歳／夫　琇久／子供　三女

何の良いところもなく、与えられている事への感謝も自覚もなく、どのように毎日を楽しく過ごすか目先の事ばかりに囚われていた私でした。気の合う友人達とグループを作って時々小さなお茶会を始めていたところでした。それも心豊かで楽しい老後のための準備のつもりでいました。そのような人間的な楽しみも、お互いの経済や、健康、まわりの状況が整っていての事ではありますが……。

私は本当に知りませんでした。

自分がこのように虚しい一時の楽しみを追って生きている事にさえ気付かないうちに、主はすでに本物の幸せ、本物の生きる喜びを備えていてくださったとは。しかもそのような物を受けるに価する行いは何一つしていないこの私に。主を受け入れ、救われるという事は何ものにもかえられない満たしです。老後を今から心配する必要もなく、何の条件もなくただ主を見上げるだけで心からの感謝で心が満たされ、喜びが溢れます。まだ福音を耳にされたことのない方、どうか生きている本当の意味をこの集会に訪ねてください。

誰にも与えられる喜びが、あなたをお待ちしています。



主の恵みは十分です

黒田　百合
東京都出身／沼津第２小／沼津第２中／都立武蔵ヶ丘高／昭和女子大学家政学部卒／42歳／夫　英文／子供　二男

「知恵のある女は自分の家を建て、愚かな女は自分の手でこれをこわす」（箴言14・１）確かなものが何であるかも知らない愚かな母親であった私は、目に見えるものばかりに気をとられ、子供に対しても、型にはめるような教育を押しつけました。その結果、子供の精神は不安定になり、私の心も動揺するという有様でした。互いに赦し合うこともできず、気持の一致も見られなくなりました。

子供が中学生となり、反抗が強くなるようになりましたので、私自身のよりどころを見つけ、自分自身を立て直したいと思い集会をおとずれました。主は助けを求める者に答えてくださり、聖霊で満たしてくださいました。「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」（ヨハネ８・32）このみことば通り、身も心も解放され喜びと平安で満たされました。

救われてから２年がたちました。現在高２の子供も主を受け入れ、精神的にも大きく成長しました。

主の恵みは十分です。主にある家庭が築かれつつあることを心から感謝いたします。



なくならない希望

池田　潤太
桜ガ丘歯科診療所勤務
東京都出身／桐朋小／桐朋中／桐朋高／日本歯科大学卒／26歳

幼い頃から日曜学校へ行き、自分はクリスチャンだと思っていました。中学生になってから、何か心の中にもの足りなさを感じ、ふと我に返ると、しばしば自分の存在価値について、「私が生きていても死んでいても同じじゃないか、広い宇宙の中で私の存在はあまりに小さすぎる」と思いました。でも今生きているのだから、死ぬまでおもしろおかしく、心を満たしていければそれでいいと考え、自分の欲求のままに生きようとしていました。しかし、イエス・キリストと初めて出会った高校一年生の時、ちょうどパズルの最後の一つがぴたりとはまるように、キリストは私の心の中に入ってこられました。そして私は虚無感から解放され、自分の存在価値、人生の意味、無くならない希望を与えられ、環境は今までと同じなのに、心の状態はまったく新しく変えられました。人は、イエス・キリストによってのみ、人生の問題の真の解決を得ることができ、この世のもの、例えば富、権力、快楽、宗教といったものによっては虚しいその場限りの満足しか得られないと思うのです。主イエスこそ、無から有を生じさせる真の救い主です。



わたしが主である ほかにはいない

イザヤ45・5

櫻井　道子

香川県出身／仲南小／琴平中／琴平高／東京文化学園短大卒／43歳
夫　昇／子供　一男二女

かつて私は恵まれた生活を送りながらも心を満たすものがなく、苦悩の中から「神様、あなたは全能の方ですのに、こんなみじめな人生を与えるために人を創造なさったのでしょうか、喜びに至る鍵をあなたはお持ちのはずです。欠点だらけの人の親でも、子を捨てないで養い育てます。ましてや欠ける所のない天のお父様は救いの道を完成しておられるはずです。どうぞ、あなたの真理に導いてください」と祈っておりました。いわゆる宗教や哲学にも満たされず医者である主人も友人も虚しさを癒す慰めとはなりえません。やがて生ける神様は私を憐み、十字架そのものを指し示してくださいました。イエス様は、こんな私を自分の子として買いとるために、自ら死と血潮の代価を払ってくださったのです。人を愛することができなくて苦しんでいた私は、そのみ姿に神様の愛を見、「わたしを信じる者は永遠の命を持つ」というみことばを信仰によって受けとることができました。自分を見つめず主を仰ぐ生活に変えられて私自身は愛のない者ですが内住のイエス様は人を愛さずにはいられないことが分かります。わたしが主である、と神は言われます。



神の愛に守られて

田中　美保子

秋田県出身／日新小／聖霊女子短期大学附属中／同高卒／28歳／子供　二男

私は、これまで28年間というものを、苦労ということをほとんど知らずに生きてきました。ふと気がついたとき、これまで順調にきたのだから、これから先の人生に何か試練が待っているのでは、という不安を持つようになりました。不安が現実になった時に、私ひとりでは何もできないだろうと考えておりました。

ちょうどそのような時に家庭集会に招かれ、ベックさんにお会いし、罪とは何か、イエス様の十字架の意味とは何かをくわしくお話しいただき、今までの神にそむいた生活を悔い改め、イエス様を救い主ですと口で告白し、救われました。主なる神様は、私のように小さい者をも愛してくださって、祈りにも答えてくださり生きて働きかけてくださるお方と知って、嬉しくて感謝でいっぱいになりました。

いまは「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）というみことばを心の支えとし主人や子供、両親の救いが必ずあることを感謝し、まだイエス様を知らない方々の救いの日々を祈っております。



いやし主 神の愛とめぐみ

高田　英彦

八千代信用金庫南町田支店勤務
東京都出身／池雪小／大森十中／高輪高／日本大学商学部卒／41歳／妻　茂子／子供　一男二女
住所　八王子市左入町520-16 〒192 電0426-91-4733　土曜学校 毎月第1・3土 2時(子供)

私は昭和53年3月に妻と共に受洗しました。その時から私の気負いと空しさはすべて取り除かれました。それまでの私は常に死を恐れ、無力で弱い者であるのに、強さをつくろっているものでした。周囲の反対を押し切っての結婚生活も「おれの力できっと幸せにしてやる」と大変気負ったものでした。しかし人の気持や妻の心の悲しみなどは、どうしても変えられませんでした。長男のネフローゼという難病を通しても、親でありながら、子供の病気を癒すことも代ってやる事すらできない人間の無力さ、もどかしさを痛感しました。ただ仕事と酒によって気持を紛らわせているだけです。人間て何なのだ。喜怒哀楽の日々の繰り返しで、いずれ死ぬだけか。そんな時に神様はクリスチャンである兄を通して私達を集会に導いてくださいました。そして「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」と語りかけ、私達に真に生きるべき道と平安を与えてくださいました。感謝です。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です」(エペソ2・8)



生も死も 主の御手の中に

小山　佳子

東京都出身／芦屋山手小／神戸パルモア女子英学院（現啓明高）卒／58歳／子供　一女
住所　神戸市東灘区岡本1-6-14　電078-453-2455　家庭集会　毎月2～3回（不定期）

「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です」(ピリピ1・21)。私の主人は、がんの末期の病床で、イエス・キリストを救い主として受け入れ、平安の内に天に召されました。生前の主人は健康に自身を持ち、家族や親族、仕事、自分の会社を愛し誠実に力強く生きることで幸せが得られると信じていました。がんの末期の激痛はその主人の信念を根底から覆えしましたが、集会のみなさまの熱い祈りに支えられ、主人は主に心から叫びました。主は祈りに答えてくださり、主人を救いへと導いてくださいました。毎日涙を流して悔い改め、また救われた喜びをまだ主に出会っていない方に伝えたいから家庭集会をさせていただきたいと話し、娘が救われることを日々祈っておりました。主人の召天後、娘は救われ、また神戸の地で毎月家庭集会をさせていただいております。

いまは、御国に召されるまで、イエス・キリストと共に日々歩みつつ、すべてを御手にゆだねて平安に過させていただいております。「キリストは死も滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました」(Ⅱテモテ1・10)。



主は我が喜び

高橋久美子

沖縄県那覇市出身／開南小／寄宮中／那覇高／東洋女子短大英文科卒／39才／子供　一男

私は沖縄のクリスチャンホームに育ち、幼いころは、日曜学校に通っておりました。しかし成長するにつれてだんだんと教会から離れ、人生設計を私自身の価値判断で立ててゆくようになりました。結婚し可愛い子供も与えられましたが心はいつも満たされず、呟きの多い日々を送っておりました。子供の教育方針にも一貫したものがなくいろいろな情報に惑わされ疲れ果てている時、吉祥寺集会発行の「実を結ぶ命」という本を読んでイエス様に出会いました。その本には20才でがんで召されたリンデさんの死への恐れや悲しみではなく、イエス様への愛が満ちあふれていました。神は生きておられる！私は思わず「イエス様私の内に入ってください」と祈り信仰を持ちたいと願いました。この本を通して、私はいわゆる「宗教」と真の「信仰」との違いを知ることができたのです。救われた今、私は長い間の母の救霊の祈りがあったことを心から感謝し、そして私もまた、主人、親戚、友人、一人でも多くの方が救われることを祈ってゆきたいと思います。「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」（Ⅰテモテ２・４）。

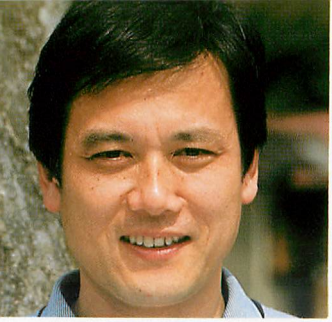


主は私を広い所に置かれた

松本　明美

沖縄県出身／神原小／神原中／那覇高／東横学園女子短大卒／日本航空／32才

「大草原の小さな家」というテレビ番組を見るたびに沖縄で育った幼い頃のことを思い出します。両親がクリスチャンで暖かい愛に溢れた家庭でした。教会へは行っていましたが恵まれた生活の中ではすべてが満たされ、意識してイエス様を求めることはありませんでした。結婚して自分ではどうすることもできない問題に直面した時、大変うろたえました。そしてすでに救われていた姉を通して吉祥寺集会に導かれ、ベックさんとの交わりの中でまことの福音に触れたのです。私自身の罪を示され、その罪のためにイエス様が死なれたことを心から信じ、悔い改め救われました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）　私が育ってきたようなイエス・キリストの愛を土台とした家庭に造り変えるため、今主が私の家庭の上に働いてくださっていることを確信していますから心は平安です。すべてを主に委ねる日々は感謝と希望と喜びに満ちています。「苦しみに会ったことは私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩篇119・71）。



天に宝を

村上　誠
弁護士
名古屋出身／東京商船大学航海科卒／新和海運㈱航海士／退職後司法試験合格現在に至る／妻　房美／子供　2人

私は、「俺が」意識の塊でした。また一方、たゆまず努力すること、一生懸命頑張ること、克己心などといった言葉が大好きで、今まで真面目にやってきたと自負していました。そして毎日の仕事は「基本的人権を擁護し、社会正義を実現することを使命とする」（弁護士法第1条）というのですから大変です。

何が神様か！

ところが神様は言われます。「自分に言いつけられたことをみなしてしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい」（ルカ17・10）。「不遜な者、神をけがす者、感謝することを知らない者、慢心する者……こういう人々を避けなさい」（Ⅱテモテ3・2、5）。

いま、私には、次のみことばが強く響いてくるのです。「あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい」（ルカ18・22）。



生きる土台に

財津康子
埼玉県出身／桜木小／桜木中／豊島ヶ丘高校卒／商工中金本店審査部を経て結婚／32才／夫　宜久／子供　一男二女

主の一方的な恵みで、私は吉祥寺キリスト集会に導かれました。高校生の時から聖書を与えられていたにもかかわらず、肝心の主イエス・キリストの救いを知ることができませんでした。その後聖書は本棚を飾る書物の一部となってしまいました。救われる5年位前から、子供のけがや主人の体のことなどの心配がきっかけとなって偶像にすがるようになりました。不信の念にかられながらも、苦しい時の神だのみ、どんなことでもしようと一生懸命でした。しかし、一見不可能な状態から、神は救いの手を差しのべられたのでした。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの」（イザヤ43・1）。そして一年半前天国行の列車に飛び乗ったのです。神の恵みは深く、その後みことばは力強く語りかけ、イエス様の十字架の血潮は他ならぬ私の罪のために流されたのだと知り主によって悔い改めへと導かれました。今では、主イエス様が家庭の中心であり、また生きる土台となりました。主人、子供たちと共に賛美と祈りをささげる毎日に変えられました。神に栄光あらんことを心から祈ります。



人生の目的

上野　亘
東京SIM外語研究所所長
佐賀県出身／玉島小／玉島中／唐津高／中央大法卒／50才／妻　恭子／子供　三男二女

人はパンを食べていれば生きていけるものでしょうか。自分は何のために生まれてきたのか。人生は生きる価値があるのか。人間はどこから来てどこへ行くのか。このような疑問が心に浮ばない人はいないと思います。この回答が得られず、悶々とした日が続けば、人は生きる望みを失いそうになります。人は誰も自分で目的を定めて生まれてきた人はいません。気がついたときは、生まれていたのです。そこで、自分勝手に人生の目的を定めて生きたらどうなるでしょうか。たとえば自動車は、人間によって道路上を物や人を運ぶように作られ、その目的に合った形と性能を与えられています。その自動車が走るだけでは満足せず、空を飛ぼうとしたらどうなるでしょうか。能力を越えて疾走し、壁に激突して自滅するのが落ちです。自動車が自分でどんなに考えても、自分が作られた目的を知ることはできません。人間もまた、自分でどんなに考えても、生まれてきた目的を知ることができません。なぜなら人間は全知全能の創造主によって造られたからです。私はイエス様の十字架による血の贖いの救いを受け、真の人生の目的をつかむことができました。



見つけ出された迷える小羊

阪本　良子
大阪府出身／豊島小／豊中第一中／池田高卒／夫　実／子供二人

主によって与えられた36年間のひとつひとつのできごとが、すべて主のみもとへと立ち返るための導きであったことを感謝しております。思い起しますと、東京の杉並区へ転居して4年目のクリスマスのことでした。大阪で生れ育ったので東京には親戚や知人がまったくない私は、誰にも相談したり頼ることができない寂しい毎日の中で、ある日主の導きにより家庭集会に導かれました。「イエス様はすべてをご存知であり、愛してくださっていますよ」という言葉に、私の苦しみを本当に分かり愛してくださる主に出会いました。若い時から聖書を持ってはいても、その知識はまったくありませんでしたが、主イエス様が私のために大きなみわざをなしてくださったという喜びと感謝でいっぱいでした。これからも主の導きのままに、主とともに歩みたいと願っています。

「私はあなたの御霊から離れてどこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう」(詩篇139・7)　「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ11・28)。



神様の平安のうちに

宮田　登美
東京都出身／中和小／旧桜蔭高等女学校卒／70歳／子供　二男一女／孫　6人

昭和45年杖柱と頼む主人が病没した後、日々心細く過しながらこの世で安心して頼れる確かなものは何かと求め始めた頃、息子の矢八郎がいつも便りですすめてきます神様の事に気がつきました。吉祥寺集会に何度か出席させていただきましただけで聖書の内容も十分には知らないまま51年春受洗いたしました。神様の一方的な御愛により御在天の父なる神にお祈りする事を許されましたこの身の幸せを、感謝いたします。取るに足りない愚者にも、幸せな時涙にくれた時と起伏の多い一生でした。聖書を通して自分の行いが神様に背を向け自分勝手な歩みをしてきた事をはっきり分らせていただき罪の重さに心砕かれました。イエス様の十字架の贖いによって私の罪も許していただき平安の内に過させていただく今日この頃でございます。

また神様は生きておられるお方で、神様を信じる信仰によって人間の常識を越えた力となって私達をささえ、前進させてくださる事を体験させてくださいました。感謝でいっぱいでございます。



いと静けき港につき

笠井　庸三
ダイセル化学工業㈱メンブレン・メディカル事業部
広島県出身／吉田小／吉田中／吉田高／明星大学理工学部卒／34歳／妻　博子／子供　一男一女

私は長い間、自己中心で高慢な人生を歩んでいました。イエス・キリストに出会うまでは、自分のもっているバイタリティーや、経験によって確立した私特有の価値観に自信があり、頼れるものは自分だけで、自分の弱い姿など想像したこともありませんでした。大学を卒業して6年間の内に自分から3回も会社を変り、より自己を満足させられる所、より高い評価を得られる所を求め続けていました。「人の子たちよ。いつまでわたしの光栄をはずかしめ、むなしいものを愛し、まやかしものを慕い求めるのか」（詩篇4・2）。イエス・キリストがこのような自分の罪をあがなうために十字架にかかり身代りとなって死んでくださった事実を知り、このイエス・キリストにこれからの人生を明け渡す決心をしました。現在は家族と共に主を見上げ、平安と喜びに満ちた日々を送らせていただいております。親、兄妹や同じ社宅に住む方々も、主に導かれ共に賛美できる幸いを与えられています。「いと静けき港につき、我は今安らう。救い主イエスの手にある身はいとも安し」。（聖歌472人生の海のあらしに）

受洗

その後、吉祥寺キリスト集会に集うようになり、数年後、昭和五十六年三月二十九日に洗礼を受けました。何の迷いもなく、とても自然な気持で水に沈められました。桜も咲き始め、美しい穏やかな日だったことを覚えています。受洗にあたって、

主は私の羊飼い。
私は、乏しいことがありません。
主は私を緑の牧場に伏させ、
いこいの水のほとりに伴われます。
主は私のたましいを生き返らせ、
御名のために、私を義の道に導かれます。
たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、
私はわざわいを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖、
それが私の慰めです。
私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、
私の頭に油をそそいでくださいます。
私の杯は、あふれています。

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと
恵みとが、私を追って来るでしょう。
私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。
（詩篇　23・1～6）

という聖句を与えられました。これはちょうど、私が一番好きで、生活の支えにしてきた聖句でしたので、心から感謝することができました。その時、私は七カ月の大きなお腹をかかえていました。そして与えられたのが、長女の彩恵子です。

確信

クリスチャンになったからと言って、毎日の生活の中のさまざまな重荷や、それに伴う悩みは軽減されるわけではありません。また、自分の内面も、急に清らかになるわけでもありませんから、信じて救われたときの喜びは、私の場合、長続きしませんでした。いつのまにか私は、日常のくりかえしの中で、喜びのないクリスチャンになっていたのです。それどころか、神の存在を意識してから、それまでみすごしていた自分の欠点やいやらしさに目をとめるようになり、前よりも苦しむことが多くなっていきました。そして、「こんなことなら、神さまのことなどには目をつぶって暮らしているほうが、ずっと楽だった」とさえ考えるまでになってしまったのです。そのような私に、神は、流産という、女性にとってはほんとうに悲しい試練をお与えになり、もう一度、神にたちかえる機会を与えてくださいました。

長女が生まれてから一年半ほどして、次の赤ちゃんが与えられました。ちょうど上の子に手がかかる時でもあり、二度目だということで、私は自分の体をいたわることを忘れていました。むしろ、妊娠していることなどにはおかまいなしに働くことが良い事のように考えてさえいたのです。神から与えられている命を粗末に考えたのですから、この上ない傲慢だったと思います。女の人の体は、ほんとうにうまくできていて、妊娠の初期の、ちょうど流産しやすいころに悪阻（つわり）があり、勝手に動きまわったりできないようになってしまいます。これは、神の配慮ともいうべきものだと思います。こう考えれば、悪阻もまた、感謝して受けとめることができると思います。けれども、その時の私は、感謝するどころか、不平不満でいっぱいでした。具合は悪い、家事はたまるで、いらいらしながら、体に注意することもなく、勝手に動きまわっていました。それだけが原因だったわけではなく、やはりそこに、神の意志があったのだと思いますが、三カ月の終りころ、突然出血が始まりました。あわてふためいて、病院に電話すると、先生は、「いますぐ横になって、絶対安静を守りなさい。ホルモン注射という手段もあるにはあるが、私は、その方法は使いたくない、あとは神さまにまかせるよりしかたがない」とおっしゃいました。その先生がクリスチャンかどうかはわかりません。多分そうではないと思いますが、このとき私は、「やはり、人間の限界を知って、『死』をいつも身近かに感じて働いている人は、クリスチャンでなくても、常に『神』を意識しているのだな」と思いました。

それから数日間、自宅で寝ている間に、私は実にさまざまなことを考えました。もちろん、何としてでもこの子を助けたいという思いは強く、床の中でも聖書を読み、「神さま、私が召され

るときを、何年か早めてでもかまいませんから、どうぞ赤ちゃんを助けてください。神さま。神さま。」と祈り続けました。少しでも体を動かすと出血がひどくなりますから、それこそ、寝がえりも思うようにできず、ただひたすらじっとしていなければなりません。また、時おり、陣痛のような痛みもおそってきます。そのような状態の中で、私は、肉体的にはもちろん、精神的にも、次第に弱ってきました。そして、「神さま、なぜこのようなことをなさるのですか。どうしてですか」と、主を疑うような思いも生じていました。神に対する絶対の信頼と、従う心をなくしていたのです。

ある夜のこと、主人は、会社の仕事をしたうえ、帰ってから、食事の用意やその他の家事もやってくれていましたので、その疲れでぐっすり眠っています。上の子は、事情をわかってくださった姉妹の一人に預かっていただいていましたから、暗闇の中で、私一人、その夜も神との対話を続けていました。いつものように、助けを乞うて祈っているのですが、出血はますますひどくなるばかりです。すると急に、何ともいえず恐ろしくなりました。流産という憂き目を見た人は他に何人となくいるはずです。これくらいのことで、死ぬの生きるのという問題ではないにもかかわらず、またふだん、偉そうに、「私は神さまを信じているから、いつ召されてもうろたえることはない」などと考えていたのに、胎児もろとも何ものかにおしつぶされるのではないかというなんともいえない恐怖を感じました。まさに自己保身以外の何物でもありません。

その時ほど、人間が、私自身が、弱い者であると感じさせられたことはありませんでした。それまで、クリスチャンであることを、ある意味で誇ってさえいたような自分の生き方が、なんと

愚かで、傲慢で、みっともないものだったのか。そう気づいて、打ちのめされたような気分になりました。また、赤ちゃんのことも、これは「私の子」だという執着と思いあがりで、神に与えられた命であり、神のものだということを忘れていたのでした。「私の子、私の子」と思っていながら、男の子か女の子か、いつ誕生するのか、五体健全であるのかはもちろん、その生死の問題にさえ、私の意志が介入する余地はまったくないのです。これが神のものでなくていったい何でしょうか。

その夜遅く、また激しく痛みだしました。もう、その時点では、主はこの子を取られようとしているということがわかりましたし、それが御心であれば、従う以外にないという気持ちにもなっていましたから、心の中で、「神さま、この子はみもとにおかえしします」と祈りました。涙はあとからあとから出てきてとまりませんでしたが、執着を断ち切ることができて、心はかえって平安でした。翌日早く病院へ行き、すべてが終ったあとで、

主は与え、主は取られる。
主の御名はほむべきかな。

（ヨブ　1・21）

という聖句が与えられ、麻酔のさめかけた頭の中で、「ハレルヤ、ハレルヤ」とくりかえしていました。「あと半年もお腹の中にいれば、あたたかく、やわらかく、ぷくぷくとふとった赤ちゃんとして生まれてくることができたのに。抱いてやりたかった。お乳ものませてやりたかった……」と、一年たった今でも、痛いように感じますが、神の意志に従うしかないと、これは、あ

きらめや、負け惜しみではなく、心からそう思えるようになりました。そして、これまでずっと支えにしてきた詩篇23篇「主は私の羊飼い」という聖句も、今、また全く違った意味を持って、私の内に息づいています。「飼い主なる主のなさることに文句をつけることはできない」。そこに、神に対する全き信頼が生まれたのです。

この経験を通して、私は、人間はどうあがいても、どうすることもできないことがあるということを、身をもって知りました。また、今まで考えようともしなかった、病む人の痛みや苦しみを、多少なりとも思いやる心もできてきました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。
（詩篇　119・71、72）

あなたの御口のおしえは、私にとって
幾千の金銀にまさるものです。

あの子も今は天の御国で主の御手に抱かれていること、また、私も必ずその御国に入れていただき、その時には、思う存分抱いてやることができることを確信しています。流産という悲しい経験をした人、あるいは、子どもを失った人は大勢いると思いますが、このような確信を持たない人に比べれば、私はなんと幸いなことでしょう。

このように、子どもをなくしたこと自体は、私の中で、比較的早いうちに、それなりに昇華されました。ところが、神は続けてもう一度、私を試みられたのです。その後、体がなかなか思う

ように回復せず、弱っているところへ、世間の人は流産した者に、さまざまなことを言いますから、そのことでも動揺してしまい、私の中には、また別の不安や憎しみ、怒りなど、悪いものが一時にあふれてきました。なによりも、この期に及んで、そのようにまた揺れ動いている自分自身が情なく、私はまたもう一度、深い淵の底に沈んでゆきました。そこからはいあがろうという気力もなく、祈ることさえできなくなっていた時、突然、主イエス・キリストの十字架が見えました。ほんとうに見えました。「こんなに情ない私だから、清められるためにこの十字架が必要なんだ。イエスさまを十字架にかけたのは、この私の罪のためだ」。実に命まで投げ出して、私を救ってくださったというのは、なんという愛でしょうか。

見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。

（ローマ　11・22）

一口に神の慈愛と峻厳と言いますが、私はこの一連のでき事を通して、神の徹底的なきびしさと、また、あふれるばかりの愛を、ほとんど時をおかずに体験しました。

神は傷つけるが、それを包み、
打ち砕くが、その手でいやしてくださるからだ。

（ヨブ　5・18）

洗礼を受けてから、次第に喜びのない者になっていた私も、この時を境に、ほんとうの平安と喜びを与えられました。これまでは、自分の力では何もできないのに、そのことを忘れ、なんとか自分で改めようと必死になり、失敗しては思いわずらっていたのでした。それは、神の前には

なんという思いあがりでしょうか。神は、汚れているなら汚れたまま、醜いなら醜いまま、今あるがままの状態で来なさいと御手をさしのべておられるのです。自分を飾ったり、よく見せようとしたり、ましてや誇ろうとするのではなく、「私は罪人です」と、頭をたれて進み出る者をよしと認め、心からむかえてくださるのです。単に頭の中で知るだけではなく、かけがえのない子どもの命とひきかえに、私はこのことを学んだのでした。今は時々、たとえば電車の中で座っているときや、台所でお皿を洗っているときなど、体の奥のほうから、じわじわと喜びがこみあげてくるのを感じることがあります。死んだ後も救われていて、行く先が決まっているという喜び、神に認められているという平安です。

子どものこと

あなたは私を母の胎から取り出した方。
母の乳房に拠り頼ませた方。
生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。
母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。

（詩篇22・9、10）

私が受洗したときにお腹の中にいた上の娘は、今二歳半になりますが、私は、子どもを育てることほどむずかしい仕事に出会ったことがありません。一つのことに対処する方法を親が学んだときには、すでに子どものほうは、また一まわり成長して、新たな問題をひきおこす。日々、こ

のくりかえしで、どうしてよいかわからないと途方にくれることが、今までいったい何回あったことでしょうか。そのたびに、私は聖書にその解答をもとめてきました。世の中には実に多くの育児書があり、それぞれ参考になることはなりますが、残念ながら、著者によって言うことがまちまちであり、ある場合には、同じ著者でありながら、違うことを言っていることもあるのでかえって混乱してしまいます。でも、聖書だけは、いつ、どこで、どんなときに読んでも、根本を流れるものは変りません。

聖書では、家庭の秩序として、

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。（エペソ　5・22）

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。（エペソ　6・1）

と、まず、妻が夫に従い、同じように、子どもが親に従うことを要求しています。それは、クリスチャンが神に従うことのひな型でもあります。ある方に、子どものしつけについて相談したときに、「一家の中で母親がまず父親に従っていかなければ、子どもは決して親に従いませんよ。だから子どもをしつけるときには、まず、夫に従う妻と、夫のよき助け手である妻と、その両方についてよく考えることです」と諭されたことがあります。最初は、「なんだか、ずい分封建的だな」と多少なじめない感じもしましたが、よく聞いてみると、ただやみくもに黙って従っていろというのではないということがわかりました。それでは「よき助け手」ではなくなってしまい

ます。その時教えられたように、私はその後、自分の意見は何でも腹蔵なく言うけれども、最後の決定を主人がしたときには、多少言いたいことが残っていても、素直にそれに従うという態度をとるように努めています。私自身は、強情で、わがままですので、主人に従いにくい性質を持っていますが、幸いにして主人は、そう無理な決定をする人ではありませんから、従いやすい人だと思います。これはほんとうに感謝すべきことです。ですから、同じように、娘にも、このような秩序をもって親に従ってほしいと願いつつ、そうしつけようとしています。なかなか思うようにゆかず、日に何度、娘のために祈るかわからないくらいではありますが。

主を恐れることは知恵の初め、
聖なる方を知ることは悟りである。（箴言　9・10）

むちを控える者はその子を憎む者である。
子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。（箴言　13・24）

むちと叱責とは知恵を与える。
わがままにさせた子は、母に恥を見させる。（箴言　29・15）

あなたの子を懲らせ。
そうすれば、彼はあなたを安らかにし、

あなたの心に喜びを与える。　（箴言　29・17）

私は、ついしつけが甘くなってしまいがちな、愚かな母親ですが、そんなとき、これらの聖句にどれだけはげまされたかわかりません。いま、娘は、一人で祈ることを学び始めています。「神さま、今日はお父さんとお母さんとピクニックに行くことができました。ありがとうございます」「今日は、○○ちゃんと、けんかをしました。ごめんなさい」「お父さんが、一日元気でお仕事ができますように、お守りください」などと、まわらぬ舌で、その時々にかなった祈りをするようになりました。ある時は、テレビを見ていて、主人公のお父さんが病気になる場面で、急に目をとじて、その病気がなおるように祈り始めたこともあります。また、私が、具合の悪い日が続いたあとで、「ああ、今日は調子が良くなった」と何気なく口にしたりすると、「お母さん、神さまに感謝しなさい」と反対に諭されることすらあります。逆境のときには神を呼びもとめるけれど、一たび順境になると神を忘れやすい、という欠点を子どもにつかれて、私のほうが恥じ入るくらいです。

「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません」　（マタイ　18・3）

とありますが、純粋に、何の疑いもなく神をもとめる娘の姿を見て、「ほんとうに私はよき同志、よき同労者を与えられた」と感謝する毎日です。

だれでも自分の子どもには最良のものを与え、最良の環境に置いてやりたいと思うのが人情ですが、悲しいかな、その最良が何であるかわからないときが多いのです。そんなときに、それを神を基準に判断し、親の目が届かないときでも主の加護と祝福を祈りもとめることができるのですから、クリスチャンの母親は幸いです。

今、私の胎内には三人目の赤ちゃんが宿っていますが、この子も含めて、最愛の主人と娘が、主によって守られ、導かれ、やがて主ご自身を信じることができる日が一日も早く来るように、祈ってやまない毎日です。

私は、常々、「もし御心でしたら、暮らしの折々に詠み続けている短歌を通しても、神さまを証しする器とならせてください」と祈り続けてきました。主の栄光を心から賛美する心をこめて、ほんとうに未熟なものばかりながら、その内のいくつかをお目にかけて、拙い証しの結びとさせていただきます。

罪とまで言ふには小さきいらだちを抱きししままに床に入りけり
痛きまでにこの身の咎を感ずるとき神の愛のごと陽光やさし
吾れら二人神に祝さるる証しとも枇杷の実りを味はいて食む
受洗して帰る小道の花吹雪神の赦しを語るがに舞ふ
安かれとみ神に祈る吾が心知るや知らずや胎を蹴る子よ
夫と吾と黒き聖書の革表紙み神が前に静まりて繰る
罪一つ潜めて座せる夜の机にストック匂ふ泣けとばかりに



荒野に水わく

（夫の証し）

白木　慎一

一九四二年高知県土佐市出身。戸波小、土佐中、土佐高、早稲田大学政経学部卒業。現在大同生命保険㈱大阪本社勤務。家族は妻翠さん、長女みぎわさん、長男大路さん、次男直人さんの五人家族。大阪府箕面市の箕面キリスト集会に家族で出席。

大阪箕面集会　毎日曜日朝十時半より。会場は左記へ電話でお問い合せください。なお家庭集会は自宅で随時開催。大阪府箕面市栗生間谷一三三七―二―B―三〇二電話〇七二七―二九―九一九六。奥様の翠さんの証しは次にあります。

▼大阪箕面市の聖書の集いと日曜礼拝の後で。



「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。」そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。（ルカ　8・39）

イエス・キリストを信じる信仰を与えられてほぼ二十年になりました。愛なる神様の御手の中にあって、喜びと平安のうちに歩むことができることを、感謝しております。

多くの方々から「なぜクリスチャンになったのか」という質問をうけました。この質問をなさる方は、私の信仰が私の決意で選んだものであり、また意志によって支えられている、と思いこんでおられる場合が多いのです。しかし、私の信仰は、みずから獲得したものではなく与えられたものであり、まさに私がそうせざるをえなかった信仰であります。信じることを余儀なくされた信仰であります。従って、私の決意、私の意志によるものではなく、神様の導きによるものであります。その意味で、信仰を与えられるまでのすべての生活が、信仰のきっかけということになります。

人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。（ルカ　19・10）

暗転

私は高校生まで、高知県の静かな農村で育ちました。町が大きく変化していく中であまり変化がなく、いまも小さいころの山と川があり、正月と夏に帰郷するのを楽しみにしています。小さ

いころ大病をしたこともあり、あまり体が強くありませんでしたが、まず平々凡々と育ちました。生活も豊かではありませんでしたが、不自由することのない生活で大過なくすごしたといえます。この田舎ののびのびとした生活に、突然衝撃的な事件が伝えられてきたのです。

高校二年生の時でした。日米安保条約をめぐる紛争が起りました。学生が反対運動を展開し、激しくデモをする様子がテレビに映し出されました。この時、私たち田舎者も「全学連」の名前を知りました。連日のように新聞、テレビ、ラジオが安保関係の報道をし、なにか国中が異様な雰囲気に包まれていました。新聞、テレビ、ラジオでは安保賛成、反対の議論が戦わされ、互いに自分の信念と主義にもとづく主張を熱っぽく展開するのでした。私はこのとき、賛成側の話を聞いていると賛成側の意見が正しいと思い、反対側の主張を聞いていると反対側の主張に傾いてしまう自分に気がつきました。私は大きな衝撃を受けました。それまでに経験したことのない心の動揺を覚えました。そして、大きな不安に包まれました。「自分の意見を持たない自分」の発見。これこそ私の「悩み」のはじまりであります。人生や人間を真剣に考える契機となるできごとでした。

荒野に引き出される

このように問題は、安保条約改訂の賛否から自分自身の問題に移りました。自分の拠って立つべき基盤は何か。判断の拠りどころは何か。人間として当然解答をもつべき問題であります。「人は何のために生きるか」に通じる人生の基本的な問題であります。

それからの私の生活はすべてに戦々恐々として、怖じ恐れたものとなりました。不安を持ちつつ、囚人のように生活しなければなりませんでした。羅針盤をもたない小船が荒れ狂う海に漂うようなものでした。自分がどの位置にあり、どこの港に行くべきかさえ知らず、荒波のもてあそぶままであります。何をするにも「その根拠は」と問われるのが恐くて重苦しい生活となりました。そして、孤独な生活となりました。孤独というのは「さびしい」という言葉も出なくなることだとこの時知りました。このような生活がつづいたため、いわゆるノイローゼの状態になってしまいました。

これではいけないと思い、ある神経科の病院に行きました。医師は「自分から神経科にくるようでは大したことはない」と言って、いくつかの検査を行い、注射をし薬を呉れました。私はやり切れない思いをしながら病院を出ました。この病院に来たことを後悔しました。ちょっと落着いて考えれば、自分の持っている問題と神経科とは何の関係もないことは分かり切っていることなのです。下宿に帰る途中、鏡川という川を渡るとき、自転車に乗ったまま足を欄干にのせて、病院でもらった薬を空高く放り上げて川に捨てました。私はそれを見ながら、かつて春の空を翔びまわるひばりのように、何の思いわずらいもなく、生き生きとすごした時をなつかしんだことでした。しかし、ふと前途に目をやるとき、その不安はひとしおでした。とにかく、私の病は薬や注射で治る病気でないことは明白でした。

高校三年生のとき十二指腸をやられて入院することになりました。生来の胃腸の弱さに「人生の悩み」のプレッシャーが加わったためであります。私はこのような問題で悩んでいることは、

誰にも話しませんでした。というのは、これは自分で解決すべき性質のものであって、他人の助けで解決できない自分固有のものであると考えたからです。人に話しても相手にされないと思いました。この入院により、一時の混乱からは少し落ち着きを取戻しました。何も解決はしていませんが、とにかく、ものごとの本質を見極めていくことを何よりも優先しなければならないと考え、そのために勉強しなければならないと考えました。そして、人には努めて明るく振る舞うことにしました。

学生時代

私は大学には大いに期待をしました。高校のような受験のための勉強ではなく、人間理解を深める勉強をしたいと考えました。そこでは、自分の持っている問題を解決する手がかりが得られるであろう、と期待していました。入学をしたのは経済学科でしたが、経済学の講義は耳に入りませんでした。人間を扱う科目を追いかけました。他学部の聴講をしたりもしました。一時心理学にも首をつっこみ、シンポジウムを傍聴したりしました。また、傾倒する哲学者などもありました。しかしいずれも「それなら自分自身は何か」という問いについては答えが与えられませんでした。「死」をもって区切られるこの人生を、「何を目的にしていかに生くべきか」、つまりいかに（HOW TO）、については多くが語られるが、「何を目的に」という一番大事な問いについては、解答がないのです。それは「自分の存在を支えているもの」が分からないからです。そして、多くの人々がこの解答を持たずに生活していることも知りました。あの安保ショックから、

一歩も前進していないのです。

はじめに自分ありき

どんなに考えても、この考える「自分」、この悩める「自分」が最後に残るのです。この自分の存在を否定することはできない。自分の神は自分でなくてはならない。苦しまぎれの中で出した結論は「はじめに自分ありき」であります。「実存が本質にさきだつ」という無神論的実存主義の影響を受けていたようです。

結局は死をもって終るこの人生は空しい。その本質は分からないが、まず自分は存在する。この空しさの中に自分は立たなければならない。この廃虚の中に立って、生きていかなければならない。この砂漠の中に花を咲かせねばならない。その場その場を処理するだけの気楽な生活には、いまさら戻るわけにはいかない。重苦しい人生ではあるが、その空しさの中に、緊張をもって生きていくより他に道はない。からからに乾いた、まさに人生の荒野のただ中にあったのです。

見えざる手

時は容赦なく流れ、大学も最終学年を迎えました。入学した時の状態から何の進展もしていない自分に、失望の思いを禁じることができませんでした。さらに六月には、脊髄炎という下半身がしびれる病気になり、就職試験が受けられず、希望の職種につくことができなかったのでがっかりしていました。何となく満たされない思いをもって過ごすうちに、後期がはじまりました。

当時、経済学の演習を補うものとして出席自由のサブゼミと称するものがあり、当時大学院生であった鉢野正樹さんが指導してくださっていました。ある日研究室に入ると、鉢野さんが何かにとりつかれたように、熱っぽくしゃべっています。空いた席に座って聞いていると、さかんに、「イエス・キリスト、イエス・キリスト」といっています。そこには、前の授業に出ていた学生がいて、ひとりの大学院生がさかんに反論していました。聞いていてよく分かりませんでしたが、鉢野さんは最後まで「イエス・キリスト」を話し続けました。ついに経済学のテキストは開かれず、イエス・キリストの話でその時は終りました。翌週のサブゼミは、案の定出席者はほとんどなく、二人だけでした。研究室では、先週と同じく鉢野さんを中心として、信仰についての議論をしていました。この日も経済学のテキストは開かれず、「イエス・キリスト」で終ってしまいました。自分も今日が最後と席を立ったところ、鉢野さんが「白木君、ちょっと待て」というので待っていますと、ひとり長身の外人が勢いよく入ってきて、さかんに握手をかわし、早速何かがはじまりました。それは、ドイツ語の聖書研究会でした。私は、これはいけないと思いましたが、席を立つタイミングを失い、仕方なくそのまま座って聞いておりました。すると、外人の方が私に向って、「わからないところがあったら質問してください」と日本語がとんできました。私は「ドイツ語はまったく分かりません」と答えました。会が終って、この外人の方は、ドイツから宣教師として来られているベック氏であると紹介されました。ベック氏は、私に吉祥寺キリスト集会の案内のパンフレットを渡し、「ドイツ語を教えているので、集会に来てください」とのお誘いがありました。私は、この会にはこれ以後一度も出席せず、また誘われた吉祥寺集会に

も行きませんでした。のちにベック氏が、私の信仰の指導者として、また同じイエス・キリストを信じる信仰の「兄弟」として、親しく交わりをもたせていただくことになろうとは、このときは思いもよらぬことでした。

この一風変った経験をしたころから、それまであまり親しくなかった鉢野さんや、同級生などから伝道集会に誘われるようになりました。たしかに私自身は、人生の根幹について把握しないままに生活をしているが、宗教のお世話になるほど落ちぶれてはいない、という思いがありました。周囲の方々のご親切は有難いが、正直にいって迷惑なことでした。とにかくここは頑張って、イエス・キリストを信仰するというような事態から自分を守らなければならない、と堅い決意をしたのでした。

わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。（ルカ　13・34）

集会へ導かれる

にわかに周囲の方々が私に働きかけるようになったので、聖書にどんなことが書いてあるか読んでみようと思い、新約聖書を買いました。読んでもよく分かりませんでした。あまり論理的に書かれたものではなく、独断に満ちた書物のように思われました。そんな時、高田馬場駅の近くの教会の特別伝道集会のパンフレットをもらいました。下宿から下駄ばきで行ける位のところでしたので行ってみました。話の内容はまったく憶えていませんが、単純な話をするものだと思っ

たことでした。話のあと、ひとりの学生が気をつかってくれましたが、その学生に聖書の一節について質問したところ、「申し訳ありませんが、私には分かりません」との答えがありました。私は、なんだこの程度かと思いましたが、同時にこの学生の素直な気持のよい返事が印象に残りました。このころから反感をもってキリスト信仰を意識するようになり、ときに心の揺れ動くのを憶えると、さらに反発をするという具合でした。見えざる神の御手は、着実にこの私を導いてくださっていたのですが、私には分からないことでした。

そのようなある時、自分では説明することのできないある力に引きずり込まれるように、鉢野さんに手を引かれて鷺宮にある恩師酒枝先生の集会に出席させていただきました。酒枝義旗先生は経済学の教授であり、かつ熱心なクリスチャンとして集会の責任をもち、毎日曜日聖書講義をなさっていました。私は先生を心から尊敬し、先生の経済学演習に入れていただきましたが、キリスト信仰だけはご免蒙りたいと考えておりました。こんな立派な先生が、なぜキリスト信仰を持たれるのだろうか不思議でした。クリスチャンのことを、たしかに人のいい善良な人たちではあるが、何か無国籍者のような、大事な釘が一本抜けた人たちのように理解していたからです。ですから先生の集会を知りつつも、出席させていただこうとは考えたこともありませんでした。

多分しょんぼりと立っていた私を、先生は「よくきた、よくきた」といって、すがすがしい笑顔で招き入れてくださいました。この先生の集会が終ると、また鉢野さんに手を引かれて、電車とバスを乗り継いで吉祥寺キリスト集会に行きました。それから、毎日曜日、午前中は鷺宮の集会、午後は吉祥寺の集会に出席するようになりました。

ある日曜日、鉢野さんが、岩永さんをお見舞に行くのでいっしょに行こうといわれました。岩永さんは年配の婦人で、五つか六つの病気を持って入院されているクリスチャンの方だということでした。私は知らない方のお見舞はあまり気がすすみませんでしたが、重病であることを聞いてますます気が重くなりました。鉢野さんが病室に入り話をなさいましたが、中から「感謝でございます。感謝でございます」という声が聞こえてきました。中に入ると岩永さんは喜びにみちた顔を輝かせて、信仰によるイエス・キリストとの交わりについて話され、感謝のうちに病院生活を送っていることを話されました。私はお見舞にきたはずであるのに、逆に見舞をされたような気持で病院を出ました。ともすれば信仰を理屈っぽく理解しようとする私でしたが、このときの岩永さんの姿に信仰とはどういうことかを教えられたように思いました。

ちょうどこのころ、私たちの大学では、授業料の値上げをめぐって学園紛争が起り、機動隊が導入されたりして授業がありませんでした。また、「全日空機が東京湾に墜落」、「英航空が富士山近くで墜落」、「カナダ機が羽田空港で事故」など大事故が続いて起り、何となく不気味な雰囲気でした。その中で、集会に出席し、また聖書を読むようになりました。神様に反発しながら集会や聖書から離れることができませんでした。反発すればするほど、聖書のみことばが心深く入りました。「はじめに自分ありき」がだんだんあやしくなり、城の石垣がひとつひとつはがされるように自分自身が崩されていきました。そして、とうとう立往生してしまい、一歩も踏み出すことができなくなり、途方にくれてしまいました。

サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。そこで人々は

彼の手を引いて、ダマスコへ連れて行った。　（使徒　9・8）

新生

昭和四十一年二月のある寒い夜のこと、小さな集会所には十名程度の方々が集っていました。ストーブが勢いよく燃えて部屋は暖い空気に包まれていました。みことばが語られました。

あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。（ルカ　15・4）

子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。　（マタイ　9・2）

神様は私のようなとるに足りない小さな者にも関心を持っておられること。そして愛してくださっていること。「ごうまん」に目をふさがれ、神様の目から失われたものであるこの私をさがし求めてくださっていること。このことを心から得心することができました。そして、心からイエス・キリストを受け入れさせていただいたのです。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。そして自分から十字架のうえで、私たちの罪をその身に負われま

した。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

（Ⅰペテロ　2・22～25）

神様を拒んでいた「ごうまん」の堤防が崩壊し、そこから新しい命の水があふれました。そして喜びと平安に満たされました。

主が岩を開かれると、水がほとばしり出た。水は砂漠を川となって流れた。

（詩篇　105・41）

神様が私のうちに新しい創造をしてくださったのです。ずい分まわり道をしましたが、すべては私の救いのための神様のご配慮だったのです。それも最善の方法、最善の時を選んで。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、すべてが新しくなりました。

（Ⅱコリント　5・17）

こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。

（Ⅰペテロ　4・2）

このようにして、人生の荒野から、一転していこいのみぎわに導き出されたのです。私の努力ではなく神様の愛によって。そして、私の問題「人は何のために生きるか」は解決され、生けるまことの神様との交りのうちに、望みをもって歩む者となりました。



▲結婚式の日に父永松正生さん、母富栄さんと。1971年5月15日。

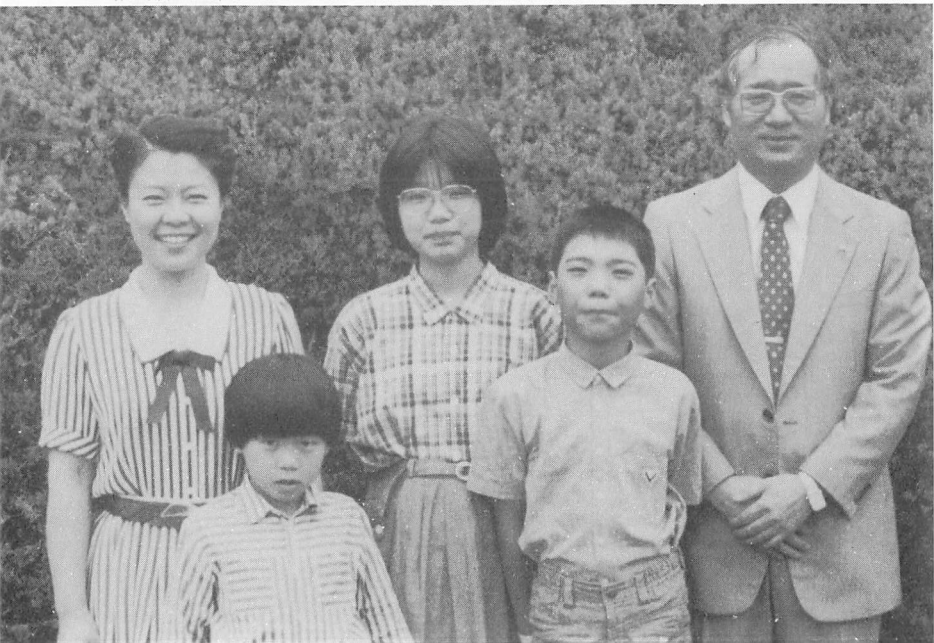
十字架のことば

（妻の証し）

白木　翠

一九四五年北京市に生れる。山口県出身、徳山小、岐陽中、徳山高を経て青山学院女子短期大学英文科卒業。日本開発銀行勤務を経て一九七一年結婚。家族は夫慎一さん、長女みぎわさん、長男大路さん、二男直人さんの五人家族。大阪箕面集会　毎日曜日朝十時半より。会場は左記へ電話でお問い合せください。なお家庭集会は自宅で随時開催。大阪府箕面市栗生間谷一三三七―二―B―三〇二
電話〇七二七―二九―九一九六

▼右から慎一さん、長男大路さん、長女みぎわさん、二男直人さん、翠さん。



救われるまで

山口県の徳山育ちの私は、昭和三十九年の春、憧れの東京で短大生活を始めました。私は「二年間」という短い時間を、無駄に過したくないと考えていました。文化の中心地東京で、色々なものをできるだけ吸収しようと意気込んでいました。私は学校の合い間を見つけては、絵画、音楽、映画、劇、歌舞伎、文楽、能と機会を見つけて出かけていきました。また旅行、スキー、スケート、ダンスなどと実に目まぐるしく動き回っていました。

短大では、毎朝チャペルで礼拝が持たれていましたが、自由参加でしたから、いい映画があれば、学校近くの名画座へ、そうでなければ讃美歌を唄いにチャペルへ行きました。しかし、たったひとつのメッセージさえも記憶に残っていないのは不思議です。心がそこになかったのです。また、短大はミッション系でしたので、多くのクリスチャンの教授がおられ、親しい友人の中にも二人のクリスチャンの方がいましたが、神様を求める気持ちはまったくありませんでした。

福音を説き聞かされていることは、私たちも彼らと同じなのです。ところが、その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。（ヘブル　4・2）

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。（イザヤ　53・6）

昭和四十一年の春に卒業しましたが、卒業式のメッセージに、次の聖書のみことばが引用されました。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする」。知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（Ⅰコリント　1・18～21）

わずか二年間とはいえ、短大は学問を授けた立場であるはずですし、学生もそれなりに学んだはずの結果が、なんと「私達の教え授けた学問、あなた方の得た知識は何の役にも立ちません。すべてが無駄なのです」といっているかのように響きました。どこまでも愚か者の私は、この時でさえ、まず心に留めるべきみことばを心に留めず、今から思えば実に的はずれな解釈をしてしまったのでした。神を求めず、知ろうともしない私は、私自身の罪のために真理を知ることができませんでした。しかし、神さまは、卒業後も幾度となく、このみことばを私が救われるまでの間思い出させ、考えさせてくださいました。

二年間はあっという間に過ぎました。東京生活をさらに続けたいと思い、「両親が安心できる

職場」に就職するということを条件に両親を説得しました。そして、日本開発銀行に就職することを許してくれました。職場は、上司、先輩、後輩に恵まれ、いい環境でした。行内の歴史サークルや組合活動を通して接した思想やイデオロギーに驚き、求めました。しかし、いつも空しさだけが残りました。

そのころ、本気で英文学をやり直してみようという気になりました。そして理解を深めるために聖書の知識を得ようと思いたち、学生時代のクリスチャンの友人、嶋田多恵子さんに相談しました。嶋田さんは卒業後も教会の特別伝道集会があると案内してくださったり、ご自宅に招いて交わりを持ってくださいました。嶋田さんは、ご自分の教会ではなく「あなたにあったいい集会があるから行ってみたら」と吉祥寺集会を紹介してくださいました。「あなたにあった」とはどんな集会だろうと思いつつ聖書研究会に出席させていただきました。昭和四十五年一月か二月のことでした。

初めて出席した聖書研究会が終った後、ベックさんが話しかけてくださいました。「あなたは、今より幸せになりたいでしょう?」「死んだら天国へ行きたいでしょう?」と二つの質問をされました。私の答えは二つとも「いいえ」でした。当時私は、恵まれている、幸せだと思っていましたから、それ以上に幸せになりたいと思ったことはありませんし、死そのものについては、はっきり意識をしていませんでした。死後のことは知りませんでしたし、天国があるか、ないか分かりませんでした。「日曜日にいらっしゃってください」と誘ってくださいましたが、「天気が良かったら山に行きますので、雨が降ったら来ます」と答えました。私は、ただ聖書の知識を得たかっ

ただけでした。

二カ月たったころ、特別伝道集会が開かれ、四日間連続して出席しました。集会では「生きて働かれる愛なる神さまがおられる」ことが話されました。その時から、聖書が神のことばであることを証明するみことばを求めて読んでいきました。そして、

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」（ヨハネ 14・6）

のみことばに出会ったとき、「ああ、これを言い切れる方は、神さま以外にない」と心から信じました。そして、自分では意識をしていなかったけれど、自分の魂が求めていたものがここにあったことに気付きました。それからは、聖書のみことばの一つ一つを素直に受け入れることができました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ 3・16）

私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。（ローマ 5・8）

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出

たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。

（エペソ　2・8、9）

すべてのみことばを心から信じ、イエスさまを受け入れることができました。そして、喜びと感謝で満たされました。救われて初めて、自分の救いのために嶋田さん親子の七年にわたる長い祈りがあったことを知ることができました。私を愛し、私のすべてをご存知で、私を最善に導いてくださり、良いもので満たしてくださる恵み豊かな救い主に、いかなる時もすべてをゆだね、依り頼んで歩む幸いな身と変えられました。

主は私の羊飼い。
私は、乏しいことがありません。
主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。
主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。
たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。
私の杯は、あふれています。
まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。

私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。　（詩篇　23・1～6）

主が私の羊飼いとなってくださってからは、毎日が嬉しくて嬉しくて、主イエスさまのみこころが成り、ご栄光が現われることを願う生活となりました。

わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。　（詩篇　40・8）

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。　（エレミヤ　15・16）

結婚

主の愛の御手の中で生かされている幸いを覚えつつ半年が過ぎてゆきました。信仰を与えられる前から独身を通したいと思っていましたが、信仰を与えられてからもそのように考えていました。そんな時、突然結婚の話があり、本当に驚いてしまいました。「主よ、私は独身の方が良いと考えていましたが、このことはあなたのご計画なのでしょうか。結婚に導かれても、導かれなくてもあなたのみこころが成りますように」と祈りました。

双方とも未信者の両親でしたが、直ちに承諾を得られ、以後の事もスムーズに進行しました。主によって備えられた結婚は、不安も心配もなく、主がこの結婚を用いてどのようなご栄光を現わされるか、期待と希望を与えられ平安に満ちたものでした。たとえ困難や問題が起ころうとも

すべてを最善になしたまう主に委ねて、祝福で満たしてくださることを確信することができました。結婚後は、こんなはずではなかったという事態がいくつかありましたが、結局、主イエスさまになしとげていただくべきことを、主人に期待していたからでした。また心では、主人に従いたい、従わなければと願っているにもかかわらず主人に従えない罪深さ。イエスさまの愛に浸っていなければ人をも愛することができないちっぽけな者だということを示されました。イエスさまが、

わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。
（ヨハネ　13・34）

と命じられたことも、主の助けなしにはできない者なのです。幸いにも主は、

わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。
（ヨハネ　14・13）

求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。
（ヨハネ　16・24）

とおっしゃいますから感謝です。

イエスさまに結婚以来、いつも感謝していることは、人生の重大事である結婚を、何の条件も

つけず、クリスチャンというだけで必要条件の百パーセントを満たしていると受け止めて、主のご栄光のみを求めて、すべてを主に委ねる恵みを与えられたことです。

父の救い

昭和五十九年七月、父が脳腫瘍と知らされました。悪性のがんで末期とのことでした。父の救いのことが頭の中を去来しました。父の救いは約束されていることを確信することができ平安でした。父は私が信仰を与えられて以来、聖書、テープ、本、軽井沢や高知のバイブルキャンプなどを通じて、福音に接してきていました。夏休みになり、イエス・キリストを伝えるために、福岡の病院に入院した父のもとに行きました。

「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません」

すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言うな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。彼らの顔を恐れるな。わたしはあなたとともにいて、あなたを救い出すからだ。今、わたしのことばをあなたの口に授けた。わたしのことばを実現しようと、わたしは見張っているからだ」

（エレミヤ　1・6～12）

このみことばが与えられ、励まされ、希望を与えられ、豊かに支えられました。

あなたが何をしても、神はあなたとともにおられる。

（創世記　21・22）

と主は言っておられます。事実、主は共にいてくださいまして、平安と感謝と希望に満たされて父と対面することができました。父は頭痛と嘔吐が激しくて、苦しそうでしたが、「痛い」とも「苦しい」とも言わずじっと耐えていました。最初は娘に会えて嬉しそうでしたが、聖書の話をし始めると、「またか」というような顔付きで笑っていました。しかし激痛の合間を見計って、少しでも聞ける様子の時に祈りつつ、父なる神さまの愛のご計画と、主イエスさまの救いと、罪の赦しと永遠のいのちについて、聖書のみことばから話すことができました。主は毎日、新たな力を与えてくださいまして、連日、父にみことばを取り次がせてくださいました。

予定の二週間が過ぎ、夏休みもあと一週間で終りに近づきました。主人の両親や義妹に預けっぱなしの子供たちの夏休みの宿題の点検や二学期の準備をしなければなりませんでしたので、その旨父に話し、帰阪することにしました。帰り際に父は「今は信じられないが、信じることができるように祈ってみる」と言ってくれました。私は嬉しくて、心から主に感謝しました。今しばらく、父のもとを離れ、みことばを直接聞いてもらうことはできないけれど、その間、父を愛し憐れんでくださる主が導いてくださることを祈りました。「私も、お父さんが神さまのご計画を信じて罪を悔い改め、神の御子イエスさまの十字架の贖いと復活を受け入れ、約束された永遠のいのちを自分のものとすることができるように祈っていますから」と別れを告げました。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。

（エレミヤ　33・3）

二週間ほどして弟から電話があり「手術を勧められた。僕も妻も皆手術に賛成だが、お母さんが反対しているけれど、姉さんはどうですか」というものでした。母は「手術によって治るなら賛成だけれど、治らないのに痛い目に合うだけで可哀想だから反対なのよ。翠、あなたはクリスチャンだけどどう思う?」と聞かれました。クリスチャンになって初めて、母から「クリスチャンとして」の意見を求められて、本当に嬉しかったです。私は「お母さんの意見と同じです。問題は永遠のいのちを持っているか、いないかです」と答えました。するとまた次の日に電話があり、「脳のさほど大切ではない部分を除去し、がんが腫れる空間を作る手術で、もし手術をすれば約半年生きられるし、その間数カ月は自宅でほとんど普通の生活ができます。もし手術をしなければ、約一カ月です。これから増々激痛が増し、苦しんで病院で亡くなるでしょうと、お医者さんに言われ、お母さんも賛成しました。昨日お姉さんは反対していましたが、どうですか」ということでした。私は福音を伝える時間が与えられると思い「皆が賛成したのだったら、私も反対しません」と答えました。手術は一週間後になるということでした。「主よ、あなた様のみことばの約束通り、父の救いが備えられていることを確信でき、平安ですから心から感謝します。救いの日、救いの時が手術の前なのか、手術後自宅に帰っている時なのか私には分かりません。できれば、あなた様が父に賜わった肉体が少しも損われないうちに、父を憐れんで、救ってください」と祈りました。

その二日後、再び父のもとに行きました。父は五人部屋の真中でした。やつれ果て、肩で喘いでおりました。私は祈りました。「主よ、どうか、父を憐れんでください。主の救いを今の父に

分かりやすく語れるよう力を与えてください。父が拒むことがありませんように。みことばによって慰めと安らぎと痛みの和らぎを覚えることができますよう守り導いてください。主よ、あなたの名によって願うことはすべて、そのようになりますから感謝します」。

父は、五人部屋の真中であることも忘れたかのように、みことばに聞き入りました。すべてを創造された神様が父を愛しておられること、神の御子イエス様が十字架で私達の罪のための贖いとなられたこと、復活なさって今も神の右に座して私たちのためにとりなしておられることを話し終え、「お父さん、神さまはお父さんを愛し、このようにイエス様の救いと、永遠の命を受け取るようおっしゃってくださっているけれど、信じることができる？」父はうん、うんと頷きました。「えっ本当！　信じられるの！　良かった！　じゃもう一度大切なところだけを繰り返えすわね」と復唱し、「これがイエス様の福音なのよ、信じられる？」「ウン信じるよ」「良かった…。これで神様ともお父さんとも永遠に一緒にいられるわ。たとえこの病院の帰りに、私が交通事故で先に天国に行っても、必ずお父さんとまた会えるわ。これからはいつもイエス様が一緒だから、お父さん、もう大丈夫よ」。

そして翌日、父に「お父さん、昨日イエス様の十字架の救いを信じるって言ってたけれど憶えてる？」「うん、憶えてるよ」「そう、よかった。ベックさんにお父さんのことを話したら、とても喜んでおられたわよ。でも聖書には、心で信じて義と認められ、口で告白して救われると書いてあるから、声に出して祈りましょう。体がしんどくて声が出ないようだけど、声に出せるかしら。お父さん、声に出して祈れますか」と聞きましたら、父は一瞬緊張して私の目を見つめまし

た。そして少しして、「うん」と頷きました。「じゃ、私が少しずつお祈りしますから、お父さんも私の後についてきて祈ってね。点滴で手足をとられているから手は組めないし、無理はしないで、自分の心を神さまに向けて祈りの姿勢をとってくださいね」。奇しきことをなさる主は、最後のアーメンまで、はっきりと声に出して祈らせてくださいました。当時、父は衰弱のためほとんど声が出ず、口元に耳をあてがわなければならない状態でしたが、全部を声に出して祈らせてくださいました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

主のご真実に支えられて

納富信子

▼1978年春、母政子さんと集会の前で。

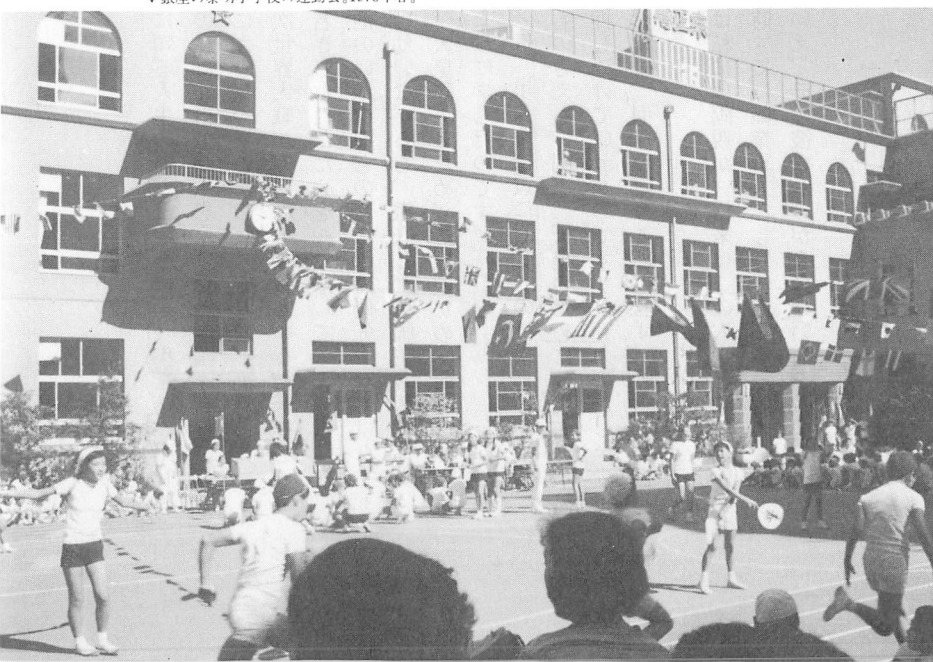


一九三〇年長野県松本市に生れる。東京杉並第五小学校に入学後群馬県館林町に転居、茨城県磯原町に疎開。福島県立磐城高女卒業。その後、福島県、茨城県、東京都の公立学校に勤務。現在武蔵野市公立学校に勤務中。



▲家の近くの大洗海岸で散歩。左からベック夫人、母政子さん。

▼銀座の泰明小学校の運動会。1975年春。



流離う吾が身

逡巡する心に終止符を打ち、主イエス・キリストに頼る人生の道へと、その第一歩を踏み出しましたのは、昭和三十六年のことでした。それまでの私は、自分が生を亨けたこの国家を呪いに満ちた心で憎悪することが自分の人生の大きな目標にさえなっていました。それは、絶対に負けることなぞあり得ないはずの正義の戦いである第二次世界大戦が、日本の敗戦という結末をもって終了したからでした。当時の日本国民は、老いも若きもただただ心を一つにして、この戦いに勝ち抜いていくということが至上命令であり、その他のいかなるものもこれに優先させてはならなかったのです。次代を担う少国民として、私たちは幼いながらも、徹底した軍国主義教育を受け、その責任を自覚するよう育てられていきました。天皇陛下のため、国家のため、命を惜しみなく捧げる国民になることが中心課題でもあるかのように学んだのです。

「欲しがりません、勝つまでは」。このスローガンは、単なる物質に対しての欲求だけを指すのではなく、人間の精神の奥深いところに存在するものさえも、国家、天皇のために放棄することが当然だという意識を、日々私たちに植えつけ、押しつけていったのです。批判力の乏しい少年、少女の私たちは、ただ語られるまま教えこまれるまま、何一つ疑うこともせず、戦意を高揚させられていったのです。

そのような教育の結果とでもいいましょうか。実は私には両親が、将来はこの人、と決めていてくれた八歳ほど年上の青年がおりました。彼は当時すでに職業軍人としての道を歩み始め、陸軍少年飛行学校で懸命に学んでいました。職業とはいえ、その彼のかけがえのない命をも、お国

のために捧げなければならないということに、抵抗する考えも、疑問に感ずる心も持たないばかりか、大変名誉なことだと思う私になっていました。

若い命の灯を南海の涯に消しに赴くという鹿島立ちの朝、個人的な心情の発露である別れの言葉の一言さえも、お互いに確かめ合うこともせず、ただ固い固い握手を最後に永遠の決別をしたのです。彼の胸に、いかなる想いが去来したか、幼い私には思い測ることもできませんでした。昭和二十年一月。知らされた「戦死」の報にも、取り乱すことがあってはならないと、突き上げてくる嗚咽、こぼれそうになる涙を見せまいと必死でした。（天皇陛下万歳、と立派に叫んでくれただろうか、かりそめにも、女々しい感情にとらわれるようなことが無かっただろうか……）これほどまでに、天皇、国家に対する忠誠心が、私の心の奥底深くたたきこまれてしまっていたのです。

昭和二十年八月十五日。敗戦。「玉音放送」といわれた天皇の放送があっても、それは信じ難いことでした。しかし日時の経過が、その信じ難い事実をいやでも教えてくれました。国破れて山河あり。城春にして草木深し。戦いに破れたといっても祖国日本に対する誇りを失わず、進駐してくる連合軍に卑屈な態度を見せまい。これが私の心の中に存在する祖国愛の最後の砦でした。

やがて、戦争の真相なるものが国民の前に明らかになってきました。現神（あらひとがみ）天皇は、人間にすぎずその名と印をもって宣せられた戦争は自らの意志によるものではないと。また「聖戦」は実は、「侵略」であり、軍部、財閥の中の好戦主義者の賭けであったと。私は愕然としました。騙されたと思った途端、まず自分が失ったものがどれほどかけがえのなかったものか知りました。

責任者は誰なのか！怒髪天を衝くばかりでした。よし、この責任者を自分の目でしかと見届けずにはおくまいと心に決めました。天皇制、国家権力、教育が持つ力の恐しさを身をもって体験したのです。打倒天皇制！打倒国家権力！ヒロヒト許すまじ！烈火のように燃えさかる怒りはとめどなく広がっていきました。そしてその心は、主イエス様に出会う時まで倦くことなく続いていきました。国家が何だ、社会が何だ、常識が何だ、道徳が何だ、真実なぞはこの世界に存在しないのだ。人間は無責任でよいのだ。ただ我が道を行く！その心は荒れに荒れました。権威を無視することをもって尊しとし、女学校生活の最終学年をツッパリで過ごしてしまったのです。

昭和二十四年。私は、その傷口が大きく開いているまま結婚という隠れ場を選んでみました。人生にとり最も重大であるはずのことを、まったく無責任におこなったのです。しかし、このことについて後にどれほど大きな重荷を、また責任を負うことになるかなどとは、露ほども考えませんでした。

この無責任な結婚は、私のさまよう心に何の解決も与えないばかりか、更に多くの問題を生じさせていきました。忘れようとすればするほど、死んだ彼への思慕の念は強くなっていくのです。また国家、天皇に対する憎悪も増し加わるばかり。到底この結婚生活は長続きできないと感じるようになりました。そのような時、知人の勧めもあって、幼い時からの夢である教職の道を選ぶ決心をしたのです。今度は仕事を隠れ場にしたとも言えたでしょう。私の心は、常に自分自身にだけ向けられていました。夢中になって福島大学、茨城大学の教育学部通信教育を受け、夏、冬の休みは家族をかえりみることもなく学校に通って資格を得ました。そして間もなく離婚したの

です。

結婚後生れた自分の子どもに対する責任を充分果すこともなく、他のことに心を奪われていた私は、この離婚の結果が子どもの心をいかほど傷つけたか、今になって自分の心が痛むのです。何という相済まない、無責任な結婚と離婚であったことか。その後一度は主イエス様を受け入れた子供であったのに、現在離れてさ迷っている真の原因は子供にあるのではなく、物心のつき始めた頃、私が吾が身にもまさって愛するという深い情愛を注がなかったことによる親子の絆の細さにあったと思えるのです。しかしこの思いもまた、主イエス様の光の中に招き入れられない間は分かりませんでした。

時は流れ、教育界が大ゆれにゆれる勤評・安保闘争の時代へと移っていきました。日教組の闘争は日を追って激しさを加えてゆきました。第一回安保反対の闘争に、私も情熱を湧かせて参加しました。行列の一行が市内の三十メートル道路を進んで行った時、ある教会堂の前にさしかかると、会堂の入口のドアを細めに開けて行列の通過を見ている牧師風の男性が私の目に留まりました。理由もなく、全身の血が騒ぎました。一面識もない相手に対して湧き立った、激しい憎悪でした。私はとっさに周囲を見廻して、石つぶてでもないかと探しました。あいにくアスファルトの道路には、紙屑が風に舞って飛んでいるだけでした。「偽善者！」たしかにこう叫んだことを覚えています。そして何故かこのことは忘れ得ぬ出来事として心に残っていたのです。

自ら選んだ道とはいうものの、離婚後の生活は苦難の道でした。特に教職にある身、しかも封建性の強い地方では、とかく批判の的となり、加えて経済的な悩みもあって胃痛に苦しむ日が多

くなりました。また突然おそってくる心臓の動悸などでついに病院のベッドに伏す身となりました。心臓神経症。診断書にはそう記されていました。刀つき矢折れたといいましょうか。ふっと人間をやめたい、誰も知らない国に行って見たい、どこまでもどこまでも歩き続け死ぬまで続いている長い道を見つけたい、そのような考えが浮んでくるのです。主治医に話すと、「あなたのような病気の人は、転地するのも一つの療法ですね」ということでした。

決断は早いものでした。よし、私はこの地を離れ、母が帰りたがっている茨城に行こう。と思いました。茨城県の教員採用試験を受けると幸いにもパスしました。次に採用通知が来るかどうかが問題でしたが、これもまた任地が示された通知が届き、県外転出の困難の中で昭和三十五年四月、鹿島郡の旭村という純農村で勤めることになりました。住居は母の希望により大洗町に決めました。若かりし頃この町で教鞭をとっていた母にとり、この町は心の故郷のようでした。大洗の大自然は、疲れた私の心身を蘇生させてくれるかのような安息を与えてくれました。今までのことはすっかり忘れて、家族中心で静かに生活しよう。年老いてきた母のために役立つことをしよう。そのように思いながら半年が過ぎました。

と、ある日。この小さな町で、キリスト教の伝道集会が開かれるという立看板と新聞の折り込みパンフレットが目に映りました。何やら、いやな予感がしてせつなくなりました。幼い時に日曜学校に通っていた私は、教会という所がどういう所であり、そこで何が話されるか見当がついていたからでした。殷懃無礼な牧師が罪の話や死人が甦った話など、まことしやかな嘘を言い、イエス様は神の子だと言ってすぐお祈りさせるそういう所が教会だ、という印象が頭をかすめて

いきました。それにもかかわらず妙にその伝道会のことが気にかかり、学校の仕事を早めに切り上げていつもよりひとバス早く帰宅しました。あいにくの夕立で雨が激しく降り続いていました。私は自分が伝道会に出席することを決心したわけでもないのに、傘を真深にさして、足早に街中を通り抜け、夜道を天幕の張られている会場へと急ぎました。周囲に誰もいないのを確認すると、身をひるがえすように天幕の中に入りました。はだか電球が灯されていた天幕の中には四、五人の人が座っていました。最後部の長椅子に腰をおろした私は、傍に置かれていた聖書を取りあげてページをめくり、読むでもなく、話を聞くでもなく、いたずらに時の過ぎるのを待っていました。(ああまた始まったか罪の話。神様は愛であること、キリストは神の子であること……。耳新しいことは何一つ出て来ないではないか)と思うと、天幕に出かけてきたことが大きな無駄のように思えてきました。

「聖書が語っている罪というのは、人間対人間という相対的な関係でとらえているのではありません」

この一言が、私の心を釘付けにしました。

「神と人という絶対的な関係でとらえるものであって、日本人には考えにくいかも知れません。天地万物を創造された全能者である神は、人間ではないのです。神が人間をおつくりになられたのですから、ひとりひとりの人間のすべてをご存知です。心の中に存在する人の思いなどご存知なのは当然です。人間の能力では表面化した罪しか見えませんが、神の目は、心の中に潜んでいる罪まで充分ごらんになることができるのです。その神の前に罪がないと言いきれる人

は世界のどこにもいないと神がおっしゃっています。もしあなたが他人を羨しがるならそれも罪になるのです。それは盗みの罪です。また相手の心を痛めるような言葉を吐くなら殺人の罪。怨みに思っているならこれも殺人の罪だということです。イエス・キリストの身代りの十字架を信じない人は、自分でその裁きを受けるのです。人間の裁判なら裁判官によっては手加減するかも知れません。見逃されてしまう罪もあるかも知れません。しかし私たちの髪の毛一本に至るまで数えておられる神様に、見逃しなどはないのです。そして神様の宣言は取り消されることがありません。罪の支払う報酬は死ですとおっしゃっています。人間が必ず死んでいくというこの事実が存在する限り、人間は誰も罪を持っているということの証明ではないでしょうか。そして神様は、人間の罪の根源が、神の存在を無視していることに因っている、人間が神の存在を無視して、自分の判断に頼って自由勝手な生活をしているそのことこそ、最大の罪だとおっしゃっています。そして必ず総決算の日が来るのです」

私は啞然としました。私の罪に対する認識とは全く異っていたからです。全身がわなわなと震え歯の根が合わなくなるように感じました。敗戦のショック以来、意識的に独善をもっておこなってきた日々の生活。幼い日からのもろもろの事がらが走馬灯のように脳裏を駆けめぐるのでした。わけても安保闘争の際の理由なき憎悪。あれこそ神の存在を無視する自分の心の状態でなかったかと思ったのです。また、戦争の犠牲者は、私一人ではなかったのに、あたかも自分だけが被害者になったような錯覚のもと、反抗と怨みとの一念で心を固く閉ざしてしまった事など、私の罪が白日のもとにさらけ出されたのでした。

心の底から、私は神に赦されたいという気持になりました。そして主イエス・キリストの贖いのみわざを信じる以外に方法はないと感じました。「神様、本当にあなたは私を赦してくださいますか。新しい人生の出発ができるなら、私はその生涯に入りたいのです。でもこれからの長い人生を、私はイエス様に従い通すことができるかどうかわからないのです」。心の中で、こう叫んでいました。

「さあ来たれ。論じ合おう」と主は仰せられる。「たといあなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる」

（イザヤ　1・18）

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、すべてが新しくなりました。

（Ⅱコリント　5・17）

しかし主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」と言われたのです。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（Ⅱコリント　12・9）

私は、清水の舞台から飛び降りるつもりで、主イエス様を受け容れる決心をしました。するとキリストの神性と遍在性を疑う心が霧のように消え、むしろ、そうであっていただかなければな

らないとの確信さえでてきました。処女降誕も当然のこととなりました。

新生の日々へ

天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。（詩篇　19・1）

私の魂は、たしかにまったく新生されたという経験を持つようになりました。それまでは無関心そのもので過していた自然界に対し、新鮮な喜びに浸ることができるようになっていました。一木一草、神様の創造のみ手によるものだと思う時、自然界のすべてが、創造主であられる神様の讃美を高らかに歌いあげているように思えてならず、ことのほか美しく、いとおしく眺められてくることでした。また私という人間が、完全なる神のご計画の中で造られていて、ご自身の愛の対象としていてくださるのだという確信で、心の奥底から深い喜びが泉のように湧いてくるのでした。私のような者さえ、永遠に変らない愛をもって愛していてくださるということは本当に大きな慰めでした。

あなたは私の右の手をしっかりとつかまえられました。あなたは私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいましょう。天ではあなたのほかに、だれを持つことができましょう。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。（詩篇　73・23～25）

間もなくこのみことばを見つけた私は、大好きになり、指輪に彫んだほどでした。教育というも

のについての考え方も、いつしかまったく変ってしまいました。私の教えている学級の子供たちが、神を畏れ、神に従って生きる人生が送れるようにと祈ることを、最重要なことと考えるようになりました。ひとりひとり能力の異る子供を見る私の目が、聖書に基準を置くことをなおざりにしないようにと考えるようになりました。進化論の土台に立っている教材の研究と指導の内容に配慮するようになりました。こうして私は夢にも思わなかった新しい生涯に入っていたのでした。幸いにも若い頃受洗し、教会生活を離れていた母も、私と一緒に、そして子どもも日曜学校に通うという恵みに家族揃って信仰の生活が始まりました。

組合問題の試練

組合問題は、キリスト者となった私にとり、大きな試みになりました。聖書を学んでいくうちに対立をはらんでいる問題であることに気づいたからです。キリスト者になった自分として、今まで通り行動してよいのか、籍はおいても行動には参加しないか、それとも脱会するのか、祈っては考え、考えては祈りました。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。（ローマ 13・1〜2）

みことばは明らかに私のとるべき態度を示されているのに、私は裏切者として受けるであろう同

僚からの非難と孤独を予想しては、恐怖におののく思いに陥いるのです。流れに逆って進むことの苦しさと自分の弱さで涙が流れるのでした。

きづつき苦しみ　血潮を流して　呪いのいばらを　主はかき分け
やさしきめぐみの　両手をさしのべ　ひき上げ給えり　ああ主は愛なり　（聖歌　430）

「主イエスの愛、主イエスの愛」そう繰り返しながら思い切って職場の責任者に話したのです。折りしも安保闘争たけなわ、樺美智子さんの死などが伝えられている時でした。

「信仰上、私は組合を脱会することにしました」

唐突なこの私の申し出に、その責任者は何の言葉も返さず受け入れてくれました。なぜその時責任者が黙っていたのか理解できませんでしたが、主が責任をもって処理してくださったことと思えてなりませんでした。このようにして一歩一歩、この世の束縛から解放されていきました。

大洗に導かれて

不便だった旭村での勤務に別れを告げ、主のあわれみで、母の念願でもあった大洗の小学校に転勤できたのは四十一年の四月でした。親子二代が同じ学校に勤められるようになって、私たち家族は、しみじみと主の恵みの豊かさを味わっておりました。格調高いベックさんのメッセージは、信仰の浅い私たちにとり、理解に手間どったり、時には居眠りしたり、疲れ果ててみたりすることもありました。

「さっぱり今日のはわからなかったわ」「眠くて眠くて困っちゃったわ、足をつねってもつねっ

ても効き目が無くってね」などと家に帰って大笑いしたりする私たちでしたが、ベックさんは必ず集会のある夜は車で迎えに来てくださり、また送ってくださるのです。日曜日の午後は、ピクニックと称し、海岸べりの我が家にお子様方を連れて交わりに来てくださるのでした。

やがて昭和四十一年となり、オリンピックが開かれ、無事に終了したある日のこと、大きな衝撃を受ける事件が起りました。

「明日の午後、三人でコーヒーを飲みに来てください」とのお招きがあったと、母が嬉しそうに私に告げました。私もまた、那珂湊の宣教師館のお部屋で、奥様の手造りのケーキが並ぶテーブルを想像するだけで、楽しい気分になるのでした。やがて当日。訪問後のひととき、子どもさん達四人と私の息子は芝生の美しい庭に出て遊び始めました。ケーキをいただきながら、もろもろの話をして一息ついた頃、

「僕たちね、二人で相談して今度ミッションを出ることに決めました」

いつもと変らず隠やかに話されるベックさんに対し、私たち二人は、お話の意図が理解できませんでした。その様子を見てとってか、

「僕たちは今まで、ミッションからお金を貰って生活してきたでしょう。これからはミッションからのお金はまったく無しで、働きながら伝道しようと思うんです」

「どこで働くのですか、どこに住むんですか?」

「それはまだなんにも決ってないよ。決ったのはね、ミッションを出ることだけね」

「でもこのご家族はどうするのですか?」

と答えながらも、ベックさんは頭が変になってしまわれたのではないかと思いました。母は一言も話しません。

「僕たち二人は、ずっと前からその事を考えていました。そして夏の軽井沢で決めました」

「この家はどうなります？退職金はあるんですか？」

と、失礼なことだということも忘れて質問しました。

「信子さん、私たちはみこころに従っていくのですから、その責任はもちろん神様がとってくださるはずです。天のお父様は豊かな栄光の富をお持ちだということが聖書の約束でしょう。分かっていますか？」

と奥様が静かに、にこやかなまなざしで言葉を添えられました。

これは何ということでしょう。しかも十月に生れたばかりのスージイもいます。お子様五人とご夫妻。一体どこへ行かれようとされるのか。

「僕たち働いて伝道したら一番いいよ。それが聖書的だし、みこころだよ。初代教会の人たちはみんなそうだったよ」

私は聖書にあるアブラハムのことを思い出しました。私が強い感動を覚えた人物でした。それと同じようなことが今、ここに展開されようとしているのです。

「あなたは、あなたの生れ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いな

るものとしよう。あなたの名は祝福となる」（創世記　12・1、2）

アブラハムは主がお告げになったとおりに出かけた。（創世記　12・4）

「キリストは教会を愛された」というご本に、詩篇一一五・一～二のみことばのカードを添えられ、那珂湊と大洗のクリスチャンに別れを告げられて、やがてベックご一家は東京へとおたちになりました。私はこのことこそ、生けるメッセージだと深く心を打たれました。イエス・キリストがご自身の命を捨てられたように、弟子たる者もまたその道に踏み従うのだということを学んだのでした。そしてこの時、収入の無いご一家と共に、千鶴さんがぴったりと寄り添われてご一家と共に出発されたことも、軽々な信仰ではない彼女の従順な信仰の証しとして、深い感動を覚えずにはいられませんでした。

その後、ご夫妻が一応東京に落ちつかれたというので、私たち親子は吉祥寺のご新居をお訪ねしました。元はオリンピックの宿舎に使われた建物だったとかで、那珂湊の宣教師館とは比較にならない粗末な木造の古家でした。しかし、ご夫妻のお顔は輝きに満ち、ベックさんもお忙しそうに国会図書館や大学の講師として働かれ、ご自宅の夜の集会には、若い学生さんが五、六人集っているのでした。（この方々が現在集会の中核となって、四国に、大阪に、茨城にとそれぞれの地に遣わされてご奉仕しておられます。）

お忙しい中をベックさんご一家は、月に一度位は、とのお約束で、我が家を訪れ家庭集会を開

いてくださり、主に在る交わりが続けられていました。あのように理解のにぶかった私たちが、メッセージの素晴しさに気付き、切に求めるようになり、次回のメッセージを待ち焦がれるまでになりました。現在のようなカセットテープなどが無かった当時、どうしてもメッセージが聞きたくて上京することもありました。また、夏の休みには、軽井沢のお宅を訪問しては、長期滞在をしていろいろと教えていただきました。幸い子供が東京の大学に入学しておりましたので、上京の機会も増え、礼拝に福音集会にと加えていただくこともありました。粗末な集会所はやがて改築やら増築が繰り返されて大きくなり、だんだん集う人も増えて群れが大きくなるのを目のあたりにして、神様のご真実さと栄光の素晴しさに驚くのでした。「良いメッセージが聴きたい」。このような思いが自分の心の中にいつしか芽生えていました。三度の食事を二度にしてもメッセージが聴きたい。打ち消しても打ち消しても湧き上ってくる思いでした。「神様、私の思い上りでしたら、どうぞ赦してください。この思いを取り去ってください。しかし、もしあなたから出ていることでしたら、どうぞよい智恵をお与えください」と祈り続けました。とある日、霊の糧カレンダーから次のようなみことばが与えられました。

それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。

（Ⅱコリント　6・17）

一体これはどういうことなのでしょう。私は恐ろしくなりました。もちろん母にも話しませんでした。ベックさんが見えた時に、自分の本当の心境をお話しして、みことばとの関係について

も解きあかしていただこうと思いました。そして家庭集会の日を待ちました。おいでになったベックさんから青天の霹靂とも言うようなお話が出ました。それはご一家が約一年、ドイツに帰国なさるようになるかも知れないが、その間集会のためにも留守番のためにもあなたの家族に頼むことができればと思っているので、よく祈ってほしいという事なのです。いくらなんでも私まで東京に……しかも一年もの間とは。そのためには仕事を辞めなければなりません。再就職のあてもありません。とても実現性のないお話と心の中では思いましたが、そこは日本人の私、あいまいな返事でその場をとりつくろっておきました。ベックさんはさらに、この話はまだ母にはしないで私が態度を決めてから伝える方がよい、とおっしゃいました。謎のように思えたみことばの意味が、このお話と完全に結びついてしまいました。しかしこのベックさんのお話、どのように組み立てたなら人間的な可能性が考えられるというのでしょうか。また、今頃この仕事を辞めるなどという常識はずれの行動ができるのでしょうか。独身ならばいざ知らず、家族に対する責任をどうすればよいというのでしょうか。（主よ、この事はあなたのみ旨なのでしょうか。分かりません。分かりません）と心で叫んでいました。

ちょうど、申命記を読んでいた私にとって、みことばは雨あられのように降り注いでくるのです。このことは主から出ているということが、手に取るようにわかってきました。

見よ。あなたの神、主は、この地をあなたの地に渡されている。上れ。占領せよ。あなたの父祖の神、主があなたに告げられたとおりに。恐れてはならない。おののいてはならない。

（申命記　1・21）

一章から三十四章まで、まるでこの日の私のために用意されていたかのようにさえ思えるのでした。みこころは分かっても決断は別です。人間の理性や経験では想像もつかない世界だからです。信仰以外の何ものをもってしても解決できない世界だからです。（主よ。私は余りにも弱く、余りにも愚かな者です。あなたの訓練は、この私の能力を越え過ぎています。私はアブラハムではありません。あなたが行けとおっしゃる道には何も見えません）と、泣き叫びたい気持でした。しかし、聖書には次のようにあります。

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見い出すのです。

（マタイ　16・24～25）

このみことばに支えられ、ようやく心がととのい始めてきました。しかし自分でさえも、まだ不安が消えやらずにいるのに、母にどう話を切り出してよいものかと、それもまた大きな重荷でした。しかし、いつまでもそのままにしても置けず、私は一切を話しました。余りにも意外な事だったのでしょう。激しく動揺したらしく、母は何も言わず私のそばを離れました。しかし私は話したことにより平安が与えられました。かつて私が、メッセージが聞けるなら食事を減らしてもよいからと主に願ったことを思い出したのです。そう気が付いたとたん主が私の祈りを聞きとどけてくださったのだということが理解できたのでした。主のご真実さが改めて身近かに感じられて、

涙が頬を伝うのでした。そしてこの主のご真実を杖に、私は歩み出そうとはっきり決意しました。けれどサタンはなお激しく私の感情をゆすぶります。七十歳に手の届きそうな母が、大洗の地で生涯を終りたいと考えることも人情としてよく理解できました。また収入の当てもなく住居の当てもない東京に出ていくことなど、人間の理性でどうして考えられるでしょう。

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

（ヘブル　11・1）

彼女は約束してくださった方を真実な方と考えたからです。

（ヘブル　11・11）

吉祥寺での生活

昭和四十六年四月。私たちはついに、ご真実な神様に導かれながら大洗の地を後にして、櫻の花が美しく咲き乱れている吉祥寺へと移ることができました。

「真の礼拝とは、まったき従順です」

これはベックさんのメッセージの中で度々聞く言葉でした。私どもは、つぶやきの信仰でしたがそれでも神様は受け容れてくださいました。吉祥寺での生活は、主にあって本当に平和な日々でした。日本橋の深谷様のご好意で、生れて始めて民間のお仕事をさせていただきました。日本橋集会の方々、吉祥寺集会の方々とご一緒に仕事ができたことは、他の社会では味わえぬ喜びでした。またベックさんご一家との生活も楽しく、ご夫妻の生活そのものが、常に証しの生活でした。

そのような中で、集会所の土地が集会の所有になったこと、現在の鉄筋コンクリートに改築されたことなど奇跡の連続でした。そして現在再び集会所がせまくてどうにもならないほどに人々が集い、二階の集会の子ども部屋はもちろんご夫妻の私的なお住いにまで人々が溢れているという素晴らしい祝福が注がれているのは、主のご栄光の富の豊かさでなくて何でしょう。「主は教会を愛された」の通り、主の御目は全地をゆきめぐり、ご自身に対して心をまっとうする者の上に、力を現わされるのです。

一年間の留守番の責任から解放された私の上にも、大変不思議なことが起りました。いいえ不思議ではなく奇跡的なことでした。上京してから早くも約二年の歳月が流れていましたが、ある親しい知人の方を通し、再三の固辞にもかかわらず再就職をするように、とのおすすめです。鋤に手をかけてから後を振り返ることのないようにと、私は大洗の地を出る時に免許状を焼き捨ててきたのでした。一筋の煙となって細く立ちのぼった免許状。さすがに涙がこぼれました。どれほど苦労しながら得たものだったかと思う気持と、今後再び教壇に立つことはあるまいという淋しさとが交錯した複雑な感情がこみ上げてきたからでした。友人からその話を聞いた瞬間、これはどういう事だろうかと思いましたが、一応ベックさんに相談してみますと、「あなたのために、もちろん一番よい仕事だ」とのご意見です。私の胸は高鳴りました。「こんなことってあるだろうか」と、まだ確定もしないうちから心が躍るのでした。出願手続のために免許状の再交付を受けたり、紛失証明をとったりとび廻りました。そして難関といわれる採用試験の日が来ました。

聖なる方、真実な方、ダビデのかぎを持っている方、彼が開くとだれも閉じる者がなく、

彼が閉じるとだれも開く者がない、その方がこう言われる。（黙示録　3・7）

このみことばが、試験の日の朝に与えられました。そして私は、主のご臨在を大変身近かに感じて出かけたのでした。それから間もなく、採用通知が届きました。私はこれこそ主のご真実なお約束だったと主に対する喜びで一杯になりました。

「わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです」（マタイ　16・25）

繰り返し繰り返しこのみことばを口ずさみました。

そして主が私のためにと選んでくださったのは、所もあろうに東京のど真中、銀座の泰明小学校でした。母は余りの驚きのために一晩眠れなかったと言いました。若い時教職に在った母は、その学校がどのような名門校であるか、大変よく知っていたようでした。

この事から、主は、からし種一粒ほどの信仰であっても、また貧しい寡婦（やもめ）の捧げる一枚のレプタ貨であっても、心から喜んで受け容れてくださり、それを大きな祝福にして返してくださるということを、身をもって体験したのでした。

それればかりかこの職場で、私は教育の何たるか、教師の何たるかを厳しく学ばされました。私にそのことが欠けていることをご存知の主が、必要を備えたもうたのだということもよく分かりました。何と主は、ゆき届いたご配慮をなさる方なのでしょう。

母の召天

一方、主は母の上にも祝福を与えてくださいました。若く優しい集会の皆様方と、ベックご一家の五人のお子様に囲まれて、「おばあちゃん、おばあちゃん」と、それはそれは大切にされながら日々を送らせていただきました。年に似合わぬ若い話をすることやどのようなドイツ料理も憶することなくいただけることなど、みんなこれらの方々が母を大事にしてくださった結果だったと思います。その母の願いは、長患いをしないで、できることなら若い頃からの夢である衛生病院で召天させていただきたいということでした。主は、十分その心をよみしたまいました。思わぬことから大腿部の骨折をして約二ヵ月半衛生病院でお世話になりました。そしてまた最後の時も、意識不明でしたがお世話になることができました。クリスチャンの主治医とよく訓練されたクリスチャンの看護婦さんのご配慮の中、集会の皆様方が枕元で聖歌を讃美し続けていてくださいました。

母の最後は、「ハイ!」という一きわ高い声だけでした。

「ここに来なさい」

（黙示録 21・9）

と、主が確かにお呼びになったのでしょう。そして喜び勇んで、ひた走りに走って行ったのでしょう。私は肉身と離れた淋しさ（一時的ですが）にまさって、主が確実に母を迎えてくださったという事実に対する感謝で一杯でした。母はいかなる時に、主のお呼びがあってもよい準備をしていたらしく、すべてが整っていました。勤めをもっている私にとって、それはいかにも母らしい

心づかいでした。

教育の現場で

現在、私は、武蔵野市内の小学校に勤めさせていただいています。主は、ある方を用いられてむつかしいことでは定評のあるこの市内へ移してくださったのです。しかもそこには、集会の方々が何人か、児童の父兄として在籍しておられ、私のクラスにもおられるというこのような恵みに囲まれている現実を、かつてあの大洗の地を出る時、誰が予想し得たでしょうか。集会の方々に日々支えられている教師、祈りによって守られている教師。このような幸いがまたとあるでしょうか。私自身に目を留めるならば、あまりにも欠点が多く、あまりにも無知、無力、不真実な者ですが、主の守りと主にある兄弟姉妹方のとりなしによる賜物と、ただただ感謝するばかりです。

現在、世の中は乱れ、教育の現場もまたむつかしい問題に直面し、現場では誰しもが頭をかかえているのが実状です。もろもろの学識経験者によってよく研究がなされながら、それでも一向に解決のきざしが見えてこないばかりか、ますます混乱の度を深め、ただ、管理を強化することによってのみ、問題をおさえこもうとしています。また、

「自分の子に対し、親はどのような方向づけをしてよいのか分かりません」

「私立の学校に入学させたものか、公立の学校へこのまま進めてよいのか迷っています」

「塾は行かせた方がよいのでしょうか、それともやめておいた方がいいでしょうか」

良心的な父母の方々は、このようにおっしゃって真剣に考え、悩んでおられます。それも当然な

ことでしょう。私が信仰を持たない単なるサラリーマン教師でしたなら、

「そうなんですよねえ、実は私にもはっきりしたことは申しあげられないんですよ」

「ご主人と相談してみてごらんになっては？」

「すみません、今日はちょっと会議があるので、また次の機会に」

というように、その場その場でお茶を濁すしかないと思います。なぜなら、本当の解決は、学校教育だけでは不可能なことがよく分かっているからです。人類愛中心、人間讃歌、単なる道徳などでは決して解決し得ない、底深い問題が存在しているからです。生ける神のみことばである聖書と、主イエス・キリストご自身のみが、この問題に本当の解決を与えてくださる方であることを体験している私は、私のクラスの両親が、まず主イエス様に出会われるように、そしてこの子達が将来、主を畏れ、主に従っていく人生を選びとれるようにとひたすら祈っています。そのことのためにと、主はこれほどまでに私を導き続けていてくださったのだと思うからです。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。（ヨハネ 14・6）

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。（詩篇 119・105）

主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな（夫の証し）

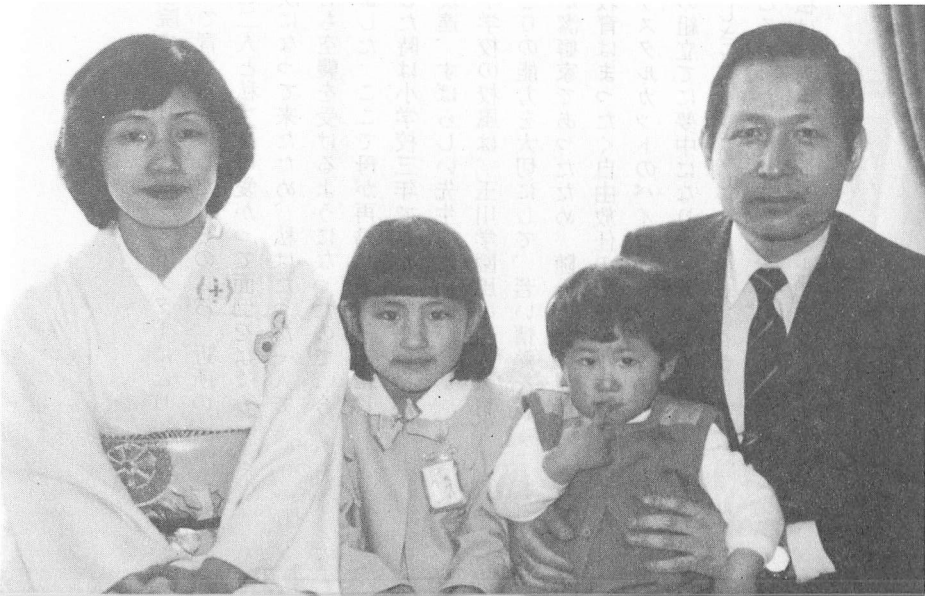
武井達郎



▲1976年10月2日、結婚式。

一九三八年世田谷区に生れる。甲府富士川小、鳥取県由良小、米子就将小、米子三中、米子東高を経て、武蔵工業大学工学部卒業後石川島播磨重工業㈱に入社。現在、化学プラント事業部プロジェクト管理部課長。家族は母静子さん、妻生子さん、長女夏子さん、長男恵一郎さん。趣味はクラシック音楽、絵画の鑑賞、写真撮影。奥様の生子さんの証しはこの次にあります。

▼長女夏子さんの入学記念に。1985年4月。



迷路へ

私は昭和十三年に、今住んでいる経堂の駅近くにある産院で、クリスチャン・ドクターにとりあげてもらいました。三歳の時父は病死し、母の手ひとつで育てられました。そのころ、近所の教会に奉仕に来ていた若い神学生が、私たち子供三人（姉二人と私）を可愛がって面倒をよくみてくださったのだそうです。そのうち、東京が空襲で危険になって来たため、私はたった一人で母方の故郷の甲府へあずけられました。そして、その甲府も空襲を受けるようになったので、今度は、父方の故郷である鳥取県の片田舎の由良へ疎開しました。ここで母が再婚して米子市に移り住み高校時代までここで過すことになりました。疎開した時は小学校三年でした。戦争はやがて終り、海と山が近くにある豊かな大自然と、仲の良い友達、すばらしい先生方にめぐり会い、まったく伸び伸びと少年時代を過すことができました。小学校の校風は、玉川学園風の全人教育をとり入れ、特に担当の永井先生は、子供たちひとりひとりの能力を大切にして、若い情熱を教育に注いでおられました。ただ当時、母は、再婚した父が潔癖家であったため、随分と父の世話に手間がかかり、苦労していました。従って私は、家庭教育はまったく自由放任の形で、小中高生時代を過しました。小学五年生の時、ラジオ部品のクリスタルカットのパイロットランプの光の美しさに感動して電気に興味を持ち、ラジオや無線機の組立てに夢中になりました。また高校時代は蝶々夫人の「ある晴れた日」を聴いて、その声の美しさにびっくりし、それ以来、クラシック音楽のとりこになり、また当時オートバイが出だしたころだったので暴走族のはしりともなりました。まわりにはちらほらと文学青年もいましたが、私は、人生とは何かなどと思索すること

はほとんどない青春でした。そして実質的に父親不在であったため、父親の干渉というものを経験したことはほとんど皆無でした。このような時代は、大学に入り社会に出るまで続きました。大学は好きな工学部へ、そして卒業して社会に出るころは高度成長時代で、理工系の学生の就職はまったくの売手市場で、私は重工業の会社に実質上無試験の形で就職しました。つまり私は子供のころから社会に入るまで、まったく自分の好きな道のみを歩いて来たのです。

入社してからの仕事は、化学プラント機器の設計やコンピューターのプログラミングでした。人間が相手でないため、これまた自分の思い通りに仕事を進めることができました。そのため、またもやこれに没頭していきました。また仕事の内容は、こまかいミスをきらい、一種の完璧主義が要求されました。

やがて入社して十年ぐらいたつと、自分と仕事に少々自信がつき、次第に他人に対して厳しくなり、傲慢になっていきました。そして自分で良いと思うことは、他人におかまいなく押し通そうとしたものです。そのころ、自分を主張せず、簡単に妥協していく人たちが非常に不思議で、また随分主体性がないものだと思って見下していました。しかし逆に、このような自己主張型人間は、協調社会である企業内では決して歓迎されませんでした。真の実力でもって自分を貫き通すほどの力もなく、また頭を押さえられることなく自由きままに育ったため自分を殺す方法を知らない私は、妥協したくないがために心を閉ざしてプライドを保ち、自分のからに閉じこもり、ますます仕事と音楽に没入していきました。そして人との交わりから遠ざかり、心はかたくなになり、内向的で、独善的な人間になっていきました。

すでに三十代の半ばにあった私にとって、結婚もまた重要な課題となっていましたが、精神的に幼稚で独善的であった私には、女性の心理など分かろうはずもなく、また結婚のあるべき姿もつかめず、結婚への道も閉ざされたままでした。こんなわけで、当時の私は、何かが狂ってしまったためにまったく生き方の方向と指針を見失い、おくればせながら初めて自分の将来と自分の性格に行きづまりを感じるようになり、深く悩むようになりました。そしてなんとかこの状態から脱け出したいと無意識の内にもがいていましたが、何の解決ももたらされないままにますます深みに入ってゆくのでした。

教会生活への入門

こんなある日のこと（昭和五十年一月）、会社の世界だけにとじこもっている自分をなんとか打破したいという思いもあって、ポスターに導かれて、近所に新しくできた教会が始めた英会話教室に入学しました。宗教音楽が好きでしたから、キリスト教にも教会にも何の抵抗もなく、むしろ教会に興味を抱いてそこに通うこととなりました。目的は一応英会話でしたが、やがて教会よりもそこに出入りする人たちに興味を持つようになりました。私より平均して十五歳ぐらい若い人たちが大部分を占めていましたが、みなが生き生きとしているのが非常に印象的でした。そして間もなく私は、そこに少年時代の心の自由を感じ、彼らとつきあうことに心のやすらぎをおぼえるようになり、いつのまにか日曜朝のイングリッシュバイブルクラス、水曜日の交わり会や聖書の学び、またすすめられるままに日曜礼拝にも出席するようになりました。そしてさらに家

庭集会に招かれ、これにもさして抵抗感はなく、むしろ喜んで出席するようになりました。家庭集会においてしょっちゅう話に出てくる「みことば」とは、イエス・キリストが宣べられたこと、また聖書に書かれてあるすべてのことであることを知り、聖書に興味をもち出しました。家庭集会の集まりの中で若い彼らを夢中にさせるかくされた背後にあるものに非常に興味をもち、その交わりに積極的に参加することになりました。

おのれを閉ざす者は自分の欲望のままに求め、すべてのすぐれた知性と仲たがいする。
愚かな者は英知を喜ばない。ただ自分の意見だけを表わす。（箴言　18・1、2）

聖書のことばは、心を閉ざしていた私にぐさりと突きささりました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

自分のいるべきところを見失って精神的にまったく疲れ切っていた私に、主は、わたしのところに来なさいと呼びかけてくださいました。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。（ヨハネ　1・1～5）

聖書のことばが神のものである、という事実は、非常なおどろきでした。

信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

（ローマ　10・17）

このように教会生活の中で聖書にふれ、キリストにある交わりに導かれ、自分のかたくなな心がおどろくほど柔かくなり、また心にやすらぎをおぼえるようになりました。

決心

そんなある日、教会の人たちと一緒に、あるホテルで行われた伝道会にさそわれて出席しました。アメリカ人伝道師はその日、聖書の福音書かららい病人の話をし、私たちの心も、罪というらい病におかされており、このままではただ死を待つだけであることを説き、罪を悔い改め、イエス・キリストを救い主として信じるなら、死からまぬがれるとせまってきました。罪の解決は、十字架上で苦しまれたイエス・キリスト以外にはないことを説いていたのです。

さて、ひとりのらい病人が、イエスのみもとにお願いに来て、ひざまずいて言った。「お心一つで、私はきよくしていただけます」イエスは深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわって言われた。「わたしの心だ。きよくなれ」すると、すぐに、そのらい病は消えて、その人はきよくなった。

（マルコ　1・40～42）

すでに自分が罪の中にいるということをはっきり自覚していた私は、「信じなさい、そうすれば救われます」というすすめに心を動かされて、過去の汚れた自分ときっぱりと決別しなければならないという思いがこみ上げて来、同時に今こそその時であると思い、一瞬の古い自分との戦いの内に、主を信じて従おうと決心して立ち上りました。そして伝道師の導きに合わせて罪を告白し、救い主なるイエス・キリストに感謝の祈りを捧げました。夜、伝道会の帰り路、先に救われたクリスチャンの人々が、私の信仰への決心を本人以上に喜んでくれたことをきのうのように思い出します。

そして、さらに半年ほどたったクリスマスの日に、私は洗礼を受けました。私の証人として、会社の友人の二人に来てもらい、新しい生活へのスタートを記念してもらいました。三十七歳でした。

助け手との出会い

神である主は仰せられた。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」（創世記　2・18）

こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。（創世記　2・22）

永い間結婚に確信が持てず、結婚したくてもできない状態だったのですが、女性の役割がはっきりし、また男性が主を愛する時、伴侶の女性も愛することができることを知り、結婚に対する不安も消え、結婚を決心することができました。その時私の前に現れた女性は、家庭集会を共にしていた信者でした。そのころの妻は、私の目には聖書気違いとしか見えませんでした。いま、結婚当初をふりかえると、自分では大いに心が柔らかくなったと思っていたのですが、妻は、私がまだまだ自己中心的なので悩んだこともあったとのことです。

しかし主は、そのような出来たてのクリスチャンに早速信仰の助け手を送ってくださり、支えてくださり、なんとか結婚生活へ、信仰生活へと乗り出すことができるようにしてくださいました。結婚式の時、妻の友人が祝辞の中で、「生子(しょうこ)さん（妻の名前）は神様が与えてくださった人なら誰でもよいといっていました」といった時、「誰でもとは失礼な、そんな祝辞があるか」と妻とその友人に立腹したことを覚えていますが、その真の意味も分からないような未だプライドのみ高く、利己的で未熟なクリスチャンだったのです。

主の導き

私たち夫婦は結婚し、ごく普通の信徒として普通の教会生活を送れるものと思っていたのですが、やがてその道が閉ざされました。私たち夫婦にとってすでに思い出の多い教会となってはいましたが、教会運営の実体を知るにつれて、世俗的なこの世の団体と中身は何の変わりもないことに失望することが多くなり、なりたてのクリスチャンの私はそれに耐えきれず、そこを去るこ

とを決心せざるを得ませんでした。妻は悲しみましたが、すなおに私に従いました。そして、次に待っていたのは、およそ私たちの役目だとは夢にも思っていなかった開拓伝道への道でした。同じころ、主の召命により、渋谷の地で開拓伝道をすることに志をいだいていた同じ教会の信徒であった人の手伝いをすることになりました。そしてその準備の約半年の間、日本キリスト教団の教会に一時お世話になりました。このころ、主が私の神であり、心から仕えなければならない方であることを、次のみことばで明確に示されました。

聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。（申命記 6・4、5）

そして昭和五十三年の五月に、米国人宣教師の助けを受けて、渋谷のビルで伝道をスタートしました。それから約三年が経過して、三十名以上の人々が日曜日の礼拝に出席するようになり、またそのころ、若い米国人の宣教師に引継がれ、日本人の牧師も加わり、新しい教会形成を強力に推進することになりました。考えてもいなかった伝道生活への深みに入っていき、私にとっては、かなり肉体的に疲労が積っていきました。そしてある日、救急車で、職場から入院するはめにおちいりました。おまけに脳出血と予断され、ほんのいっときでしたが妻を驚かせ悲しいめに会わせました。しかしこのいっときの事故を通して、妻は聖書のみことばの力をあらためて教えられ、私は人間の頑張りのみに頼ったがむしゃらな教会生活が主に喜ばれないことを知りました。私たち教会役員は、相変わらず、自分たち人間の力で計画をたてて、その目標をめざして強引に

実行する形で、色々と教会形成と伝道方法を試みていたのです。

母教会を去ってから約六年、開拓伝道を始めてから約五年半の間に、私たち夫婦は、知らず知らずのうちに、教会のあり方について多くのことを考えさせられるようになりました。そのころは、我が家でも集会を持ち、他の二つの集会と同様に、各々日曜礼拝をもっていました。

そんな時、私たちの集会に導かれてこられた上野さんを通して、吉祥寺キリスト集会の存在を知り、そこでの聖日礼拝の持たれ方を知りました。私たち夫婦も導かれて吉祥寺キリスト集会の聖日礼拝や家庭集会に参加させてもらいました。聖日礼拝は、聖さん式といってもいわゆる説教はなく、また司会もなく、プログラムもなく、聖霊に導かれるままにただ主のなしてくださった十字架のみわざと主ご自身を、みことばによる心からの祈りや讃美をもって感謝する礼拝が捧げられており、聖霊の自由による主のご臨在を深くおぼえることができました。集会場は立錐の余地もないほど混んでいるにもかかわらず静かで、厳粛で、しかも主への感謝で喜びにあふれた礼拝が行なわれていました。また家庭集会は同様に、大勢の人にもかかわらず皆が寡黙で、そこにも主のご臨在と交わりの喜びがひしひしと感じられました。私たち夫婦は、それまでぼんやりと頭の中で理想として描いていたイエス・キリストにある教会の真の姿を、そこに見ることができたのでした。私たちはそれを学び、私たちの教会の参考にしたいと考えましたが、しかしすぐ、それは私たちの器でないことを悟りました。

私たち夫婦は、ここで母教会を去る時と同じく、もう一度、大きな岐路に立たされました。すでにかなりの人数が集まる教会になっていた集まりに対して、一役員としての責任がありました。

吉祥寺キリスト集会で本当の生命の力を持った集いを見、それを学び真似しようにも他の役員の理解がなければ実現は不可能です。さらに、仮りに理解が得られたとしても、それは単なる礼拝の順序とか集会の持ち方とかいった表面的な形式の問題ではなく、ひとりひとりの信仰のあり方の基本にかかわる問題であることに思い至ったとき、今まで通りの試行錯誤を再び繰り返すことの無意味さを痛感し、それまでの教会に留まることに大きな疑問を抱かざるを得ませんでした。二人は共に祈りました。昔からの信仰の友である宣教師とも相談しました。しかし主は、最終的にみことばをもって私に語りかけてくださったのです。

アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、

彼もわたしとともに食事をする。勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい」（黙示　3・14～22）

すると、ナタンはダビデに言った。「あなたの心にあることをみな行ないなさい。神があなたとともにおられるのですから」（歴代誌Ⅰ　17・2）

妻は私より先に、みことばと吉祥寺集会の友人の祈りによって、吉祥寺集会に行く確信が与えられ、私のために祈っていてくれましたが、私もこれらのみことばに導かれて、新天地の戸を開くことになりました。七回目の結婚記念日（昭和五十八年十月二日）に、吉祥寺キリスト集会に移りました。出エジプト記にある通り、奴隷時代のエジプトから八年目に、やっと約束の地カナンにたどりついた気持でした。

主は絶えず、あなたを導いて、焼けつく土地でも、あなたの思いを満たし、あなたの骨を強くする。あなたは、潤された園のようになり、水のかれない源のようになる。あなたのうちのある者は、昔の廃墟を建て直し、あなたは古代の礎を築き直し、「破れを繕う者、市街を住めるように回復する者」と呼ばれよう。（イザヤ　58・11、12）

それまでの私たちの結婚生活は、教会生活との二本立てで、まったくタイトな毎日でした。私

たち二人はよく会話をし、共に行動しました。そしてその話題の中心はいつも教会についてでした。そして自分でも教会の仕事を一生懸命やってきたつもりでした。しかし主の目からみると、私の行いはなまぬるく、また主のみこころにかなっていないことをさとしてくださるために吉祥寺キリスト集会へと導いてくださったのでした。

集会に集って

吉祥寺キリスト集会に集ってみて、私は、そこには主の働かれる余地が沢山あり、主にあっての自由があり、そこに集うクリスチャンたちのひとりひとりが主によって生かされていること、集会には役員会も、総会も、会員制度も、洗礼準備会も、牧師制度も、月定献金制度も、教会規則も、つまりこの世の人間的な制度がいっさいなく、また日曜礼拝には説教がなく、その後に持たれる福音集会と区別してあり、それによって心からの礼拝を捧げることができる喜びがあり、主ご自身が満ち満ちておられることを知りました。

それに、毎週火曜日に語られ続けている集会の女性がたのいのちがけの証しが大きな働きをしていること、また家庭集会が日本の各地で伝道のため活発に持たれていることを知り、いっさいの形式とこの世の制度を排除し、主の導きにたよる集会は当然主ご自身が頭となって働いてくださることを、明らかに私に見せてくださいました。

私は、あらためて、これまでの歩みと今の教会がかかえている問題を、主がいかに悲しんでおられるかを知るのでした。

目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。だからあなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。

（黙示　3・2、3）

キリストの身体そのものである集会（教会）に、真理であり、生命であるイエス様がご臨在なさる時、クリスチャンは成長することができ、また未信者もイエス様に気がつくことができるのは明らかです。イエス様を愛し、イエス様のみを誇り、イエス様を語ることのみに夢中になり、また喜びながら互いに尊敬し、愛しあっている集会の皆さんの姿に接し、私は、未だ本当に主に向っていないことを知りました。

再出発（主と共に歩む喜び）

信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし信じない者は罪に定められます。

（マルコ　16・16）

昭和五十九年四月二十二日のイースターに、私は、昔受けた洗礼が滴礼であったので、聖書に基いて浸礼で、三十三名の方々と共に再出発の心をもってバプテスマを受け直しました。以前は

気にならなかった滴礼でしたが、聖書に書かれている通り水に身を沈める浸礼に意義があることを知りそれに従いました。

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

（ローマ　6・4、5）

私はいま、このみことばの通りに、いのちにあって新しい歩みの再出発を始めることができました。そしてキリストにつなぎ合わされ、キリストの復活にあずかることができる幸いをいただいていることを確信しました。

私は、十年前に精神的に破産状態になったおかげで、真実なるものに接した時、それまでの体験、教育で受けた知識、わずかばかりの思想、考えなどを惜しむことなく捨てることができ、既成概念から解放され、自分ながら不思議なくらい素直になれたためかたくなな心に一条の光が差し込み、以来わずかな光をたよりにそれに向って歩んできました。真理である聖書のみことばを信頼するうちに、次第に主は悟ることの遅い私にもみ姿を現わしてくださるようになりました。そして主なる神様が愛そのものであり、常に私たちひとりひとりに生命を与えてくださろうとし

ておられる方であることを知り、そのような命令を聞いている限り、それが苦しみであっても、主は我々を決しておみすてにならないし、むしろ常によいもので満たしてくださることを知りました。すべてにつけて自分の楽しみ、自分の喜びが第一であった生活、そして次から次へと目標をみつけてその実現に努力する生活は、すべて仮の充実であり、一時的なものに過ぎませんでした。そして、このような生活の中では、当然主の方を向くことができるはずがなく、自分の世界の中で欲望と野心と落胆の迷路をさまよい歩くだけでした。

この世はサタンの支配する世界であらゆる誘惑が満ちており、また私たち人間はもともと罪の性質をもって生まれているため、環境次第で容易に自分を見失い、本来私たちがしっかりと見なければならないものを見ず、罪の暗闇の中をさまよい歩くだけであることを知りました。私も主を知らなかったゆえに、次第に、暗黒の穴の中へとすべり落ちていたのでした。しかし主はそのような私をあわれみ、主のみもとに立ち返らせてくださいました。

私の当面の第一の課題は、人間関係の修復でしたが、このようにしてまず、その前にやらなければならない主との関係を正すことに導かれたのでした。人生の迷路に入り込み、行きづまっていた時、私は、心の療養のために最初教会という病院に入院しました。そこには名医のイエス様がおられ、心の病をいやしてくださり、永い療養生活の後にいまリハビリテーションを終え、ようやく人生の再出発を果たした所です。

私は、クリスチャンの国籍が天国にあり、地上での生の後は神の国である天国に帰ることができるという約束を知り、死の暗さから解放されました。また以前救急車で入院して以来、何かと

健康のことを気にしていましたが、私の生命は、神様の支配下にあることを思う時、肉体の滅びのことのみ気にして、心の生命をないがしろにすることはまったく本末転倒であることを知り、健康、病気を気遣うとらわれの心から解放されました。またそのほかのいろいろなとらわれや自我、自分のからといったものから解放され、他人に対する関心や他人との交わりが回復し、精神の自由をいただき、はかり知れない主の十字架の恵みをかみしめています。

私たち夫婦と子供たちが吉祥寺キリスト集会に集うようになってから早一年がたちましたが、最近、我が家に大事件が起りました。それは私たちと同居している母の和平宣言です。以前は徹底して私たちの信仰に反抗していた私の母が、「あなたがたもやっと本物の神さまをみつけたようですね」といって、私たちに反対することをやめる、と宣言してくれたのです。そしてその証拠として仏壇を焼くことに同意し、記念として翌日の敬老の日（昭和五十九年九月十五日）に多摩川の川岸で、家族全員で、聖書にもとずき、こわして火で焼きました。

この日の母は、帰り路に生えている草々や小さな花に自然の美しさをたたえ、久しぶりに子供のころのあのやさしかった母の姿を見る思いでした。そして母は、帰り路で女学生の時若い女の先生がいつも口ずさんでいたという讃美歌五十番を突然歌い出し、なつかしんでいました。また少したって母は、子供を抱えて未亡人になった時助けてくれた近所の教会の若い神学生のことをなつかしく思い出した直後に、なんとその本人である三和牧師に約四十五年ぶりに経堂で再会することができ、ただただ驚くばかりでした。

いま私は、真理であり、道であり、生命であるイエス様を通して、天と地と海とその中にあるすべてのものをお創りになった生ける神のみもとに立ち返ることができたことを感謝し、年を取れば取るほど若々しい希望にあふれた日々を送らせていただけることを心から感謝しております。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。
私のうちにあるすべてのものよ。
聖なる御名をほめたたえよ。
わがたましいよ。主をほめたたえよ。
主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな。
主は、あなたのすべての咎を赦し、
あなたのすべての病をいやし、
あなたのいのちを穴から贖い、
あなたに恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、
あなたの一生を良いもので満たされる。
あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

（詩篇　103・1～5）

主は私のいのち（妻の証し）

武井生子（しょうこ）



▲家庭集会で主を受け入れる決心をした曇田恒子さんと。1985年4月7日。

宮崎県に生れる。後川内小、小林中、鹿児島女子大学附属高校、相模女子短期大学卒業後、明治乳業㈱、エース交易㈱勤務を経て後教会で知りあったご主人と結婚。家族はご主人の達郎さん、母静子さん、長女夏子さん、長男恵一郎さん。趣味は手芸、料理。

▼初めての軽井沢キャンプ、山本孝子さん宅で。右から染野待子さん、高橋久美子さん、生子さん、山本孝子さん、松本明美さん、山本いづみさん（前）。



主を憧れた学生時代

私は理想が高いため失敗を恐れ消極的で、いつも「人」が中心でしたから他人と自分を比べてばかりいました。依頼心が強くいつも誰かに頼っていました。

親戚にカソリック信者の従姉がいて、その従姉に興味を持つようになっていました。短大入学のため上京することになりましたので、従姉の住んでいた修道院のホーリーファミリーの生活に憧れ、願いはかなえられました。日曜日のミサ、公教要理、国際的な友、何もかもが新鮮でした。一変したこの生活の中で、てきぱきと自分の考えを持ち意見を述べている友を見て圧倒され、私には自分がないことがいやというほど分かり、そのことに悩みはじめました。それまでただ何となく、問題意識もなくぼんやり過していた私は、この環境の一変によって新しい思想の世界へと導き出されるようでした。「愛とは」「人間とは」「平和とは」「生きる目的は」と具体的な意識に目覚めはじめてゆきました。ちょうどその頃、「自分で考えるということ（澤潟久敬著）」を読み、自分で考えることは内部的に自発性をうながし、それが個性のある人格を生むのだとありました。私もそうなりたいと思いました。きっと神様を知ることによってそれが与えられるのではないか、となんとなく思いました。その本の中でデカルトの、「さあ私の魂よ、出発しなければならない」という言葉を見つけ、とても興味を持ちました。そのような時、公教要理の中で「朝まだきにわが心、主を憧れて目覚む、主よ祝せらせたまえ」という祈りを見つけて日記帳に書き出し、いつの間にか朝ごとに口ずさむようになり、主を心から憧れる者になっていました。

昭和四十三年二月の朝、卒業試験を前にしていました私は、ベッドの中でいろいろと思いめぐ

らしていました。その時、とても不思議な力が降り注ぎ、いままで考えていた疑問が解けてきたのです。この世界は神様によって支配され、自然のすべてが主なる神をほめたたえていること。主こそ愛の源であり、人間ひとりひとりをとても大事に思っておられること。この主なる神様は私をいつも守り私のわがままさえも深い愛のまなざしでじっとみつめ、私自身がそのわがままに気づくのを待っていてくださっていましたし、また赦してくださる神様でした。私の両親も神様のすばらしい創造であり、その両親の愛から生を受け、愛によって生かされているということを知った時、喜びがこみあげてきて涙があふれてきました。ひとつひとつが神様の創造であることに気がついた私は、窓をあけ、大空を見上げ、木の葉の一枚一枚の美しさに感動し、両親がうれしくて、神様の愛が美しくて、あまりにもやさしくて、泣きました。何もかもがキラキラ輝いて新しく見えました。その時は、シスター方がこのすばらしい神様に、ご自身の生涯を捧げておられることが尊く美しいと感激したものです。この体験は私の目を別の世界に向けるきっかけとなりました。そしてこの体験はあまりにもすばらしく、黙っていることができないで、卒業試験の解答に「平和は可能です。すべての人が神様に目を向けることによって、すべてが解決します。私は学園生活でこのことを知り幸福です」といったことをぎっしりと書きつづりました。よく卒業できたものだといま思います。私が恐れるものは主以外何もなくなっていました。依頼心の強い私でしたが、このころからか細いながらも一本の芯ができたようでした。私はこの世界に一人しかいない、神様の愛を受けて、私は私らしく生きていこう、と自分も愛せる者となり、他人を見る目が変っていました。神様に愛されているという事実は、私自身の内的安定となっていたの

です。このことがあった時シスターに言われました。「あなたはこれからキリスト教的な考え方をして行くでしょう。しかし神様に結ばれていなければ枯れてしまいますよ」。その時は私ももちろんそうだと思いましたし、もう決して神様から離れるはずはない、と心の中で叫んでいました。しかし事実私はその体験がありながら教会へ行くこともなく、聖書を読むことも知りませんでした。

一つの窓を閉ざされて

その後卒業し、社会人として働き、シスターの勧めで英国へ行く機会が与えられて後、九州の実家へ帰りました。家では花嫁修業として料理、お花、お茶などを習い、お見合もいくつかしました。親孝行したいという単純な動機からでした。やがてその内の一人の方に愛もないままに結婚を承諾してしまいました。事は具体的に進められ、すべてが完全に整いました。四十八年四月でした。私は白無垢の花嫁衣装を着て式場へ向いました。式場で何か変だと気づいた時には家に帰るように言われたのです。家について花婿が前夜からいなくなったことが知らされました。直感的に、主はみこころでない結婚を止められた、と思いました。喜びのないただ形だけのこの結婚に主が介入して止められたことは、私を奮い立たせました。その時なぜか冷静に受けとめる力が与えられていました。とり乱して泣きだすのではないかととても心配していました両親は、その様子を見てむしろ励まされたと後に話してくれました。力ある愛の神様は、私が進もうとしたその道を、完全に閉じられたのでした。

その後再び上京し、シスターを訪ねました。「よかったわね、あなたが幸福になるように、お祈りしていたのよ」とシスターは暖く迎えてくださり、次の道が示されるまで留まるように勧めてくださいましたので、シスターのお手伝いをしながら寮生活を始めました。しかしその時の私は、具体的に、何か私に働きかけておられる私自身でどうすることもできない何か、つまり神様についてもっと知りたいという思いでいっぱいでした。やさしく親切で、暖かい環境でしたのに求める心が満たされないままいらだたしくさえなってきて再び社会へ出る決心をしたのです。

聖書にふれて

ちょうどそのころ、妹の友人の梅田映子さんにお会いしました。いままでカソリックだけが本当のキリスト教だといった偏見を持ち、神様のこと、そのほかいろいろなことに霧につつまれたような疑問を抱いていた私に、梅田さんはすがすがしく接してくださり、そのことによってプロテスタントは軽い安っぽい信仰といった間違った観念から解放され、むしろ自然にその世界に興味を持ちました。近くの教会を紹介してくださり、シスターにはこっそりでしたがその教会へ行くようになり、「聖書」にはじめて直接ふれることになりました。鹿が、谷川の流れを慕いあえぐように、私の魂も飢え渇いていましたし、学生時代に体験したことがただなつかしく思い出されてくるのでした。聖書のことばの美しさに感激し、ただただ夢中で読み続けました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与

えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

すべてのことには神様のご計画がある、と知りました。主を愛する者のために備えられている道は、わざわいの道ではなく、将来と希望と平安の道であると知りました。また次のみことばで強く話しかけてくださいました。

十字架にかけられていた犯罪人のひとりはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「お前は神をも恐れないのか。お前も同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ」。そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください」。イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」

（ルカ　23・39～43）

私ははじめて主イエス・キリストの十字架のみわざが私の罪のためであったことを知りました。あふれるばかりの愛の恵みを注いでくださいましたのに、私はその主に背を向けて、自分の都合のよい道だけを歩いていた犯罪人そのものでした。このようにエレミヤ書を通し、人生には二つの道しかないこと、つまり「のろい」の道と「平安」の道、「キリストに悪口を言い罵る者」

と「キリストを主と信じ受け入れる者」の二つしかないことを示されました。イエス様の十字架を中心に、右か左か、二つの道の選択を、強く迫られたのです。その時即座に私はこの方を知っているし、信じていた、しかし口で告白していなかったのだ、と気づきました。みことばの通りです。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。（ローマ　10・10）

このようにして私は主に従う祝福の道を選び、昭和四十九年のクリスマスに受洗しました。

あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足をつまずきから、救い出してくださいました。それは私が、いのちの光のうちに神の御前を歩むためでした。（詩篇　56・13）

つまずきだった事件も、一方的に祝福したいと考えておられる父なる神さまの最大の愛のしるしでした。私の滅ぶべき命を、死からいのちの光のうちへ、また永遠の道へと導くためだったのです。試練にあったことは本当に幸いでした。霊なる父は、愛するがゆえに私の益のため懲らしめるとおっしゃっています。みことば通り、主のくすしいご計画を心からほめたたえました。神様との和解をいただいて、私の傷口は完全にいやされました。

主は遠くから、私に現われた。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。おとめイスラエルよ。わたしは再びあなたを建て直し、あなたは建て直される。（エレミヤ　31・3、4）

真実で誠実だけを示してくださる主は、私の名を呼び、主のみこころによって建てなおしてくださる、これほど大きな喜びがほかにあるでしょうか。私の心はその主に夢中でした。そして私は、主の定めておられる事だけが、この身になりますようにと心から祈るようになりました。主は大自然を通し聖書を通して、わたしだけが神である、とお語りになっておられたのです。

あなたの恵みによって私の声を聞いてください。
主よ。あなたの決めておられるように、私を生かしてください。　（詩篇　119・149）

結婚に導かれて

それからちょうど三年がたって、主なる神様はとても不思議なことをしてくださいました。四月一日のことでしたが、今の主人の武井に会わせてくださったのです。そしてこのことが主から出たものであることを示してくださいました。主は私をご自分のものとされた時、いっさいのことを確かに代って心配していてくださり、しかも主からの備えは完全なものです。平安と、喜びの内に、主が与えてくださったみこころである、と直感的に理解できました。

摂理とすぐれた知性とは私のもの。
わたしは分別であって、わたしには力がある。　（箴言　8・14）

摂理は主のものです。主が私の力となられたのです。そして、五十一年十月二日、主の御前で結婚いたしました。

クリスチャンになったばかりの主人は、結婚と同時に教会の役員に任命されました。そして教会内部のさまざまな世俗的な問題がたえず新家庭を圧迫することになりました。牧師と意見があわず、ついに主人は教会を離れる決心をしてしまいました。そのころの私は母教会意識が強く、これからすばらしい教会に建てあげればよいのでは、といった考えぐらいしか浮ばず、去ることなど思いもよらないことでしたので悩みました。しかし強く決断する主人に従うようみことばで示されました。

人がその友のためにいのちを捨てるという、
これよりも大きな愛はだれも持っていません。
（ヨハネ　15・13）

妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。（エペソ　5・22）

このことは、自分の考えと思いを捨てる第一歩でした。何か途方もない所へ放り出される不安と心細さを味わいましたが、でも従うことによって、むしろ積極的に跳びこえたことによって、前向きに歩こうという思いが強くなっていましたし、私たち夫婦にとってこれは信仰生活の荒野への道であり、実は恵みへの道でもありました。主は決して誤りをなさらない方、私にあらかじめ定めておられることだけが成るという確信が与えられていましたので、心は安定していてひたすら主に期待するだけでした。そして確かに主のあわれみと、いつくしみはあふれていました。長女が誕生したのもこのころです。まもなく、同じ教会を去った役員の方々と共に、小さな聖研

グループが生まれました。牧師や宣教師をお呼びして、教会の真のあるべき姿を考え、真剣に話し合いました。

イエス様が洗礼をお受けになられた時、

「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです」（マタイ　3・15）

と弟子に言われたみことば通り、私もイエス様に心から従って行きたいと思い、前に受けた洗礼が滴礼でしたので、浸礼のバプテスマを妹といっしょに外の教会で受け直しました。イエス様の足跡に従うようにと、私たちに模範を残された聖書のみことばが、生活の中で生き始めたのは、このころでした。

私たちは縛られた教会という枠を外すことによって、自由に、真実だけを求めることをいろいろと試みました。少しづつでしたが群に人が加わり、礼拝が行なわれるようになりました。小さな群で頼れる人が誰もいないので、ただ「主おひとり」だけに頼る信仰へと、必然的に目が向けさせられてゆきましたことは実に神様の知恵そのものだったことに気づきます。そして、このころです。「主よお示しください」「主よきよめてください」「主よお用いください」「あなたは私に、何をお望みですか教えてください」と心から祈りました。みことばの導きはこうでした。

兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あな

たがたの霊的な礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。（ローマ 12・1、2）

主は私に命じておられました。私自身をささげなさいと。無条件で。私は罪のあるまま、そのままの状態で献身の意志を示しました。すると間もなくです。具体的に御手を置いてくださり、罪を示し、豊かに導いてくださることが起りました。

主はそこにある助け

五十六年一月、突然のことでした。会社から電話があり、主人が急に倒れ病院にいるので急いで入院の用意をして来るようにという連絡が入りました。予期しない事件でした。主人は青白い顔をしてぐったりしていました。めまいがし頭が割れるように痛く、吐き気がするというのです。脳出血の診断があり、あらゆる検査が始まりました。主人の実の父親が世を去ったのはちょうど主人が今の長女と同じ年頃だったということが私の恐怖につながってくるのでした。いつの間にか私は目の前に置かれたことだけを見つめていて、「思い煩い」という罪にとらわれていました。検査は続けられるのですが原因が分からず、三日間この戦いが続いたのです。泣き叫ぶ子供を姑に押しつけ私は夫の病院へ通いました。後は脳外科の診断だけが残されていました。毎回出る食事に手もつけず、起きられない重病人になってしまった夫が、「カバンの中に聖書があるよ」と言っ

て眠りはじめました。私は我にかえり、聖書を開きました。

主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。　（詩篇　37・7）

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

主の前に静まることを忘れ、主を知らない者のように心を乱し、悲しみでいっぱいでした。主を忘れた状態の悲しみは本当にみじめそのものです。心を主に向けるその時、次第に平静になり、まるで闇から光に移されるようでした。主が成しとげてくださると信じました。

神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。　（詩篇　46・1～3）

このみことばは、苦しみの時そこにある助けでした。その病気を恐れることはありませんでした。その場で、神様だけが私の主であることを深く覚え、ただ主だけを信頼し「主よ、この問題を感謝します。私はあなたの民です。あなたのみこころならば恐れません。主のみ名によってアーメン」と心から祈りました。すると同時に主のご臨在にふれ、祝福でおおわれたようでした。不安は完全に平安となっており、内側からあふれるよろこびが湧き上がり、希望が与えられ、信仰が与えられていました。そのよろこびの中で讃美の歌声さえも聞こえてくるのです。

暗きの力のよし防ぐとも、主のみことばこそ進みに進め。わが命もわが宝も、取らば取りぬ、神の国はなお我にあり。

（讃美歌二六七番）

脳外科の先生が夜八時に診察してくださるとのことでしたが、三十分ほど遅れ、それを待つ間のできごとでした。苦しみ続けていた主人もこの間熟睡していましたのが目覚めましたので、主からのみことばを伝え、心静かに先生を待ちました。診察の結果は何と、「どこにも問題なし、明日退院してよろしい」とのことでした。この事件を通して、主は、私たちの生活の全部が御手によって完全に支配されていることを明らかに教えてくださったのです。主が夫を返してくださったことを本当に感謝いたしました。どんな時にもまず主を見上げ、信仰を働かせて信頼し続ける歩みがどんなに主の願っておられる大切なことかを覚えました。「主人も子供も生涯、主よ、あなたに捧げられたものです」と改めて祈る者とされたことも恵みのはじまりでした。

十字架の力

次に主は、どうしても批判的になり愛せない友のことで、鋭くみことばで迫られました。

律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語をもって全うされるのです。

（ガラテヤ　5・14）

私の内にはこの「愛」が全然ないことを自覚しなければなりませんでした。私には何一つよいも

のが無いのです。「いつもその人に親切に接しているし、何も悪いことなんかしていない」と心の中でつぶやく時、その瞬間にイエス様から離れ恵みからも落ちている自分を発見したのです。愛だと思い、尽していると思っていたことさえも実は自分から出ている思い上った心だと気づきました。それまでも、キリストの十字架は私の罪のためであることを理解しているつもりでしたが、この経験を通してキリストの十字架上のお苦しみとその死が私自身のこととなってきたのです。「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」とおっしゃる主の愛に信頼しないなら、何ごとも無意味で、私はみじめで、あわれで、弱く、みにくい者にすぎません。そのことを心から認めることができたことは本当に幸いでした。「御霊によって歩みなさい」とのみことばに、深く深くうなずきました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ 1・9）

とありますから、私はその友に赦してもらいたくなり、勇気をもって電話をしました。その後、会って話し合う時には、その方のすべてをうけ入れ、良い面を認め、その背後にあるその方の悩みを知ることができました。私はすがすがしい平和と自由を味わっておりました。「謙遜」（アンドリュー・マレー著）を読んで心から感激したのもこの時です。

「ここに高潔な生活への道があります。それは、『下へ』の道、『さらに下へ』の道です。これこそ、天の御国で偉くなろうと考えていた弟子たち、偉くなってイエスの右と左に座ること

さえも夢見ていた弟子たちに対してイエスが言われたことがらでした。『高められる』ことを求めてはなりません。それは神がなさることです。あなた自身はへりくだること、謙遜になること、これを心掛けなさい。そして神の御前に、あるいは人の御前に、しもべとしての地位以外の地位をしめてはいけないのです。これこそ、あなたのなすべきことです。これを、あなたの唯一の目的、唯一の祈りとしなさい。神は真実なお方です。水がいつも最も低い場所を求め、最も低い場所を満たすように、神が、へりくだって空になっている被造物を見出される瞬間、その栄光と力が流れ込むのです」。

真の礼拝

五十七年、新年聖会においてみことばが与えられました。

兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。これらのことを行なっていれば、つまずくことなど決してありません。

（Ⅱペテロ　1・10）

そのころ三十名以上になった教会のメンバーを三ヵ所の集会に分け、地域伝道へと進んでゆきました。右の聖句を示され、集会所のため我が家を解放し、礼拝、祈祷会、信徒学校、個人伝道などが始められました。集会を始める前に、二人の決心者が生まれたこと、ピアノの奏楽のためお隣りの森田さんが犠牲を払ってくださったことなどに励まされスタートしました。その後わず

か一年間で方向が変えられましたが、この間に五名の方が信仰を持たれましたので感謝でした。

やがて、三ヵ所の集会がもう一度集められ、理想的な教会をめざすことになりましたが、試行錯誤を繰り返しながら実はまったく行きづまった状態で、中心にいる人たちの考えはばらばらでみんな疲れきっているありさまでした。そのような時、「光よあれ」「実を結ぶ命」を手にしました。生き生きした証し、ベックさんの権威あるみことばのメッセージ、ひとつひとつが新鮮で感激し、これこそ光そのものだ、と思いました。リンデさんの信仰の美しさ、純粋さにも圧倒させられました。吉祥寺キリスト集会のみなさまがたをして、このように生かしめているのはいったい何だろう、私も行ってみたい、という思いが日ごとにつのってきました。そして主人と一緒に出席してみることにしました。「見てこよう」といった思いでいましたので、初めはとても醒めた気持で礼拝に臨んでいましたが、だんだん主のみ前にいる実感が強く身に泌みて、いつの間にか静けさの中でイエス・キリストの十字架の贖いを心から感謝していました。その礼拝にはまったく人間による作為はなく、形式もなく、礼拝の間中、ひたすら「主イエス様おひとり」だけがほめたたえられ、賛美されていました。観念として考えていた理想の集会がそこに現実に存在していたのです。

集会では、すべての主にある兄弟姉妹（主のみ救いを受け入れた人々はみな、主にある兄弟姉妹となります）のために、またこれからその家族に加えられる方々のために、心からの祈りが捧げられていることを知りました。「実を結ぶ命」の中に「主よどうぞ、あなたの光のうちを歩みたくないすべての信者を集会から遠ざけてください。そしてまたあなたによって備えられていな

いすべての未信者をも来ないようにしてください」と主に頼る信仰の祈りが捧げられていることを知った私は、何かもっと、私の知らなかった大きな新しい世界があることを知り、これまでの貧しい教会概念にとらわれていてはいけないのではないか、と感じはじめました。その確かなものを、もっともっと知りたい、という思いは日々、増し加わってくるのです。私も光の中を歩きたい……。それは、切なる願いでした。私はまた、火曜日の婦人の学び会にも出席してみようと決心しました。その日はあいにくの大雨でしたが、何ものかにつき動かされるように二人の子供と出かけました。知りたい、そこから何かチャレンジするものをいただきたい、と私は張り切っておりました。ところが集会所に着いてみると、その日は軽井沢キャンプのため、お休みだったのです。がっかりしましたが、悲しむ者は幸いです。がっかりした心はそのまま慰めを求めており、帰りの電車の中で祈りながら聖書を開きました。

主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保っていてくださいます。測り綱は、私の好む所に落ちた。まことに、私への、すばらしいゆずりの地だ。

（詩篇　16・5、6）

私は目を疑いました。吉祥寺キリスト集会、それは私への「ゆずりの地」であり、それも「すばらしい地だ」と主はおっしゃっておられるようです。これこそ主よりいただいたすばらしいチャレンジでした。聖霊の実である喜びと平安に私はとりかこまれていました。導きの主にふれて、電車の中で「どうぞ主よ、よろしくお願いいたします」と祈りました。

これから再建しようとしている教会への思いは暗く、吉祥寺キリスト集会への期待だけが増して板ばさみになり、主人は非常に悩みました。しかしどのような状況であれ、みことばは力です。主人にも同じようにみことばで示されるように祈り、その時を待ちました。日曜日の礼拝は今まで通り続けながら、吉祥寺キリスト集会の婦人会の学び会に積極的に出席し、滝山家庭集会にも参加しました。そのすばらしさは圧倒的でした。

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ　1・23）

集会のみなさまがたの熱い祈り、夫が子供があの人がこの人が、死に至る道から永遠の命に至りますようにと、ひたすら祈っておられる様子は、主を愛し、主にある喜びを一人でも多くの方になんとかしてお伝えしたいという、主のしもべとして仕える姿そのものでした。それに初めて信仰を持つ方々の成長は非常に早く、互いに重荷を負い合い、とりなしの祈りを心から捧げておられる姿がいつもそこにあります。ひとりひとりが自分の弱さを誇り、みことばを信じ、キリストにある豊かな交わりを保っているこの集会こそ、求めていたものでした。

そのような時、主は一つの印しを見せてくださいました。親類そろってお墓に行きました時、お供えした梨をお土産にいただき、帰ってからそれをいただきました。一家そろってよい雰囲気でしたので、それをこわしたくないという思いもありました。ところがそれから腹痛を起し、長い間続きました。ふと、供えものについてのみことばがあったことを思い出し聖書を調べました。

供え物を食べる者は、祭壇にあずかるではありませんか。私は何を言おうとしているのでしょう。偶像の神にささげた肉に、何か意味があるとか、偶像の神に真実な意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。あなたがたが主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことはできないことです。

（Ⅰコリント　10・18～21）

その時すでに、吉祥寺キリスト集会の礼拝に一度あずかっておりましたので、このみことばのもつ意味を厳粛な気持で受け止めました。あなたは主の杯を飲み、主の食卓にあずかっているのです、と主に呼びかけられているようでした。

このような色々な体験をした私は、それまで行なってきた旧習通りの形式的な礼拝は、もはや雑音としか感じられず、聖書からも実は遠く離れているのではないかと思いはじめました。私は祈り求めました。

神が新しい契約と言われたときには、初めのものを古いとされたのです。

（ヘブル　8・13）

これまでの礼拝、教会生活は、古いものであると知らされました。

だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、

ぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるのです。

（マルコ　2・22）

このままの状態で行くならば私も駄目になるし、教会の内部も分裂するでしょう。新しい上よりの祝福はその地で保つべきであり、妥協することは霊的な死を意味しています。

わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もし私に仕えるなら父はその人に報いてくださいます。

（ヨハネ　12・26）

この集会の神の子供たちは健康で、豊かな実を結んでいる……。

「これが道だ。これに歩め」

（イザヤ　30・21）

みことばの導きは決定的でした。このように次々と毎日みことばで確信へと導いてくださいました。その間、主人にも同じように歴代誌Ⅰの十七章で語ってくださり、「人」にではなく、神様の導きに従う決断が与えられました。その背後には尊いお祈りが捧げられていたことを深く覚え感謝しました。このようにして私たち家族は、結婚記念日に、新しい歩みを始めることになりました。そして私たちは吉祥寺キリスト集会に出席し、その第一回目の礼拝で、次のみことばが与えられました。

わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。（ヨハネ　4・22～24）

そして私たちは、主にある集会のみなさまがたの力強い祈りと、豊かな交りにささえられていました。その年のイースターには、主人も改めて浸礼のパプテスマを受け、主の祝福にあずかりました。そして、真の喜びをもって主に仕える者と変えてくださいました。見えざる主イエス・キリストが共にいてくださり、我が家の隅々にはご自身の御手があります。八十七歳の姑が仏壇を焼き、主の嫌っておられるものが取り去られました。六歳の長女の上にも主の愛が届き、罪を認め告白し、神の子としての歩みをはじめています。これまで経験したすべてのことを益としてくださる主を仰ぎ、生けるまことの神を礼拝する家族に加えられましたことは真の安息です。

私の罪のために十字架にまで従われ、私を救い出してくださった「ほふられた小羊」イエス・キリスト。このお方こそが、私たちの礼拝の中心であることが明確にされました。こうして偶像から立ち返り、生けるまことの神に仕えるようになり、それによって、主の再臨を心から待ち望む信仰を賜った幸いを喜び、感謝しております。

神よ、あなたの御前には静けさがあり、
シオンには賛美があります。

あなたに誓いが果たされますように。
祈りを聞かれる方よ。
みもとにすべての肉なる者が参ります。
咎が私を圧倒しています。
しかし、あなたは、私たちのそむきの罪を
赦してくださいます。
幸いなことよ。
あなたが選び、近寄せられた人、
あなたの大庭に住むその人は。
私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の
良いもので満ちたりるでしょう。

（詩篇　65・1～4）

みこころが地でも行なわれますように

ゴットホルド・ベック

一九三〇年西ドイツシュトゥットガルトに生れる。一九五三年来日。茨城にて開拓伝道の後、一九六四年吉祥寺に導かれる。妻ミンヘンさん、長女ハイデさん、二女ウスラさん、四女ブリギッテさん、五女スーシーさん。

三女リンデさんは一九八〇年、がんのため二十歳で召天。その記録が「実を結ぶ命」の本となる。

▼相生の森田文蔵さん宅の家庭集会の日に、岡本写真館で森田夫妻が写してくださったもの。1984年。



私は子供の時、毎週日曜日に、教会へ行きました。ドイツの国教会では、日曜日に、いつも主の祈りを唱えました。しかし、残念なことに、主の祈りの深い意味を知らず、いわば暗記したことを機械的に復唱する、ということの繰り返しでした。

主の祈りの一節は、次の通りです。

みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。（マタイ　6・10）

いわゆるクリスチャンの大部分は、みこころが天で行なわれるように、地上では自分自身の意志が行なわれるように、と思っています。大部分の人間は、自分の意志を何とかして貫徹しようとします。そこで、一つの問が現われてきます。

人間の意志は、肯定的なものか、否定的なものか？

神のみこころが、天国においてとても大切であるということは、私たちにもよく分かります。しかし地上においては、人間の意志こそが決定的に重要でなければならないのではないかと、私たちは長い間思っていました。意志あれば道あり……人間は何か実現できそうなことに意欲を持ち、努力を重ねれば目的地に達することができるのではないでしょうか。ドイツの詩人フィヒテは、次のように言いました。「子供は祈り、男は意志する」と。現代人の大部分は、多かれ少なかれそのような気持を持っています。

人間の意志は、今まで、多くのことを成し遂げてきました。たとえば、医学のことを考えてみ

ましょう。医学の研究者が強い意志を持たなかったならば、新しい医学の進歩は起らなかったことでしょう。また現代の技術の成果というものがなかったならば、たとえば農業の分野では、どんなことになっていたでしょうか。発展途上国の一部に見られる現象は飢きんではないでしょうか。もし技術の進歩というものがなかったならば、私たちもきっと同じように飢きんを経験することでしょう。これらの進歩の背後には、人間の断固とした意志があったのであり、こうした人間の意志があってはじめて科学技術が進歩したのです。

しかしここで留意しておかなければならないのは、人間は、多くの場合、神のみこころ、神の意志を尋ね求めることをせず、人間の意志と努力で、この地上に進歩がなされたということです。

一方、大人になっても、自分が何を意志しているのかを正しく知ることのできない人々がいます。そのような人は、惨めなものです。多くの人は自分で考えたり行動したりするというよりは、群集の中の一人として、みながやることを行なう、という風に、全体の流れに身をまかせてしまいがちです。みながやっていることが正しいかどうかを考えることなく行動する、つまりみながやっていることは間違いなくいいことではないか、と思うことは、非常な危険を伴います。実際歴史の多くの事例がこのことを証明しています。

ですから、多くの両親は子供たちに次のような忠告をするのです。「あなたはまず、自分のしたいことを知らなければなりません」「よいことをしようという意欲を持たなければなりません。そうすればあなたの人生は確かなものになります」と。

「よいこと」とは何か

そこで、よいこととは何か、が問題になってきます。何がよいものであるかについては、人によって考え方が違い、あまりよく分からず確信も持てないために、多くの場合親も黙りがちです。また、親子の間でも、意見が別れます。世代が違うからです。また、「まじめにがんばりなさい」ということも、一般によく言われます。自分の意志がよいものであれば、それは行なわれてよい、と、多くの人は考えます。

聖書の考え方は違います。

善を行う人はいない。ひとりもいない。（ローマ　3・12）

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。（ローマ　7・18、19）

ここまでに紹介された二つの命題は、お互いに対立しあうものです。現代的な考えかたは「人間は、望みさえすれば、よいこと、正しいことを行なうことができる」と言うのに対して、聖書は「人間のうちによいものは一つもない、人間の行いと意志は、悪にそまっている」と言うのです。どちらが正しいのでしょうか？このことについては、真剣に考える必要があります。

よいことをしたいと思うだけでは充分ではない

人の性質には、いろいろな種類があります。ある人は大変頑固で、石頭と呼ばれます。こういうタイプの人は、はっきりとした目標と自分の意志とをうまく結びつけることができる時に成功し、それもしばしば大成功をおさめます。そういう人はときどき、無一文から始めて、資産家になったり、高い地位を手に入れたりします。偉大なる発明や発見は、そういう種類の人たちのおかげです。

しかし今日、私たちは、いわゆる偉大なる成果とか、人類の進歩とかが問題となる場合に、それが本当によいもの、正しいものであるのかを疑うようになってきました。

創世記には、次のように記されています。

そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。（創世記　1・31）

しかし現在、多くの科学者たちは、次のように言うことでしょう。

「人間は自分たちが造ったすべてのものを見た。見よ。それは動機は非常によかったが、破壊的な結果をもたらした」

たとえば一九世紀にドイツのダイムラー・ベンツがはじめて自動車を造った時、人々は熱狂的に喜びました。大きな音を立て、ゆっくりとしか走れない車でしたが、馬や他の動物の力を借り

ることなく、文字通り自動的に動いたのです。この自動車は、よいことを沢山してくれます。たとえば急病人を大急ぎで病院に運び、生命を救ってくれます。しかし誰でも知っているように、交通事故で生命を失う人の数は、それよりはるかに多いのです。大勢の人が交通事故で死んだり、後遺症に絶えず苦しみ、中には一生植物人間になってしまう人もいるのです。また、ほとんどすべての人が車を持っていることは、たしかに便利なことですが、車の排気ガスは空気を汚染し、多くの土地は高速道路を造るために削られてゆきます。それにガソリンを大量に消費するため、産油国の影響と制約を受けるようになります。もしも産油国が石油の輸出を制限したり、売らなくなったりすると、私たちの豊かな社会は大混乱に陥ります。車ももちろん動かなくなります。

核エネルギーの問題についてはご承知の通りで、これ以上もはや何も言う必要はないでしょう。現在世界の強国が保有する多数の水爆は、ダモクレスの剣、すなわちこの世の歓楽の上に常に迫っている危険となっています。

有名なアルベルト・アインシュタインは、優れた理論物理学によって原子爆弾の発明をうながし、その抑止力が世界戦争を止めさせることができると期待した人です。しかし彼は、後になってから、心から後悔せざるをえませんでした。彼は言っています。「原子爆弾は、悪魔の発明です。そして私たちはそのためのきっかけを与えた人間でした」と。

今日、現代人はいろいろな問題に悩んでいます。その一つは結婚問題であり、大勢の人が解決に苦しんでいるのが実状です。あるいは世代間の摩擦という問題も、混乱の様相を深めています。仕事の問題、職場の問題、会社の問題なども大きな悩みを生み出す原因であり、また、大衆社会

における個人の疎外、孤独ということも大きな問題となっています。実に多くの人々が、正しく理解されていない、という問題で悩んでいます。

一言でいいますと、これらの問題の背後には自分中心の意志が横たわっており、人間のわがままこそが、あらゆる不幸の原因となっています。

次に考えられるのは、違った種類の人間です。この種類の人たちは、自分の意志で得られるものだけでは満足できず、何らかの形で主に祈らざるを得ない人々です。「主よあなたのみこころがなりますように」と。しかしそう祈りながらも、実はお金の問題など具体的な生活のことになると、すべてを主に任せるのではなく、自分の思いを優先させるという人々です。そういう人は、一見、先ほどの頑固な石頭の人と違っているように見えますが、結果的には同じことなのです。

第三番目の種類の人間は、優柔不断な人々です。この種類の人々は、みこころに反することをしてしまいはしないかと心配するあまり、結局何もしないという人々です。

これらの三種類の人間を通しては、主なる神のみこころは行なわれません。

自分の意志を神に明け渡す必要性

ただ単に、「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」と祈るだけではなく、みこころを実際に行ない、全生涯を妥協せず、まっすぐ、喜んで、確信を持って歩むキリスト者は、どこにいるでしょうか。

聖書の中には、いたる所に、そういった人たちが登場します。初めは不安におののいていたイ

エスの弟子たちは、突然、信仰の権威を持ち、みこころを行なう者となりました。その秘訣は何でしょうか。彼らは自分の意志を完全に主なる神に明け渡しました。それによって、彼らの考え、意志、行ないはまったく変えられました。彼らは生甲斐のある目標を持つようになったのです。

ここで明らかなことは、聖書の真理を知ることだけでは充分ではなく、実際に行なわれなければならないということです。また、聖書の真理を宣べ伝えるだけでも充分ではありません。主イエスの厳しいみことばは、次のように言っています。

わたしに向かって、「主よ、主よ。」という者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。（マタイ 7・21）

みこころを行なうということは、きわめて実際的なことがらです。たとえば、今の情況で譲るべきか、固く立つべきか、新しい車を買うべきかどうか、犬を飼うべきかどうか、などなど。たしかに私たちはいろいろな問題について、真剣に考えるべきです。しかしある人は、そういうことはみこころとどういう関係があるのか、と思うかもしれません。

その答えは、自分勝手に行動せず、日常生活において、主なる神のみこころが何であるかを尋ね求めることです。それによって、みこころは何であるかを知ることができ、安心して毎日の生活を送ることができるのです。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何がよいことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新に

よって自分を変えなさい。　（ローマ　12・2）

神のみこころは何か、私たちはそれを知らなければなりません。そして私たちを通して、みこころが行なわれるべきです。しかしそれはどのようにして可能なのでしょうか。

まったく一新された考え方によって

「心の一新によって自分を変えなさい」。このみことばはいったい何を意味しているのでしょうか。一言でいいますと、自分の意志を、主なる神に服従させることです。自分の意志を、神のみこころに明け渡すことを、意識的に行なった人だけが、次のように祈ることができるのです。すなわち、「みこころがなりますように」と。

したがって、ここで問題となるのは、明らかな意志の行為であります。もし私たちが、意識して自分の意志を主に明け渡すならば、主は必ず答えてくださり、み霊を注ぎ、新しい命、今まで知らなかった喜びと確信を与えてくださいます。

新約聖書全体は、こういう素晴らしい知らせで満ち満ちています。すなわち、この世の混乱した邪悪な状態から、主なる神のみこころは何か、すなわち何がよいことで神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るに至る道が存在する、ということです。

神のみこころを行なうためには、まず、みこころが何かを、よくわきまえ知ることが必要です。しかし、私たちは、たった一人でみこころを行なおうとするならば、結果は惨めなものであり

ましょう。主イエスと結びついている時のみ、主のみこころが行なわれるのです。

神のみこころを行なう人生

主イエスは、次のように告白しておられます。

「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です」（ヨハネ　4・34）

「だれでも神のみこころを行なおうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります」（ヨハネ　7・17）

聖書の真理を摑もうとしたり、理解しようとしたりするのではなく、神のみこころを行なおうとすることが大切です。それによって、みこころをわきまえ知るようになり、深い真理を知って喜びに満たされるようになります。

また、主のみこころを行なうことは、必ずしも喜びだけをもたらすものではなく、時には大変な闘いを引き起こすことさえあります。主イエスでさえも、このことを、ゲッセマネの園で経験なさいました。

「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」（ルカ　22・42）

人間になられた主イエスは、ご自分の意志を完全に父なる神のみこころに服従させられました。私たちも自分の意志を、主なる神に服従させなければ、決して主なる神との交わりを持つことができません。服従することによってはじめて、全人類のために贖いのみわざがなされ、救いの道が開かれたことが本当に分かるようになります。

自分の意志を明け渡して主に従う者は、周囲に影響を及ぼします。周囲の人々は、満たされていない自分の状態に気がつくようになり、本当のものに対する飢え渇きを持つようになります。神のみこころが行なわれる所では、人は必ず決断を迫られます。すなわち、心の支えを得るようになるか、さもなければ、前と同じように流され続けていくかのどちらかです。

主なる神のみこころを行なうものは、決して強制される状態にではなく、のびのびとした自然な状態に導き入れられます。みこころに明け渡した意志の結果は、次のようなものです。すなわち、主のみこころは、自然に行なわれるようになるのです。それを、詩篇の作者は次のように表現しています。

わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。（詩篇 40・8）

実際はどうなっているか

ある人は、次のように言うかもしれません。「そんなことは狂信的です。私が思うに、神との交わりなど、この世ではありえません。私の現在の状況において、正しい道とはどのようなものか、職業を変えるべきかどうか、今何をしたらよいか、みこころはどこにあるのか、私にはっき

りと言ってください」と。このような問に対して、私は次のように答えたいと思います。

まず、神に信頼して、一歩一歩従うことが大切です。そのために、主なる神は私たちに理性を与えてくださり、私たちがむつかしい決断をしなければならないときに、いろいろな結果を考えることができるようにしてくださいます。

あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。

（ヤコブ　1・5）

私たちはこのように神に服従して祈ると、願ったものが与えられます。このようにして行動すると、始め考えていたこととは違った結果になることがありますが、静かに振り返ってみますと、それこそが神のみこころであったことに気がつくことがあります。

むつかしい決断を迫られているときには、まわりの主に従う人々ともよく話し合い、主にあって共に祈ることが大切です。さもないと、自分の独断的な決定に陥いりやすいからです。

このようにして、確信を与えられて歩き出しても、止るように合図を受けることがあります。そのときには、もう一度祈って、主のみこころを祈り求めましょう。

キリスト者であるということは、多くの人が思うように、型にはまったものではなく、ある程度の弾力性を持つべきです。こうした霊的な弾力性は、今日のようにあわただしい時代には、特に必要です。もちろん主なる神は、あっちへ導いたりこっちへ導いたり同じ所をぐるぐる導いた

りはなさいません。むしろ主のみこころは、私たち人間が救われて、真理を知るに至ることです。

私たちは、運命に盲目的に身を任せる必要はありません。全能なる神は、真理を知らせ、救いを与え、導こうと願っておられるのです。ですから、キリスト者は、何があっても諦めたり失望したりする必要はありません。

時には逃れ道が見えず、どうしてよいか分らないような状態に陥いることがあるかもしれません。その時主は、次のようにおっしゃってくださいます。

あなたが水の中を過ぎる時も、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。

（イザヤ　43・2）

あなたがたが神のみこころを行なって、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。

（ヘブル　10・36）

神のみこころの中心は、イエス・キリストを信じ、意識的に主により頼むことです。

あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。（ヨハネ　6・29）

主なる神のみこころは、私たちが主により頼み、主に信頼し、主の内に完全な満足を見出すようになることであり、真理をわきまえるようになることです。主イエスは、次のようにご自身を明らかになさっておられます。

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。（ヨハネ　14・6）

最後に、今まで述べてきたことを、簡単にまとめてみましょう。

- 神のみこころを行なうことは、とりわけ、現代人にはまったく無意味ではないにしても、不可能なことのように思われるでしょう。現代人は、何をなすべきかは、自分が一番よく知っていると思っています。
- しかし聖書は、そうではない、と言っています。そうして人間が、自分の力では本当によいことを行なうことができないことを、明らかにしています。
- 私たちは、いろいろな実例によって、主なる神に頼らない人間の意志と行ないが、どのようなものであるかを示し、また、その結果がどのようなものであり、霊的な領域においても多くの間違いを伴うものであるかを示そうとしました。
- 神のみこころを行なうための出発点は、いままでの自己中心、自分本位の道から意識して離れることです。そうすると主なる神は、それに答えてくださり、みこころをわきまえ知る霊をお与えくださいます。
- しかしキリスト者がわきまえ知ることができるのは、どこまでもその一部分であり、主イエスとまみえるときはじめて、すべてが明らかにされます。そのときまでは、神のみこころが私たちの最もよい意志よりも、はるかに偉大ですばらしいという事実に満足すべきです。

「神よ、あなたのみこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」と、真心から祈ることができれば、幸いです。

あとがき

何のために、この「光よあれ」第三集は刊行されたのでしょうか。また、どうして第4集以下の続刊も予定されているのでしょうか。

現在も大勢の方々が、吉祥寺集会や各地の集会を通して、また方々で持たれている家庭集会を通して、まことの生ける神との出会いを体験なさっています。

私たちの集会は、会員制度や月定献金などの制度を持たず、またいわゆる教団から給与を支給されるという牧師制度も持っていません。また、たとえ自分が救われていることを公に示す洗礼を受けたからといって、日曜日の礼拝に出席することを義務づけられているわけでもありません。誰もがまったく自由で、規則や人間関係など何ものによっても制限され束縛されることはありません。宗教は人間を束縛します。しかし、まことの神、主イエスは人に真の自由を与えます。

私たちが主イエスを信じるようになったのは、決して私たちの手柄ではなく、ただ神からの恵みによるのです。そして救われた者は、自発的に、他の人にもこの救いの喜びを知ってほしいという願いを持ちます。主イエスこそが唯一絶対の救い主であることを、どうしても人に伝えたいと願います。そしてまた私たちは、慰められることのない人や、絶望のさ中に立たされている人や、助けを求めている人に主イエスの福音を伝える義務を神のみ前に負っています。

こういうわけで、この本は、一人でも多くの人に主イエスの福音を伝えたいという願いによっ

て、出版されているわけです。

この本でまことの神の救いを証しした人々は、「宗教に入信した人々」ではなく、新しい生まれかわりを経験した、いわゆる新生の体験を持った方々です。聖書はこのことについて次のように言っています。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、すべてが新しくなりました。（Ⅱコリント　5・17）

聖書の脚注を見ると、「そこには新しい創造があります」とあります。つまり、主イエスを信じ受け入れた人が新しく造られた者なのではなく、その人の内におられる主イエスこそが、新しい「創造」なのです。本来神と交わるために神から与えられた人間の霊は、罪によって無感覚な死んだ状態となり、神と交わることができませんでした。ですから人間は、人格的な神と交わりを持ちたいと思っても持つことができませんでした。この、人の内に住まわれるイエス様によって、神に対して死んでいた人間の霊は生かされたものとなるのです。

しかし、そのような新しく生まれかわった信者でさえも、生まれつきの罪の性質を死に至るまで持ち続けます。そして、この罪の性質は罪を犯すことしかできません。ですから、もし、キリスト者の生活の中で「良いもの」が現われれば、それはその人の努力の結果ではなく、その人の内に住まわれるイエスのいのちの結果なのです。

人間が経験しなければならないものは、新生です。しかしそれは、キリスト教に入ることや、

教会の会員になることや、聖書を研究することや、酒、煙草を止めることなどを意味していません。それらすべてのことは、人間が自分の力でできることであり、それは意志の問題です。しかし、「救われる」ということは、これらの人間の意志の領域とはなんの関係もありません。

世の多くの宗教は、あなたに次のように呼びかけます。「自分自身を改善しなさい。一生懸命努力しなさい。そうすればあなたは幸せになり、病気は治り、人生の成功者になれ、天国へも行かれます」と。

または「いい子になりなさい、聖書の知識を貯えなさい。そうすればあなたは救われます」と。しかし、神のみことばは、次のように言っています。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

（箴言　28・13）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

（Ⅰヨハネ　1・9）

あなたが行なう、このことや、あのことが大切なのではなく、ただ神の恵みによって新生を経験することが大切なのです。

最後に、新生について、少しばかり考えてみたいと思います。

「新生」という言葉は、誤解を招きやすい言葉になってしまっています。人々は「新生」という言葉を聞くと、すぐ、「洗脳される」とか「自分でなくなる」とか、そういう否定的な意味を含んでいる言葉のように受け取りがちです。というのも、「新生」とか「救い」という言葉を耳にしたとき、多くの人々の反応は、次のようなものだからです。

1　私は宗教的な資質をまったく持っていません。
2　私はどうしても信じることができません。それでいいのではないでしょうか。
3　私の人生のいろいろな事情が私を気難しい人間にしてしまいました。悪いのは世間です。もう何も聞きたくありません
4　私はわりあい良い人間だと思っています。どうしていまさら新生を経験しなければならないのでしょうか。
5　私はすでに洗礼を受け、教会員にもなっています。それで充分だと思います。
6　七十歳になってから、そのことをよく考えましょう。
7　いろいろなことをやってみたのですが、神を見出すことはできませんでした。
8　私が犯した罪は、あまりにも多すぎるのです。新生など何の役にも立たないと思います。

さらにもっともっと、新生を自分の体験とすることを拒もうとする口実や言い訳をあげてゆくこともできるでしょう。私自身、それらの言葉をいつも聞いています。

しかし、いろいろな口実を使ったとしても、人は、たとえば事故に会って生命の危機に直面した時には、「神さま、助けてください！」と、無意識のうちに神に祈ります。したがって、多く

の人の心の内には、神に対する意識があることは間違いないのですが、改めて「新生」という言葉を聞くと、人はつい腹立たしく思うのです。

断固とした決断

真の「新生」は、実際にはっきりとした結果をもたらします。新生は、まことの神に立ち返ることを要求し、また、人生そのものを完全に変えて、新しい別の方向に導くことができるのです。聖書の中では、「新生」という言葉は、必ず「悔い改めなさい」という言葉と結びついて出てきます。悔い改める、とは、明確な、断固たる決断によって生じる転換を意味します。その転換とは、自己追求や愛のない態度によって特徴付けられたそれまでの人生から、主イエスに従う人生に変わることを意味しています。つまり聖書は、イエス・キリストにあなたの「すべての」生涯を明け渡しなさい、ということを言っているのです。中でも聖書は、「すべての」という言葉に大きな価値を置いています。「まったき心をもって神に立ち返りなさい、あなたの前身全霊をもってあなたの主である神を愛しなさい」と。

ちょうど、中途半端な決断で人生を歩めば、中途半端な結果しか得られないのと同じことが、神に対する歩みについても言えるのです。たとえば家庭の中で、夫婦が中途半端な愛情しか持ちあわせない場合、その夫婦は、真に充実した幸せな結婚生活を決して味わうことができないのと同じことです。

まことの心の支え

今日、人々は、ますます混乱し不確実になってゆくこの世の中で、あらゆるものに心の支えを見出そうとやっきになっています。大勢の人々がマルクス主義やインドの宗教、瞑想、ヨガ、そのほか沢山の新興宗教にすがっています。

しかしこれらのものは、長い目で見ると、まったく実りのない、虚しい結果しか招きません。なぜなら、それらのものは、結局人間の努力に根ざしていて、あれこれを仕方なく行うことであり、いろいろな戒めを人間の力で守ろうとする努力、つまり中途半端な行いに過ぎないからです。

まことの心の支え、新しい創造は、ただ、天地の創造主であるまことの神だけがお与えになることのできるものです。この本の中で、自らの体験を証ししている方々はみな、創り主なる神が多くの人々を、今日も昔も同じように、新しく造り変えてくださることを証言しています。「新生」によって、神と出会った人たちの人生観や価値観がまったく別のものに変えられます。まったく信仰的な資質のなかった人でさえ、新生こそもっとも素晴らしい体験だ、と、心から喜びをもって語ることができるようになります。

主イエスと出会うことによって、人間は今までの自己中心的な人生から開放されるようになります。主イエスを知ることはいつでも可能なことであり、主と祈りによって語ることができる者は、主が生きておられ、自分の人生を新しくしてくださるということを生き生きと経験します。主なる神は、人間がありのままの状態で主イエスのみもとに来ることを望んでおられます。まことの心の支えは、ただ、主イエスのみにあるのです。

決定的なきっかけ

とかく言葉として誤解されがちな「新生」は、しかし実際に、新しい人生への決定的な第一歩となりうるのです。そのためには、何が必要なのでしょうか。

少しばかりの時間、少しばかりの静けさ――それはおそらく今晩にでも持てるはずです。それから必要なのは、救われることは意志の問題である、ということを正しく理解することです。つまり、救われたくない人は救われませんし、救われたい人は簡単に救われます。

聖書の中で、もっとも大切な二つの祈りは、

「神さま、罪人の私をあわれんでください」

「主よ、私は何をしたらよいのでしょうか」

という祈りです。

生けるまことの神は、「すなおになりなさい」という一つのことを要求しておられると、聖書はいっています。

いろいろな疑問や疑いがあるでしょうが、ほんとうに幸せになりたいという人は、すなおになりたい人は、ルカ18・10～14に出てくる取税人のように、「神さま、こんな罪人の私をあわれんでください」と祈ってください。

主なる神は、必ず、このような祈りを聞き届けてくださり、罪を赦してくださり、救ってくださり、義と認めてくださるのです。

私は、聖書に書かれていることを証明しようとは思いませんし、あなたを納得させようとも思いません。しかし主イエスを信じ受け入れて従う人は、決して後悔しないと保証します。

一九八五年　復活祭の日に

ゴットホルド・ベック

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えつつ読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

（次頁へ）

一　みことばの大切さ

ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Ⅰヨハネ5・13　Ⅰペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰

Ⅰヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ53・4～6　Ⅰペテロ2・24　Ⅱコリント5・21

四　血潮の価値

イザヤ1・18　ローマ3・24～25　Ⅰヨハネ1・7　エペソ1・7　Ⅰペテロ1・18～19　黙示12・11

五　確信の根拠

イザヤ43・1、25　イザヤ44・22　ルカ7・48　ヘブル8・12　ヘブル10・17　詩篇103・12　ヘブル13・5～6

六　思いわずらうな

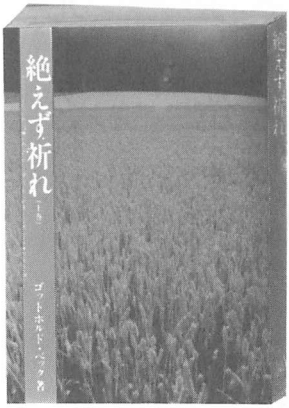
マタイ13・22　マタイ6・25～32　ピリピ4・6～7　Ⅰペテロ5・7～9　詩篇55・22

七　試練の時

ヤコブ1・12　ヤコブ4・7～8　Ⅰコリント10・13　Ⅰペテロ5・8～10　Ⅰペテロ1・5～7　Ⅱコリント12・9～10　ローマ5・3～5　ローマ8・28　イザヤ40・29～31

「絶えず祈れ」のおすすめ

主が提供してくださっている救いをいただくために何よりも大切なのは、「主の御名を呼び求める」ことです。主の御名を呼び求める者は必ず救われます。そして主の御名を呼び求めることとは、つまり「祈る」ことです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々は、今よりもさらに何倍も主に祈るようになります。そして、私たちが祈るための励ましとなるのがこの「絶えず祈れ」の上巻であり、やがて発刊される下巻です。この「絶えず祈れ（上巻）」は、前半がベックさんのメッセージ、真ん中に私たちの祈りに主が答えてくださった証しとして「西軽井沢国際福音センター献堂式のカラーページ特集」が入り、後半に当日のメッセージのいくつかが収められています。



ゴットホルド・ベック著

絶えず祈れ（上巻）

カラー特集　西軽井沢国際福音センター献堂式写真集

価四〇〇円

お申し込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上、〒一八〇武蔵野市吉祥寺本町四―九―一一吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

光よあれ

「私たちは主のもの」

第1集

25人の証し

価三三〇円

山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「klein aber mein から klein aber Dein へ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、染野侍子さんの「主が語られたことは必ず実現する」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、またベックさんのメッセージ「神は愛です」を収録。

第2集

25人の証し

価三五〇円

松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」、古田稔・康子夫妻の「すべてを主の御手に」、アルコール依存症から脱出した染野茂夫さんの「駆けのぼりし主の道」、重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」が掲載されています。

第3集

42人の証し

価三三〇円

江藤善清・恵子夫妻の「天国を望み見て」「主に導かれて」、蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、武井達郎・生子夫妻の「主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな」など。ベックさんの「みこころが地でも行なわれますように」を巻末に収録。

光よあれ

「私たちは主のもの」

第4集

66人の証し

価三五〇円

第5集

67人の証し

価三八〇円

第6集

70人の証し

価三八〇円

ニュースキャスター山川千秋さんの夫人穆子さんの「ここに、主がおられる」、故笹川郁夫・公子夫妻の「もはや私ではなく、キリストが私の中で」「走るべき行程を走り終えた夫」、竹本誠一さんの「主に導かれて七十年」、大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」などが掲載されています。

吉屋和子さんの「その栄光は地に満ちわたれ」、村上誠弁護士と夫人の「主とともに歩む」「キリストにはかえられません」、田中順治・節子夫妻の「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」「数えてみよ、主の恵み」、大城紀美子さんの「今日まで灯し続けた信仰の灯」など。

玉城新正さんの「恐怖から解き放たれて」、新井稔さんの「妻の安らぎとともに救われて」、岡本広海・基子夫妻の「キリストにある愛、喜び、平安」「今あるは神の恵みです」、森島左武郎・久仁子夫妻の「あなたは豊かなところへ…」「栄光と支配がキリストにありますように」ほか。

お申し込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上、〒一八〇武蔵野市吉祥寺本町四―九―一一吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込を。なお一部品切れの節はご容赦ください。

「実を結ぶ命」がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。



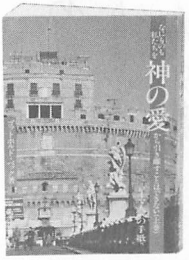
ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

価三三〇円

なにものも私たちを**神の愛**から引き離すことはできない（上・下巻）のおすすめ

ベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」を上巻と下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。



なにものも私たちを

神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

各巻とも価三〇〇円

主イエスは言われた。

**見よ。わたしは、世の終わりまで、
いつも、あなたがたとともにいます。** マタイ28:20

牧師制度がありません

私たちのキリスト集会には牧師制度がありません。会社員、公務員、教師、医者、経営者、芸術家、弁護士、技術者などさまざまな職業を持つ人々が集まって、自発的に責任を分かちあい、一切強制されることなく、純粋に聖書のみことばによりたのみ、主にある交わりを保つものの集いです。

会員制度がありません

もちろん名簿もありません。ですから「会員」になりたくてもなれないのです。いわゆる宗教団体的な制度は一切排除して、主ご自身のみが頭となって働かれ、導かれ、主ご自身が満ち満ちておられることのみを祈り求めている集会です。

組織・会則がありません

私たちの集会には、役員会も、総会も、定例会議も、会則も存在しません。みんなが助けあって重荷を分かちあい、全てが自発的に、喜びをもってなされています。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度がなく、献金は自発的に行なわれ、無記名ですから主のみがご存じです。

日曜礼拝と家庭集会

日曜日には、主の十字架の血潮をしのんでの礼拝があり、その後の福音集会では兄弟たちが交代でメッセージを伝えます。全国には90箇所以上に家庭集会があり、礼拝を行なう所も増えています。

キリスト集会

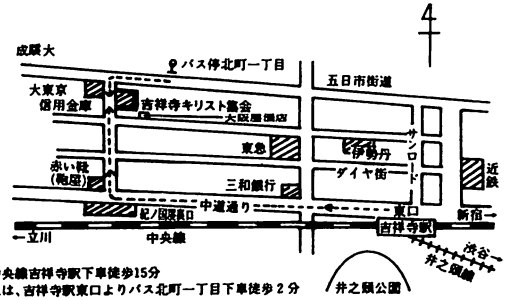
吉祥寺キリスト集会のご案内

私たちは、純粋に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。

吉祥寺キリスト集会

G.ベック　0422-22-2016　東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11〒180

日曜礼拝	10：30　14：00　および19：00
日曜メッセージ	12：00　および15：00
子供日曜学校	9　：00
中高生日曜クラス	9　：00
青年日曜クラス	14：30
火曜学び会	11：00
水曜学び会	19：30
木曜祈り会	19：30
春・夏・秋	西軽井沢バイブルキャンプ

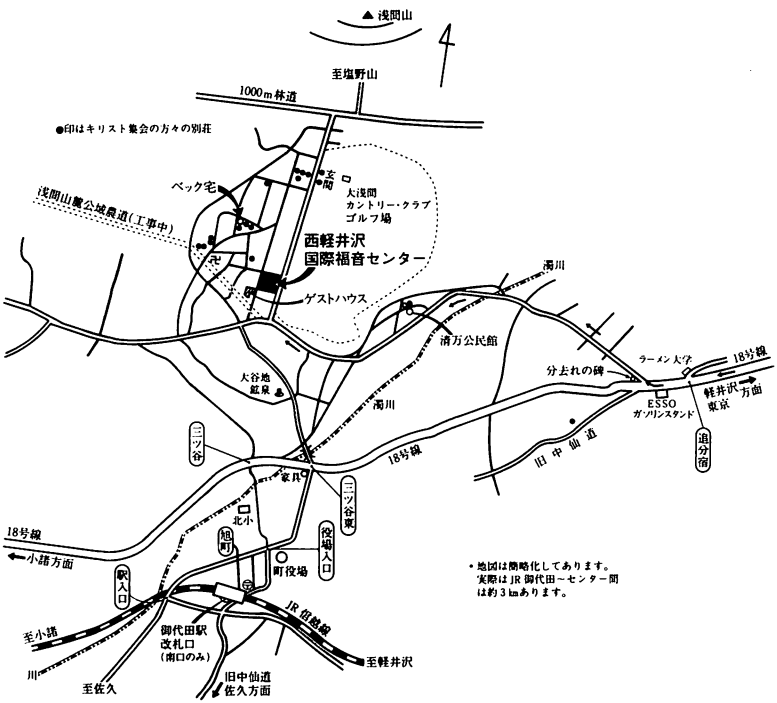


●ＡＡミーティングへのご案内

ＡＡ武蔵野グループは、吉祥寺キリスト集会において、毎週火曜日午後7時よりＡＡグループ・ミーティングを開催しています。アルコール・薬物などの依存症で悩み苦しんでおられる方、またそのご家族の方、知人の方、参加は自由です。ＡＡミーティングは、希望と信仰による回復のステップです。すでに悲惨な依存症から解放され、家族と共に希望と平和に満ちた生活を送っている大勢の人々が心から歓迎いたします。

西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター
0267−32−6400㈹　長野県北佐久郡御代田町塩野４５０−１５〒389-02
西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
0267−32−6444　長野県北佐久郡御代田町塩野４５０−３３〒389-02



• ＪＲ信越線で御代田駅下車。タクシーで約５分＝800円程度。徒歩約45分＝３km。
御代田へは東京上野駅から信越線特急「あさま」で軽井沢乗りかえ、普通で３つ目の御代田駅下車。

• 国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5km先、２つ目の追分宿の信号を越えて10km先、左にESSOのガソリンスタンド、右に「分去れの碑」を右折して約３km。

• 道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。